新潟県埋蔵文化財調査報告書第46

北陸自動車道

糸魚川地区発掘調査報告書Ⅱ

岩野下遺跡

1987

新潟県教育委員会

新潟県埋蔵文化財調査報告書第46

北陸自動車道

糸魚川地区発掘調査報告書Ⅱ

岩野下遺跡

1987

新潟県教育委員会

序

新潟県教育委員会は昭和47年８月以来北陸自動車道の建設に伴い、埋蔵文化財の発掘調査を事業主体者である日本道路公団と協議を進めながら実施してきた。

北陸自動車道は上越市から富山県朝日町までの未開通区間を残すのみで、現在、着々と工事が進められている。昭和63年に予定されている全線開通により、新潟県と富山県以西は高速交通体系で結ばれることになる。

本書は北陸自動車道の建設に伴い、新潟県教育委員会が日本道路公団の委託を受けて実施した、糸魚川市大字大和川字岩野地区に所在する、岩野下遺跡の発掘調査の記録である。

この調査により、縄文時代、奈良・平安時代、中世・近世の遺物が出土し、特に奈良・平安時代の集落の一端が解明された。糸魚川地方における奈良・平安時代の考古学的研究の報告は少なく、これらの資料が当地方の歴史的解明の一助となれば幸いである。

なお、本調査を進めるにあたり、多大なる御協力、御援助を賜った地元糸魚川市及び糸魚川市教育委員会並びに市民の方々、また、格別の御配慮を賜った日本道路公団に対し、ここに深甚なる謝意を表する次第である。

昭和62年３月

新潟県教育委員会

教育長　有磯邦男

例　　言

1．本報告書は新潟県糸魚川市大字大和川字岩野に所在する岩野下遺跡の発掘調査の記録である。発掘調査は北陸自動車道の建設に伴い、新潟県が昭和60年度に日本道路公団新潟建設局から委託を受けて実施したものである。

2．本遺跡の発掘調査は新潟県教育委員会が主体となって、昭和60年７月18日から11月30日までの延74日間実施した。調査体制は以下の通りである。

総　括	新潟県教育庁文化行政課	課　長	高橋　安
管　理	同	課長補佐	田中　浩一
庶　務	同	主　事	高橋　幸治
調査指導	同	埋蔵文化財係長	中島　栄一
調査担当	同	文化財主事	和田　寿久
調 査 員	同	文化財専門員	高橋　保雄
調 査 員	同	文化財調査員	遠藤　孝司

3．本遺跡の名称は「岩野下遺跡」であり、糸魚川市教育委員会発行の遺跡詳細分布調査報告書（1984）にある「岩野Ｄ遺跡」とは、同一の遺跡である。

4．発掘調査に至る経緯については「北陸自動車道、糸魚川地区発掘調査報告書Ｉ」の序説で述べている。

5．遺物の整理、復元作業、報告書作成は新潟県教育庁文化行政課埋蔵文化財係職員があたった。

6．発掘調査の出土遺物は、一括して新潟県教育委員会が保存、管理している。なお、出土遺物の註記記号には遺跡名の「岩野下」から「ＩＮＳ」とした。

7．本報告書の執筆は埋蔵文化財係長中島栄一の指導のもと、次のように分担した。（　）内は、分担箇所を示す。和田寿久（第Ⅳ章２、第Ⅴ章２）、高橋保雄（第Ⅱ章４、第Ⅲ章３、４、５、第Ⅳ章１）、遠藤孝司（第Ⅱ章１、３、第Ⅲ章１、２、３、第Ⅳ章３、第Ⅴ章１）、北村亮（第Ⅱ章２）、高橋昌也（第Ⅰ章１）、竹田和夫（第Ⅰ章２）

8．遺構の略記号は以下のとおりである。

ＳＢ―掘立柱建物、ＳＫ―土坑、ＳＤ―溝、Ｐ―ピット

遺物の実測図や拓本の断面は、須恵器、珠洲焼を黒塗り、他は白抜きとした。

9．遺物の番号は第Ⅳ章２の大半が挿図、写真図版とも通しで統一の番号にした。それ以外はそれぞれの図ごとに付した。

10．第１図の地形図は国土地理院発行、図版１の空中写真はアジア航測株式会社撮影のもの、それ以外の地図は、日本道路公団が測量した地形図を使用した。本書で示す方位はすべて真北とした。磁北は真北から西偏約７度である。

11. 石質の鑑定については新潟県立教育センター地学研究室坂井陽一氏（現県立江南高校）の意見を参考に記述した。

12. 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の諸氏、機関から種々の御指導、御協力を賜った。（敬称略）

青木重孝、小林達雄、小林昌二、石上英一、前川要、土田孝雄、小島幸雄、高橋勉、木島勉（旧姓大森）、糸魚川市教育委員会、青海町教育委員会。

目　　次

第 I 章　遺跡周辺の環境 …… 1
1. 地理的環境…… 1
2. 歴史的環境―糸魚川市域をめぐる10世紀頃の地域概念…… 1
第 II 章　調査の概要…… 4
1. 調査の経過…… 4
2. 確認調査…… 6
3. 遺跡の位置及びグリッドの設定…… 7
4. 層序…… 7
第 III 章　遺　構…… 9
1. 竪穴住居…… 9
2. 掘立柱建物……10
3. 土坑……15
4. 溝……21
5. その他の遺構……22
第 IV 章　遺　物……28
1. 縄文時代……28
A. 縄文土器……28
B. 石器・石器類等……32
2. 古代……37
A. 遺構出土土器……39
B. 遺構外出土土器……44
C. その他の遺物……56
3. 中世・近世……58
第 V 章　ま と め……61
1. 掘立柱建物について……61
2. 奈良、平安時代の出土遺物について……63
引用・参考文献……65

挿 図 目 次

第1図　岩野下遺跡周辺の地形と遺跡…… 2
第2図　調査対象区域図…… 4
第3図　確認調査及びグリッド設定図…… 6

第４図　グリッド模式図…… 7
第５図　土層柱状図…… 8
第６図　竪穴住居実測図…… 9
第７図　ＳＢ１柱穴10土層断面図……10
第８図　ＳＢ１実測図……10
第９図　遺構配置図……折込
第10図　ＳＢ２実測図……11
第11図　ＳＢ３柱穴土層断面図……12
第12図　ＳＢ３実測図……12
第13図　ＳＢ７実測図……13
第14図　ＳＢ５ P240土層断面図 ……13
第15図　ＳＢ５実測図……13
第16図　ＳＢ４実測図……14
第17図　ＳＢ６実測図……14
第18図　土坑実測図(1)……16
第19図　土坑実測図(2)……18
第20図　土坑実測図(3)……20
第21図　溝断面図……21
第22図　集石・焼土実測図……21
第23図　ため池状遺構実測図……22
第24図　ピット配置図……折込
第25図　縄文土器(1)……29
第26図　縄文土器(2)……30
第27図　石器(1)……34
第28図　石器(2)……35
第29図　石器(3)……36
第30図　遺構出土土器(1)……40
第31図　遺構出土土器(2)……43
第32図　遺構外出土土器(1)……46
第33図　遺構外出土土器(2)……48
第34図　遺構外出土土器(3)……50
第35図　遺構外出土土器(4)……51
第36図　遺構外出土土器(5)……52
第37図　墨書土器……54
第38図　刻書土器及び転用硯……55
第39図　灰釉陶器……56

第40図　土錘……57
第41図　フイゴ羽口・鉄製品……57
第42図　寛永通宝……57
第43図　中・近世陶磁器（瀬戸・珠洲系・越前系・白磁・染付・
唐津・越中瀬戸・京焼）……60

表　目　次

第１表　周辺の主な遺跡……2
第２表　ピット説明表……24～27
第３表　掘立柱建物計測一覧……61
第４表　県内古代掘立柱建物の主軸方位と平面積……62

図　版　目　次

図版１　周辺の地形
図版２　1.遺跡遠景（東から）、2.遺跡遠景（西から）
図版３　1.遺構全景（東から）、2.遺構全景（北西から）
図版４　1.発掘風景（南東から）、2.発掘風景（北東から）
図版５　1.遺跡中央部の土層断面・10Ｉグリッド東側（西から）
2.遺跡縁辺部の土層断面・６Ｉグリッド北側（南から）
3.旧流路の土層断面・13Ｊ・14Ｊ・15Ｊグリッド（北東から）
図版６　1.旧流路完掘状況、2.旧流路遺物出土状況
図版７　1.竪穴住居遺物出土状況、2.竪穴住居完掘状況
図版８　1.ＳＢ１完掘状況、2.ＳＢ２完掘状況
図版９　1.ＳＢ３完掘状況、2.ＳＢ３柱穴５土層断面
3.ＳＢ３柱穴８土層断面
図版10　1.ＳＢ５完掘状況、2.ＳＢ６完掘状況
図版11　1.ＳＫ１土層断面、2.ＳＫ１遺物出土状況、
3.ＳＫ２・ＳＫ１完掘状況、4.ＳＫ３完掘状況、
5.ＳＫ12完掘状況、6.ＳＫ23完掘状況
図版12　1.ＳＫ７土層断面、2.ＳＫ７礫出土状況、3.ＳＫ４土層断面、
4.ＳＫ14土層断面、5.ＳＫ８土層断面、6.ＳＫ９土層断面
図版13　1.ＳＫ13土層断面、2.ＳＫ13完掘状況、3.ＳＫ15遺物出土状況
4.ＳＫ15完掘状況、5.ＳＫ20完掘状況、6.ＳＫ22完掘状況
図版14　1.ＳＤ１完掘状況、2.ＳＤ１土層断面、3.集石出土状況、

4.焼土３土層断面、5.ＳＤ３及び周辺の全景
図版15　1.ため池状遺構完掘状況、2.Ｐ240土層断面、
3.Ｐ240遺物出土状況
図版16　縄文土器・石器
図版17　石器・石器類等
図版18　遺構出土土器・須恵器・土師器
図版19　遺構外出土土器(1)・須恵器
図版20　遺構外出土土器(2)・須恵器
図版21　遺構外出土土器(3)・須恵器・土師器・墨書土器
図版22　出土遺物・灰釉陶器・転用硯・土錘・寛永通宝・羽口・墨書土器など
図版23　中・近世陶磁器

第Ⅰ章　遺跡周辺の環境

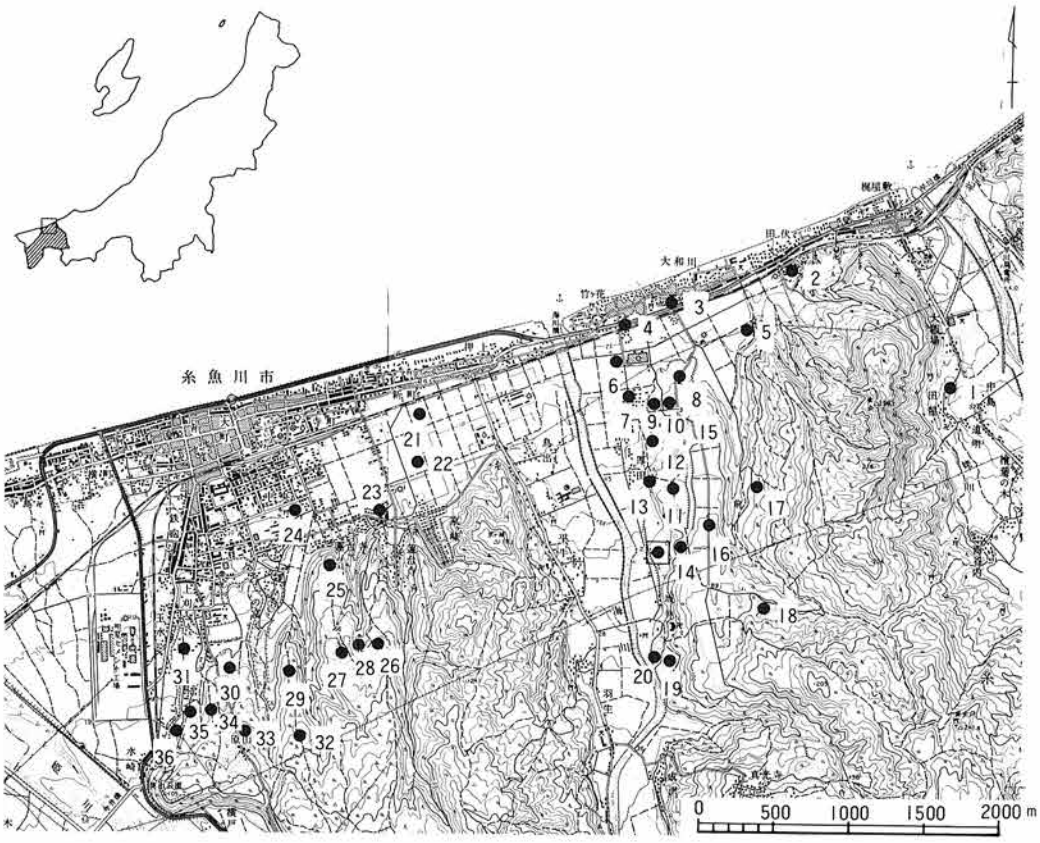
1.　地理的環境

新潟県の西南端に位置する糸魚川市は、西は富山県、南は長野県と境を接し、北は日本海に面している。面積は約467㎢と広大であるが、その大部分が山地で占められ、平地に乏しい。富山･長野両県との境には、標高約3,000m級の白馬連峰が連なり、その北端は急傾斜で日本海に没している。一方、市の南東には焼山をはじめ標高約2,000m級の諸山がそびえ立ち、これらの山々に源を発する海川・早川などの急流がほぼ南北方向に流れている。また、糸魚川一静岡構造線にほぼ沿うように流れる姫川は、水源を長野県安曇郡内にもち源流からの距離に比して勾配が急なため、多量の砂礫を河口付近にまで運搬・堆積して日本海に注いでいる。これら河川の河口付近には、沖積地や３～４段の段丘が形成されており、遺跡の多くはこの段丘上に立地している。中位と高位の段丘面には国指定史跡の長者ケ原遺跡に代表される縄文時代の遺跡が多く、これより低位の段丘面には奈良・平安の遺跡が多く分布している。姫川右岸や海川右岸の中位段丘面上には遺跡の密集する地域がみられ、特に上刈・厚田などの各地区において顕著である。岩野下遺跡は海川右岸に細長く広がる沖積地と、中位段丘にはさまれた低位段丘面上に立地する。段丘面と沖積面の比高は約５ｍである。厚田地区には低位段丘上に岩野Ｃ、中位段丘上に岩野Ａ・Ｂの各遺跡があり、岩野下遺跡東方の中位段丘上には岩野Ｅ・中原Ｂの各遺跡が立地、また南方の坂井地区には坂井Ａ・Ｂの遺跡が立地している。これらの遺跡群に囲まれるようにして本遺跡は存在する。

2.　歴史的環境―糸魚川市域をめぐる10世紀頃の地域概念

糸魚川市域における古代全般の歴史的環境については、既に『糸魚川市史』通史編で詳述されているが、岩野下遺跡と同時期頃の９世紀から10世紀という特定の時期については、その社会像は全国的にも今ひとつ判然としていない。とりわけ10世紀は律令体制がゆきづまり、王朝国家体制の崩壊期とされている。同時に荘園公領体制の成立、確立期にも該当している。気候学的には温暖であった事が検証され、世界的にロットネスト海進期に相当するもので、それは日本列島へも影響を及ぼし、越後国でも見られたと推定されている（山本　1976）。さらに奈良・平安時代は大開発時代であり、生産力が著しく高まったと強調されている（保立　1984）。

社会経済史の中でも特に土地制度の変遷を探っていくと、国―郡―郷（里）という律令制社会における地方支配の体制が10世紀頃から変化し中世的郡郷制という様相を呈していくようである。同じ国でも郡によって行政組織の構成が異なり、郡地域の内部には、①群単位、②倭名抄郷単位、③院単位の３類型が存在していたと推定されている。②は律令国家段階からの伝統を有する郷が国衙に直結する行政単位となったものである。この単位には一部が倭名抄郷単位



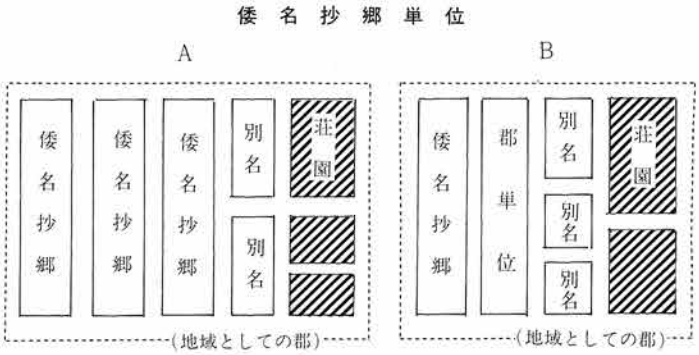
第１図　岩野下遺跡周辺の地形と遺跡 ⊡は岩野下遺跡

（国土地理院　昭和53年発行
2分5千分の1「糸魚川」「梶屋敷」を使用）

No.	遺跡名	時　代	No.	遺跡名	時　代	No.	遺跡名	時　代
1	立ノ内	中世	13	岩野C	奈良・平安・中世	25	後生山	弥生
2	田伏	古墳	14	岩野E	縄文(早～前期)	26	塚ノ腰	縄文（中期）
3	前波	平安	15	中原A	奈良・平安	27	三ツ屋原	縄文（中期）
4	六反田	平安	16	中原	先土器～近世	28	三ツ屋原B	縄文（中期）
5	アワラ	平安	17	小出越	平安	29	四割・杉沢	縄文
6	古屋敷A	平安	18	小畑	縄文	30	新割	平安
7	古屋敷B	平安	19	坂井A	縄文・奈良・平安	31	道者ハバ	奈良・平安
8	山崎A	奈良・平安	20	坂井B	奈良・平安	32	長者ケ原	縄文(早～後期)
9	山崎B	奈良・平安	21	姫御前	古墳	33	苦竹原A	縄文・平安
10	山崎C	奈良・平安	22	笛吹田	古墳	34	原山	縄文～近世
11	岩野A	縄文・奈良・平安	23	館野	古墳・中世・近世	35	鰐口下	平安
12	岩野B	縄文・奈良・平安	24	一の宮	古墳～近世	36	美山	奈良・平安

第１表　周辺の主な遺跡

だけで構成されるものではなく（右図A）、郡単位と倭名抄郷が併存する事はあった（右図B）。ただ、倭名抄郷が史料に見られるからといってそこに倭名抄郷の行政単位を想定するのは早計であり、史料上にはただの地域表示として記されているものもあるとの指摘（坂本　1985）も無視できないであろう。



坂本賞三『荘園制成立と王朝国家』1985より

この点において糸魚川市域は古代にあっては頸城郡の沼川郷に含まれていたと理解されている。しかし、この常識とされている事項についても『糸魚川市史』通史編では、沼川郷は現在の能生町や糸魚川市、青海町まで含めた地域の総称となっており、『新潟県史』通史編第１巻では直江津より越中国に至るまでの海岸地域を想定しており、若干ニュアンスが異なる。つまり、郷域について、厳密に確定するだけの根拠に乏しく、今後の研究成果が期待されるところでもある。

一方、糸魚川市域には平安期に比定される遺跡が20数箇所確認されている。そのうち、これまで発掘調査が行なわれた遺跡は、姫川右岸では、道者ハバ（第１図31以下同様）、原山（34）、新割（30）、左岸では大角地（青海町）、海川右岸の岩野Ａ（11）、前川右岸の小出越（17）などである。中でも道者ハバ遺跡は掘立柱建物、井戸跡などが検出され、緑釉陶器、墨書土器、転用硯などが多数出土しており、一般的な集落ではなく、糸魚川地方の中心的役割をなした官衙や寺院などではないかと推定されている（土田　1986）。

従来、公的性格の建物跡の評価については、官衙イコール国衙、郡衙に収斂される傾向がある。ところが、規模、出土遺物、その他の状況から判断して、政庁といえない中小規模の公的遺跡はどのように位置づけられるのであろうか。例えば、平安期において、これまで殆ど注目されなかったものとして、郡、郷の収納所、検田所の存在があげられる。かつて郡司によって統一的に掌握されていた行政権が検田所、収納所に継承されたとし、在地支配機構のあり方に再検討をせまったこの問題（大石　1970）について各地の公的性格の遺跡に手がかりを求めるのは、無意味ではないと思われる。

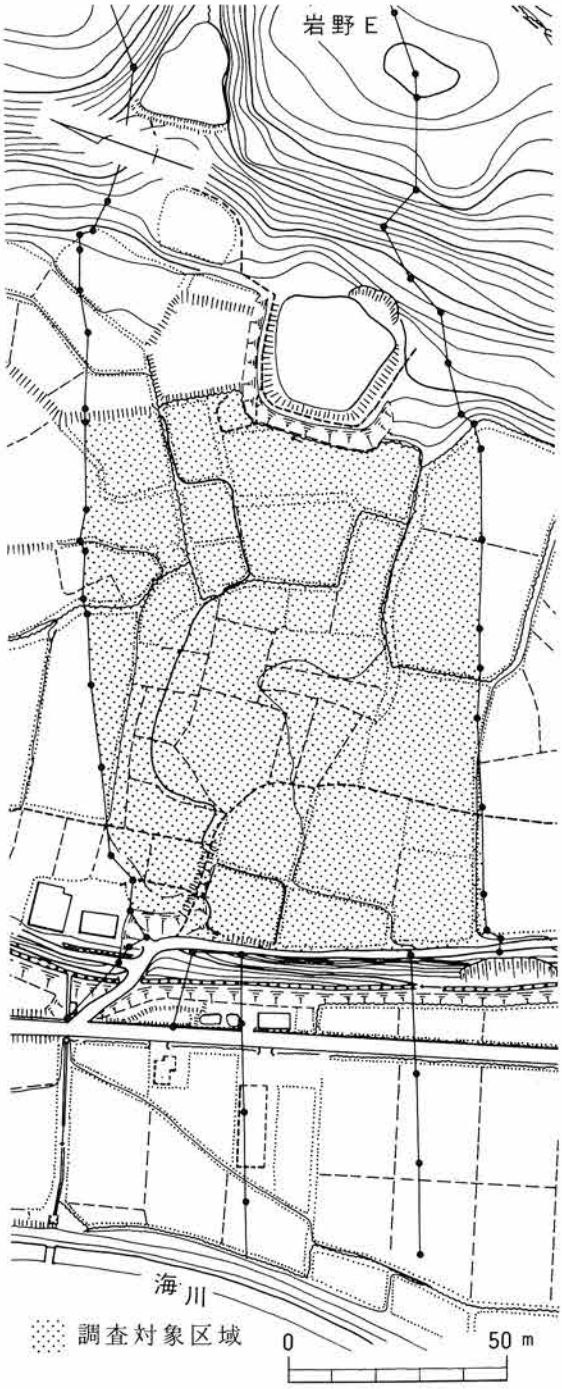
最近の一連の郷里制、郡郷制の見直し（中田　1986・藤井　1986）や年々増加しつつある発掘調査等の成果も含めて、岩野下遺跡は総合的に評価していく必要があろう。

第II章　調査の概要

1.　調査の経過

岩野下遺跡の発掘調査は、小出越遺跡の調査に継続した形で始まり、昭和60年7月18日から11月30日までの延74日間にわたって実施した。調査当初は、調査範囲の北東に位置する沢地（現況荒地）を排土集積場として予定していた。しかし、沢地の試掘調査の結果、奈良・平安時代の土師器・須恵器片を包含する旧流路が埋没している事が確認され、沢地区域も発掘調査の対象範囲とした。当初の調査予定面積6,700㎡が実際9,400㎡となり調査が行われた。調査方法は、確認調査・試掘調査の結果に基づき、表土削平時の排土は仮集積場所に置き、沢地調査終了後、段丘面全域の土を沢地へ投入する事とした。また段丘面の表土は厚さ10cm～20cmで、すぐ地山に到達する。基本的に重機で地山の直上付近まで数回に分けて削平し、その後ジョレンがけを行い遺構を確認し、遺構掘り・写真撮影・実測の順で調査を行った。以下、調査の経過について記載する。

7月18日、調査地区北東(13～16･C～Iグリッド）沢地の草刈りを行い、トレンチ掘りによる試掘調査を開始する。トレンチは幅2mでグリッドの南北軸にそわせて2本、東西軸にそわせて1本設定する。12・13ラインE～I、13･14ラインE～I、14･15ラインE～I、15・16ラインE～Iまでの長さ45m、E・Fライン13～15までの長さ30mである。この結果、層序は4層に識



第2図　調査対象区域図

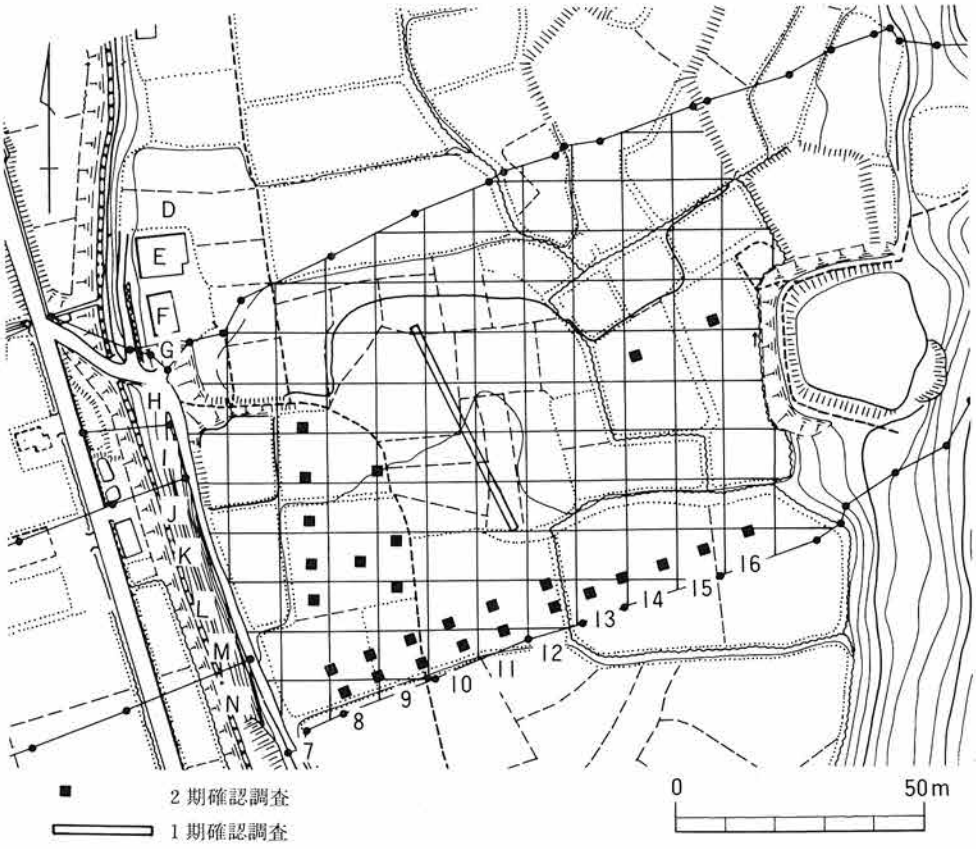
別され、暗褐色粘質土層から数点の土師器・須恵器片が出土した。７月20日、さらに２本のトレンチを14・15ラインＥ～Ｉ、15・16ラインＥ～Ｉの範囲で設定する。15Ｉグリッドより硅岩の石製品が出土する。７月26日、延８日間にわたる手掘りの試掘調査が終了する。東西Ｅ・Ｆラインのセクション図を作成する。この断面より暗褐色粘質土層の落ち込みが確認され、この層は古代の遺物を包含する旧流路の覆土ということがわかった。この時点で沢地域も本調査の対象範囲とする。８月23日、本調査開始。調査区の草刈り、及び法面バケット装着のバックホーにより、グリッドの軸にそって幅１ｍの南北セクション５本を残し表土削平を行い、並行してジョレンによる遺構検出作業を開始する。耕作土から土師器・須恵器・近世陶磁器片が散発的に出土する。並行して旧流路の暗褐色粘質土上面付近まで重機により表土を削除し、手掘りによる遺物検出作業を行う。８月29日、表採時に遺物の出土頻度が比較的高い地区（７～10・Ｅ・Ｆグリッド）でベルトコンベアーを使用し、手作業の表土削平を開始する。出土遺物は須恵器片が多い。９月９日、旧流路（14Ｇ）の底面で須恵器の杯蓋・杯の完形品が集中的に出土し、出土状況等を写真撮影する。９月13日、段丘上（７・８Ｍ・Ｎ）耕作土中から縄文中期の土器片が出土したが、遺物に関連する遺構は検出されない。10月４日、７・８Ｆ・Ｇグリッドよりｓｂ１・２を検出する。遺構掘り開始。10月７日、11・12Ｈ・Ｉグリッドでｓｂ３検出。４間×３間の掘立柱建物である。方形の掘形で、柱痕は検出されない。掘形埋土セクション図を作成し、並行して遺構掘りを行う。終了後、随時写真撮影・図面作成を行う。10月９日７ＭグリッドＳＫ１・２検出。ＳＫ１の埋土より土師器杯の完形品10個体分出土。10月15日、７Ｋ・Ｌグリッドで竪穴住居を検出、プラン検出状況を写真撮影後、十字のセクションベルトを設定し、遺構掘り開始。竪穴住居の東側よりＳＢ５検出、ＳＢ１・２を完掘し実測。10月22日、竪穴住居完掘・写真撮影。ＳＢ５完掘する。写真撮影。10月29日、ＳＢ３完掘し実測終了。10・11Ｇ・Ｈグリッド周辺で検出されたピットでＳＢ３と同一方向で並ぶ４間×２間の建物を確認する。ＳＢ６として写真撮影を行う。10月31日、ＳＢ３の長軸に沿って南東側に廂があることを確認。11月５日、ＳＢ５の建物範囲内をさらに精査したところ、建物範囲内にＰ240検出。土師器の杯や椀が一括出土する。出土状況等の写真撮影・実測を行う。これで段丘上も調査終了し、あとは精査と旧流路の上・下流にあたる盛土地点を発掘するだけとなった。しかし、雨の日が続き、室内作業（遺物の水洗い・註記・接合や図面の整理など）が多くなり、発掘は思うようにはかどらない。11月11日～19日の間、精査により、焼土１～３、ＳＫ７・８、12～16、ＳＤ１～３などを検出。11月22日、遺跡の全景写真撮影。11月28日までに、すべての遺構を完掘し、平面や土層断面などの実測・写真撮影を終了する。11月29日、器材の撤収・梱包を完了する。11月30日、器材・遺物等の搬出を行い、発掘調査を終了する。

2. 確認調査

岩野下遺跡の現況は畑地、水田となっており、作付け等の関係から昭和59年８月27日～９月１日と、稲刈り終了後の11月５日～11月10日の２期に分けて調査せざるをえなかった。

一期確認調査は畑部分に限定されたが、この中でも作物の植付けなど制約が多く、９Ｆから11Ｊにかけて長さ45m、巾２ｍのトレンチ１本を入れたにとどまった。調査に先立つ分布調査では、畑部分で平安時代～中世の土器片の散布が認められ、地元住民からの情報でも６Ｇにある柿の木付近から、過去に須恵器の杯・蓋が出土したという話を得ていた。しかし、長年にわたる耕作によって地山土（ローム）が攪乱された結果、ほぼ全面にわたって赤くなっており、すでに遺物包含層は存在しないものと考えられた。調査の結果、地山には約20cmで達し、土師器の小片１点が出土している。遺構としては、11Ｊでピットらしい小型の落ち込みが１基検出されたのみであった。

二期確認調査は水田部を対象とするため、稲刈り終了後の11月５日～11月10日に実施した。確認坑は、２×３ｍのものを任意に28ケ所設定し、人力により掘り下げた。調査の結果、８～12



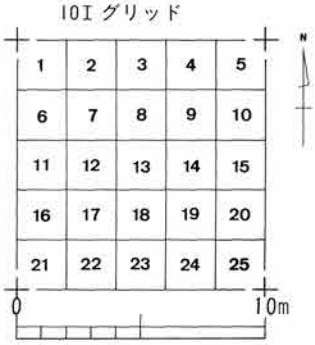
第３図　確認調査及びグリッド設定図

ラインについては現地表から15～25cmで地山面に達しており、包含層は水田造成時にすでに削平されたものと考えられた。10Lでは盛土部より平安時代の灰釉陶器（第39図４）が１片出土しており、当遺跡の性格を知るうえで貴重な資料である。

８ライン以西は水田造成時に盛土がなされたため、20～50cm下で包含層と思われる暗褐色土が約10cmみられ、７Hと７Lからそれぞれ縄文時代中期・奈良～平安時代の土器片が少量ではあるが出土している。また、畑部分と東の段丘崖との間は、地山まで80cm以上と非常に深く、特に14J付近では表土下に70cm以上の盛土がみられ、－165cm以上でも地山が検出されていない。水田造成時に小谷を埋め立てたものと思われ、本調査時に重機による排土を実施し、旧地形を確認する必要があろうと結論された。

3. 遺跡の位置及びグリッドの設定

岩野下遺跡は前述のように、海川の右岸の低位段丘上（標高約25m）に位置し、海川へ向って緩傾斜している。現在は、水田及び畑地で改田により旧地形の景観は変っている。グリッドは高速道上り車線のＳＴＡ№355の基本杭を基点とし、国土地理院の座標軸にそわせ、大グリッドを設定した。大グリッドは東西にｘ軸、南北にｙ軸を組み、10m毎に西から東へ１～、北から南へＡ～とし「10Ｉグリッド」というように組み合わせた。大グリッドはさらに２m方眼ごとに区分し、第４図のように25等分した。小グリッドは「10Ｉ25」のごとく呼称した。

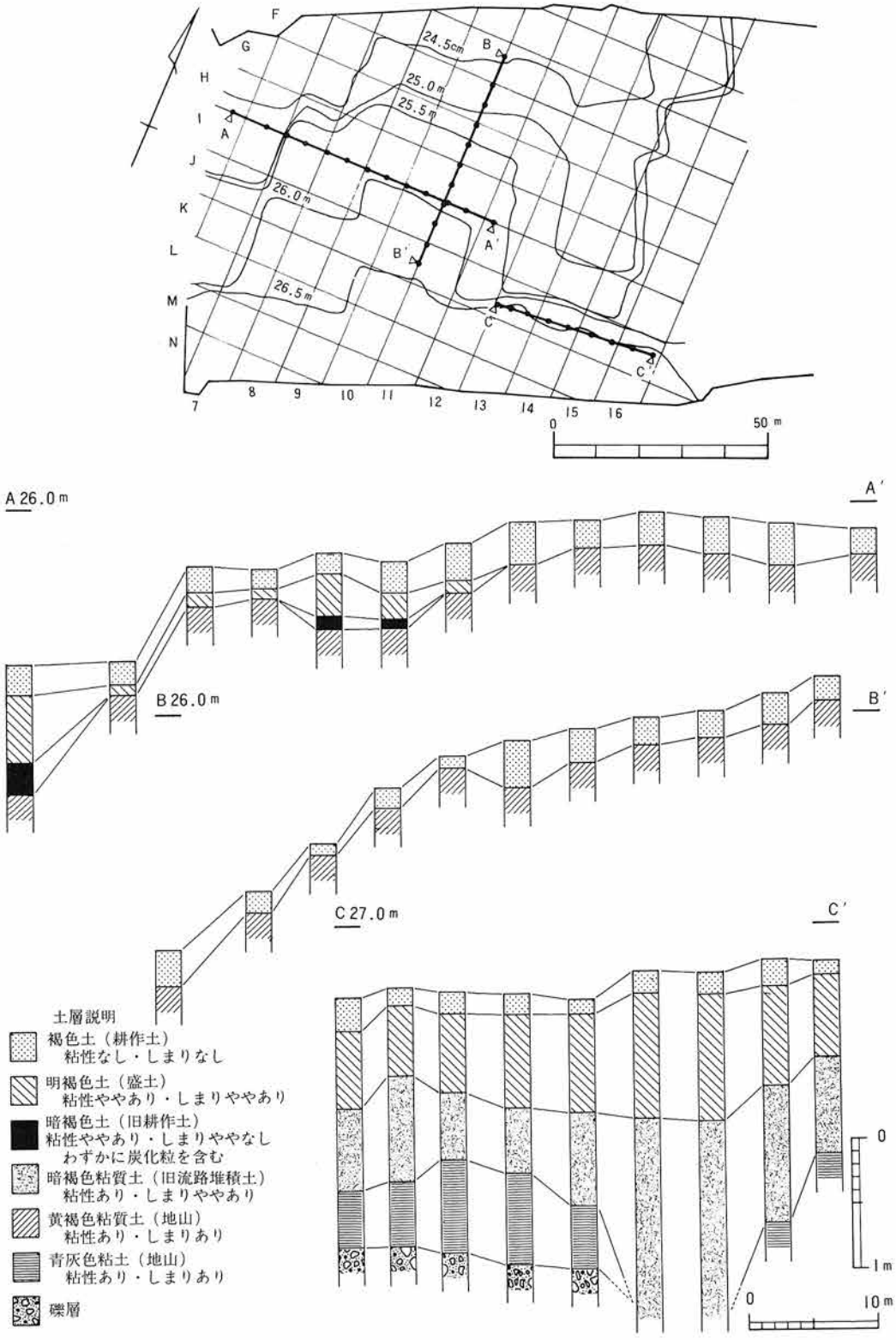


第４図　グリッド模式図

4. 層　　序（第５図　図版５）

本遺跡の層序は海川によって形成された段丘上に位置するが、地表面から地山までの堆積土層は薄く単純であった。基本的には、褐色土（耕作土）約10～40cmを測り、黄褐色粘質土（地山）となる。しかしながら、遺跡の西側と東側の地区で層序の違いが認められた。

遺跡の西側の地区は、段丘崖に向かって緩やかに傾斜する地形であり、褐色土（耕作土）約20cm、明褐色土（盛土）約10～50cm、暗褐色土（旧耕作土）約０～25cmを測り、黄褐色粘質土（地山）となる。遺跡の東側の地区は、旧流路の存在した場所であり、褐色土（耕作土）約20cm、明褐色土（盛土）約60～100cm、暗褐色粘質土（旧流路堆積土）約50～150cmを測り、青灰色粘土（地山）となる。さらに青灰色粘土（地山）を約60cm掘り込むと、一部において礫層が認められた。これらの層序の違いは、地形的な違いによることの他に、畑地から水田への改田に際し、遺跡の中央部の堆積土を削平し、西側と東側の低地へ盛土したことによるものである。


F
G
H
I
J
K
L
M
N
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
24.5cm
25.0m
25.5m
26.0m
26.5m
A
A'
B
B'
C
C'
0
50 m
A 26.0 m
A'
B 26.0 m
B'
C 27.0 m
C'
0
1 m
0
10 m
土層説明
褐色土（耕作土）
粘性なし・しまりなし
明褐色土（盛土）
粘性ややあり・しまりややあり
暗褐色土（旧耕作土）
粘性ややあり・しまりややなし
わずかに炭化粒を含む
暗褐色粘質土（旧流路堆積土）
粘性あり・しまりややあり
黄褐色粘質土（地山）
粘性あり・しまりあり
青灰色粘土（地山）
粘性あり・しまりあり
礫層

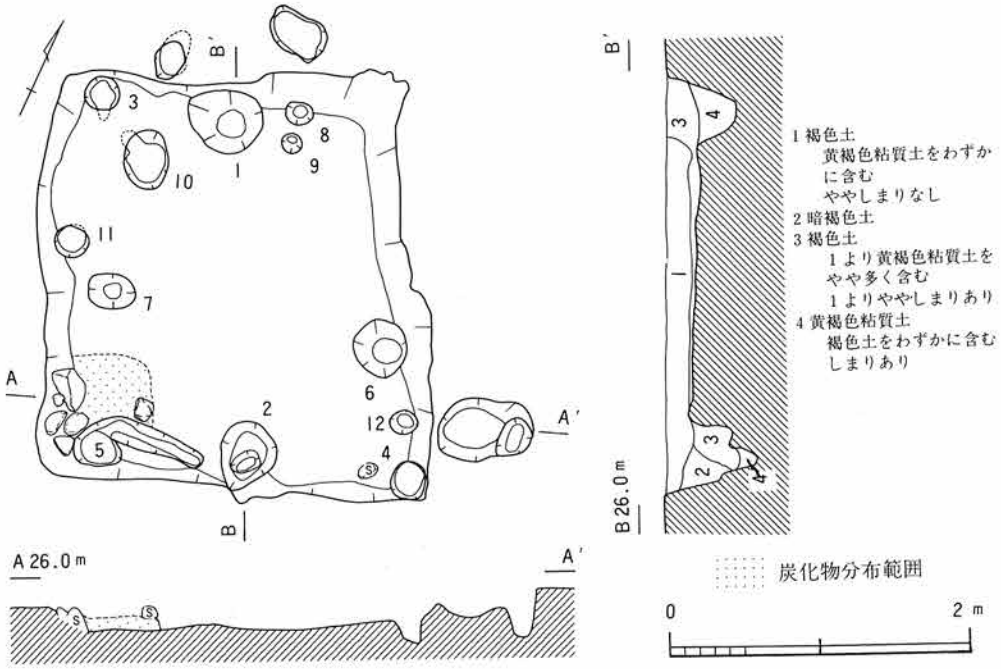
第５図　土層柱状図

第Ⅲ章　遺　　構

岩野下遺跡において検出された遺構は、竪穴住居１基、掘立柱建物７棟、土坑23基、溝３基、ピット409基である。遺構の主体は奈良･平安時代である。掘立柱建物の柱穴から検出された遺物は若干であり、詳細な時期や新旧関係は把握しにくいが、建物群の配列関係等から二群に大別することができる。ＳＢ２・３・６の一群と、ＳＢ１・４・５の一群である。

１．竪穴住居（第６・９図　図版７）

７Ｋ・Ｌグリッドにあり、すぐ東側に主軸方位をほぼ同一にするＳＢ５が位置している。長軸2.70m・短軸2.58mを測り、主軸方位は北31度西を示している。プランは全体的に不整の長方形を呈し、南西隅に竈（かまど）を有する。遺構検出面からの掘り込みは、平均して約20cmと浅いが、壁の立ち上がりは比較的明瞭である。床面は平担であり、柱穴と推定されるピットは１～５である。なお、北東隅に柱穴は検出されなかったが、他の三隅から検出されており、存在していたものと思われる。ほかに大小７基のピットが検出されたが、深さは床面から8.8～18cmと不揃である。ピット１から12までの深さは、１―27cm・２―47cm・３―12.4cm・４―7.5cm・５―14.6cm・６―14cm・７―11.8cm・８―12.7cm・９―8.8cm・10―11.5cm・11―18cm・12―16cmである。



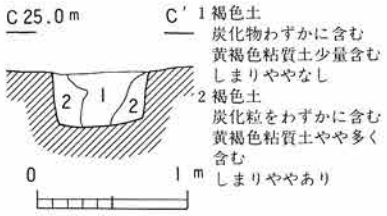
第６図　竪穴住居実測図

南西隅の竈からは、一辺約60cmの範囲で焼土が検出され、掘り上げた後、床面及び壁より礫が5点検出された。この礫は竈の袖石と思われる。西壁に貼り付いている礫を取り上げた段階で土師器の杯片が1個体分検出された(第30図1)。竈は、住居跡埋没段階、或いは耕地整理時に攪乱を受け、原形をとどめていなかったものと思われる。なお、竈周辺の地山面からは煙道と思われる掘り込み等は確認できなかった。

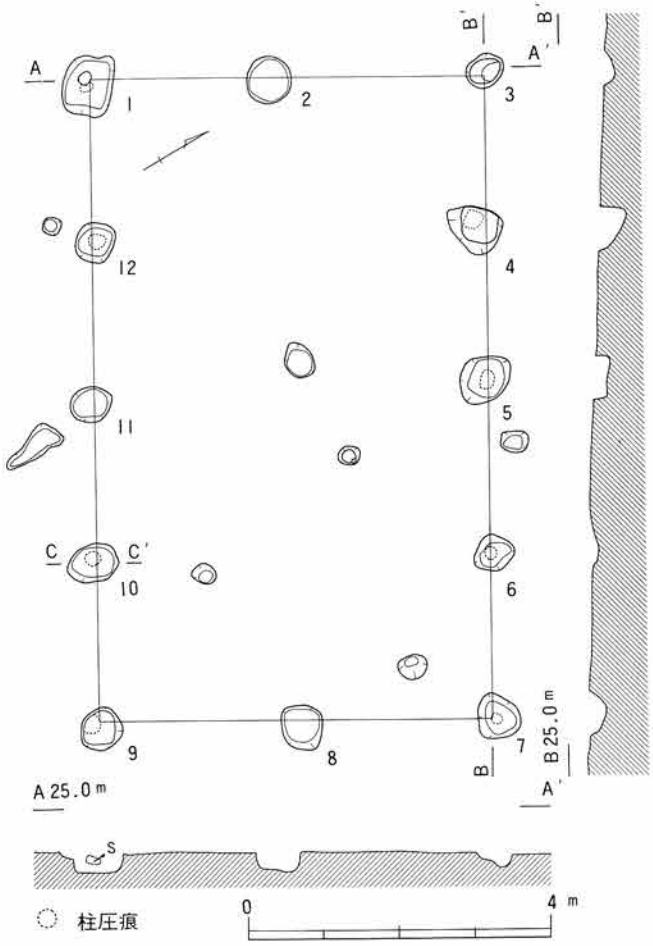
2. 掘立柱建物

SB1 (第7・8図 図版8)

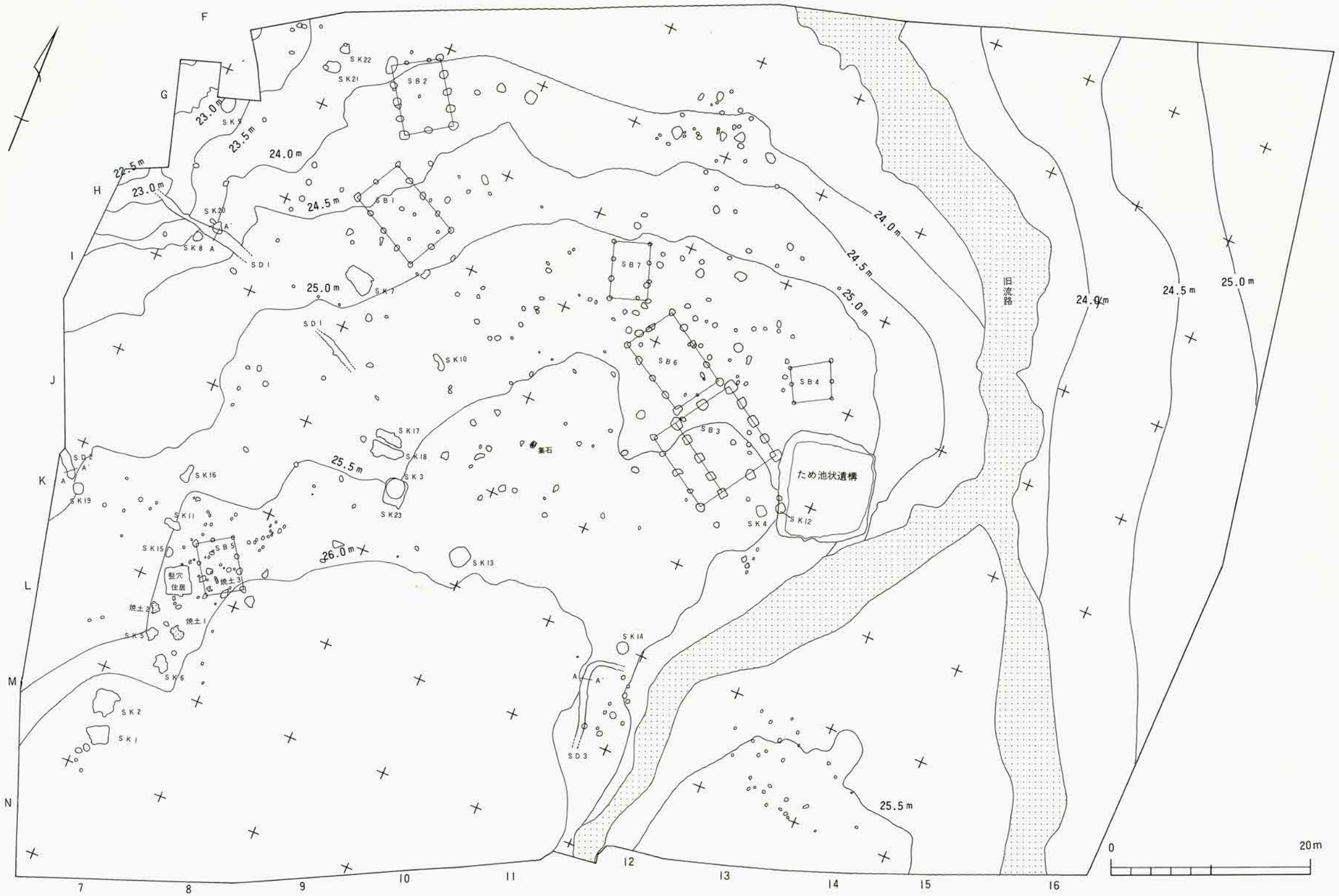
7・8Fグリッドに位置し、桁行4間(8.60m)×梁間2間(5.25m)、面積44.2m²の東西棟建物(北60度西)である。柱間寸法は桁行が西から1.05m・1.05m・1.10m・1.05m、東側の梁間が北から2.70m・2.5mを測る。柱掘形は一辺45～80cmの方形に近いものが多く、深さは柱穴1—29cm・2—25cm・3—15cm・4—35cm・5—20cm・6—8cm・7—20cm・8—25cm・9—50cm・10—35cm・11—42cm・12—23cmを測る。掘り込みの明瞭な柱穴は1・5・8・9・10で、それ以外の柱穴のプランは、明確であるが、立ち上がりは不明瞭である。埋土は、褐色土で黄褐色粘質土を若干含むものが多い。第7図は基本的埋土であり、壁面は底面から垂直気味に立ち上がる。柱痕は検出されなかったが、柱穴1・4・5・6・7・9・10・12の底面から粘土が検出された。この粘土は柱の圧痕とも考えられる。平面的に粘土の範囲は確認されるが、深さは不明瞭である(柱穴内の点線は、粘土の範囲を示している)。出土遺物は柱穴1から土師器壺底部片1点、鉢口縁部・体



第7図 SB1柱穴10土層断面図



第8図 SB1実測図



F
G
H
I
J
K
L
M
N
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
22.5m
23.0m
23.5m
24.0m
24.5m
25.0m
25.5m
26.0m
SK22
SK21
SB2
SK9
SK20
SK8
SD1
SB1
SK7
SB7
SB6
SB4
SB3
SK10
SK17
SK18
SK3
SK23
SK16
SK19
SD2
SK11
SK15
SB5
SK13
SK4
SK12
SK14
SK5
SK6
SK2
SK1
SD3
集石
ため池状遺構
竪穴住居
焼土1
焼土2
焼土3
旧流路
0
20m

第9図　遺構配置図

部片６点（同一個体とも考えられる。第30図７・８）出土したのみである。

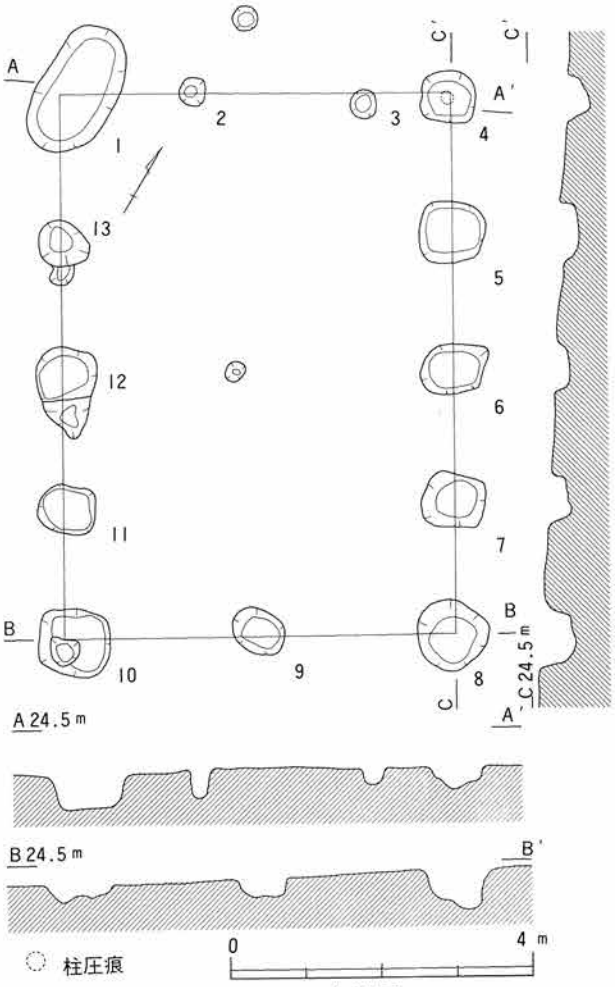
ＳＢ２（第10図　図版８）

７・８Ｆグリッドに位置し、桁行４間(7.15m)で、梁間が北側３間(5.20m)・南側２間(5.20m)・面積37.7㎡の南北棟建物（北30度西）である。柱間寸法は、桁行が北から1.89m・1.78m・1.70m・1.78mで南側の梁間は2.60m等間である。北側の梁間は１間目の西が1.75m、東が1.15m、中央が2.30mを測り、不規則である。柱掘形は柱穴２・３以外は方形に近い形を呈し、一辺56～95cmである。柱穴２・３は円形を呈し、径35cm前後を測る。遺構検出面からの深さは、柱穴１―45.6cm・２―39cm・３―25.4cm・４―30cm・５―22.5cm・６―27.6cm・７―39.5cm・８―15.5cm・９―29.5cm・10―34.8cm・11―27cm・12―20cm・13―12cmを測る。掘り込みの明瞭な柱穴は１・８であるが、底面は平担ではない。掘形の埋土は、褐色土が主体で、黄褐色粘質土を若干含むものがある。柱穴底面には柱痕は検出されなかったが、ＳＢ１と同様に柱穴４から粘土が検出されたのみである。

柱穴１は埋土中にブロック状の黄褐色粘質土が多量に混入し、他の柱穴に比べてしまりがないこと、形状や規模が異なることなどから、新しい土坑によって壊されたものと推定される。遺物は柱穴12より土師器の甕体部片２点出土したのみである。

ＳＢ３（第11・12図　図版９）

11・12Ｆグリッドに位置し、桁行４間(8.35m)×梁間３間(9.15m)、面積76.4㎡の南北棟建物(北55度西)である。西側に廂を有し、当遺跡で最大の掘立柱建物である。柱間寸法は身舎の桁行が北から1.95m・2.20m・2.15m・1.90mで、梁間が3.20m等間である。廂は身舎より2.60m離れ梁間よりやや短い。柱掘形は身舎が方形で、一辺80～110cm・深さ20～50cmと大形である。廂は円形や不整形で径60～80cmを測り、深さは17～22cmと浅い。身舎の柱掘形はいずれも底面からの立ち上がりが明瞭

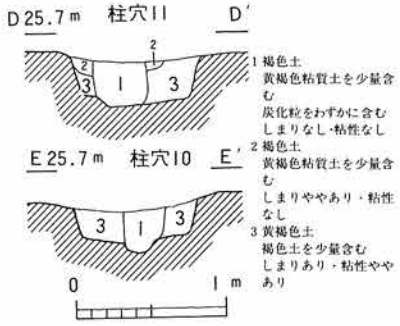


第10図　ＳＢ２実測図

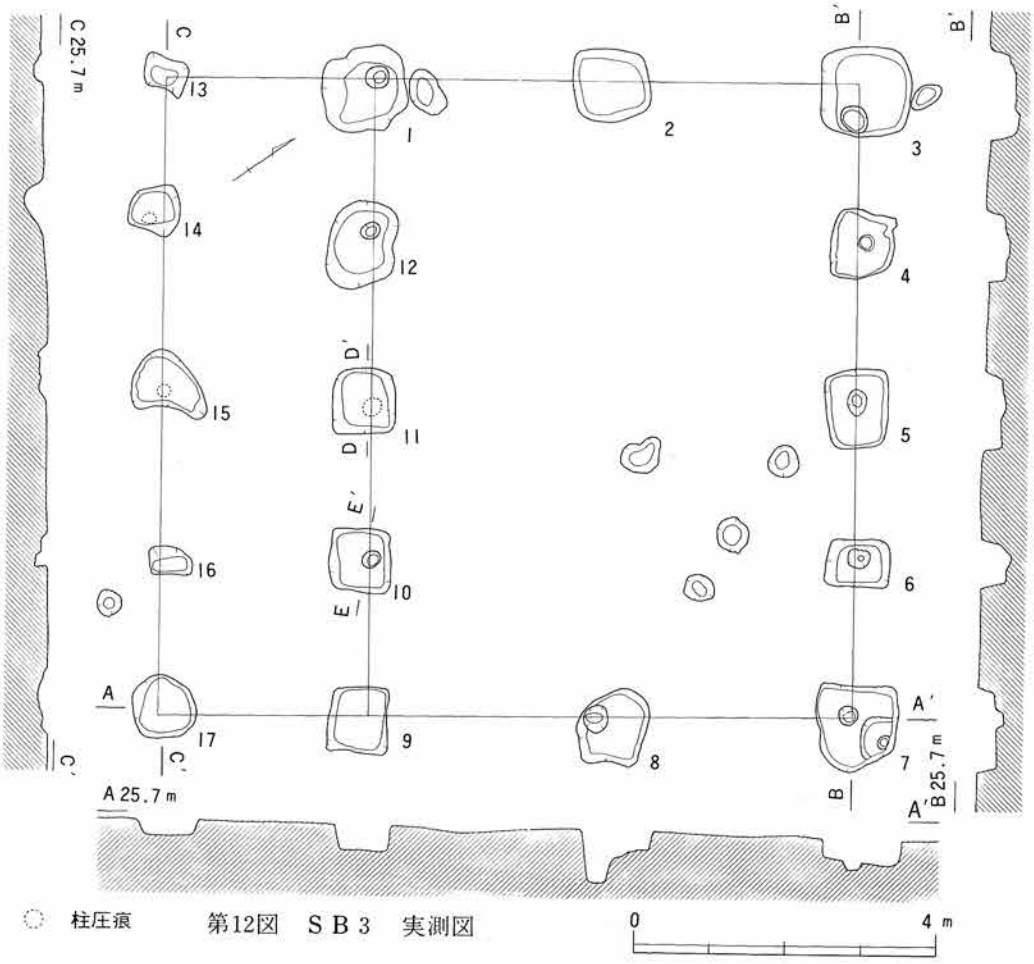
であり、柱痕は径25～30cmである。廂の柱穴からは柱痕は検出されなかったが、柱圧痕の粘土が検出された。掘形埋土は黄褐色土が主体で、なかには良くしまっているものもある。第11図は柱痕や柱圧痕が明瞭なものであり、基本的埋土は２層に識別される。遺物は、柱穴５より土師器の杯底部片や甕体部片など14点、須恵器の杯片１点、甕体部片３点が出土しているが、いずれも細片である（第30図13～15）。

ＳＢ７（第13図）

10Ｇグリッド中央に位置し、桁行３間(5.70m)×梁間１間（3.70m）・面積21.1㎡の南北棟建物（北19.5度西）である。柱間寸法は、桁行が北から1.75m・1.95m・２mと不揃いである。柱掘形は円形で直径32～53cmを測り、深さは21～64cmとアンバランスである。本遺構は他の掘立柱建物に比べて掘り込みは明瞭で、底面から垂直に立ち上がる。



第11図　ＳＢ３柱穴土層断面図



第12図　ＳＢ３　実測図

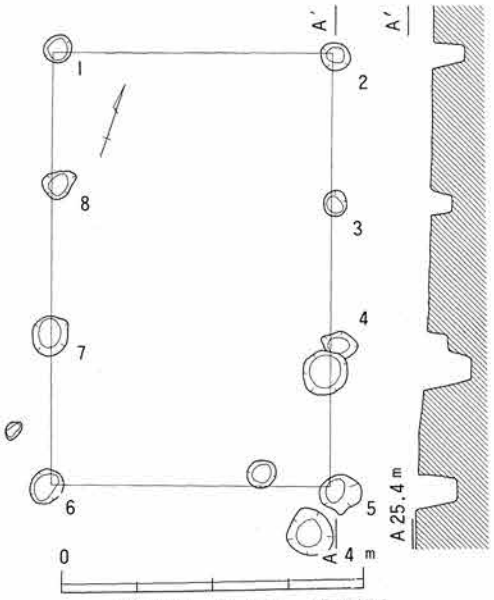
掘形埋土は褐色土を主体とし、全般的にしまりのあるものが多い。出土遺物は無い。

ＳＢ５（第14・15図　図版10）

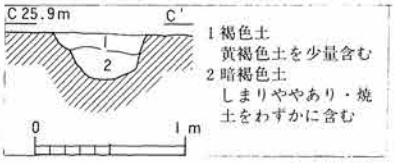
７Ｋグリッドに位置し、桁行３間(5.35m)×梁間２間（3.80m）・面積20.3㎡の南北棟建物（北31度西）である。柱間寸法は、桁行が北から1.95m・1.60m・1.80mで、梁間が西から1.70m・2.10mを測る。柱掘形は円形に近い不整形で、柱穴２・３は径35～40cm、その他の柱穴は50～70cmを測る。遺構検出面からの深さは柱穴１の55cmを除き、13～38cmと浅い。埋土は暗褐色土を基調としている。遺物は柱穴４・５・８から土師器片が、柱穴９から須恵器の甕片、柱穴７からは須恵器と土師器が出土している。柱穴１から土師器の杯片３点と縄文土器片１点が出土した。柱圧痕は検出されなかった。建物範囲の南西隅、柱穴８付近に焼土３が検出された。焼土３の下部面より土師器の杯・甕片が多量に出土している。また、建物範囲内の西側中央付近のＰ240からは、土師器の杯・椀・甕片が一括出土している。Ｐ240は一辺約60cmの方形を呈し、深さ30cmを測り、埋土は２層に識別される。第１層が褐色土を主体とし、黄褐色粒を含み、第２層は暗褐色土で若干の焼土粒が混入している。この第２層上面から遺物が出土している。焼土３及びＰ240は建物範囲内にあり、検出状況・遺物等からＳＢ５に伴うものと考えられる。

ＳＢ４（第16図）

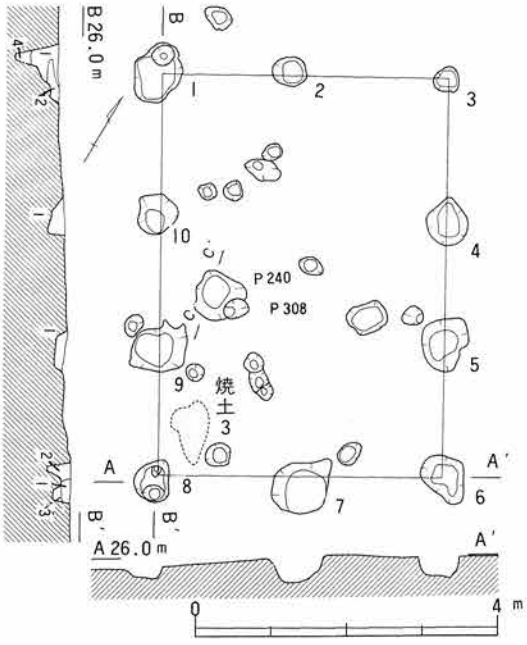
12Ｇグリッドに位置し、２間×１間の南北棟建物である。建物範囲の一辺の長さが西側で3.80m、東側が3.40mで、南側が3.83m、北側が4.25mと歪んだ方形を呈している。方位は東側の軸を基準にして北23度西を示す。柱間寸法は西側がほぼ1.70m等間、東側が北から2.08



第13図　ＳＢ７　実測図



第14図　ＳＢ５　Ｐ240 土層断面図

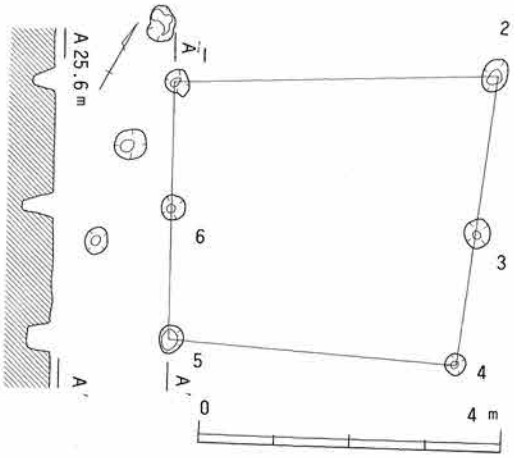


第15図　ＳＢ５　実測図

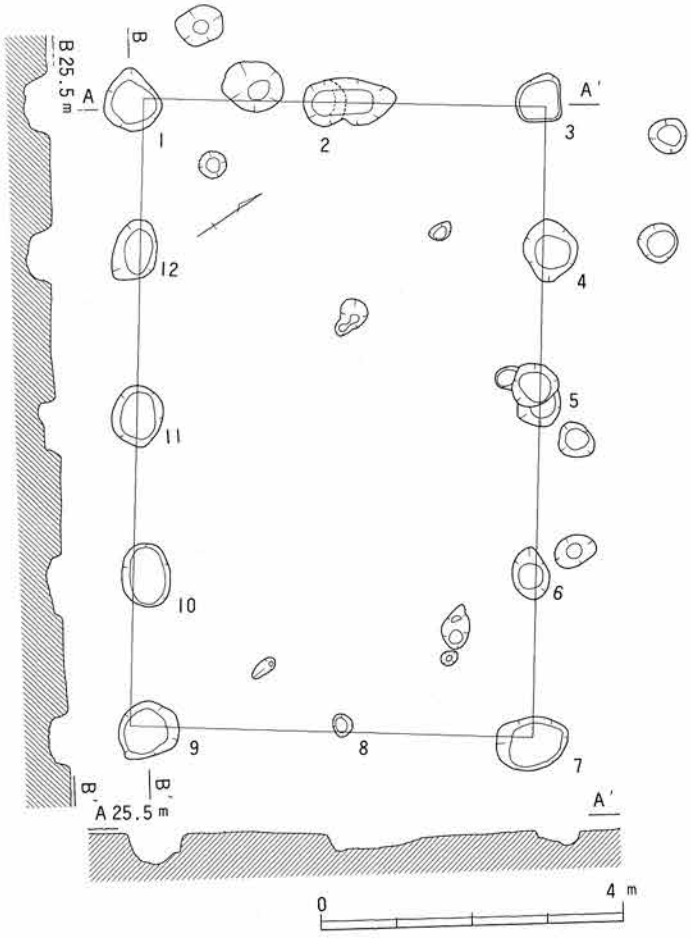
m・1.75mを測る。柱掘形は円形でそれぞれ径30cm前後を測り、深さは23～42.5cmである。掘形埋土は褐色土でしまりがない。柱圧痕は確認できなかった。また遺物は出土していない。面積14.5m²。

ＳＢ６（第17図　図版10）

11G・Hグリッドに位置し、桁行４間（8.30m）×梁間２間（5.30m）・面積43.7m²の東西棟建物（北55.5度西）である。柱間寸法は桁行が西から2.05m・1.95m・2.2m・2.1mである。梁間は西妻で北より2.95m・2.35m、東妻は2.50m・2.80mと不揃いである。柱掘形は方形に近く、柱穴８の径28cmを除き長軸は58～96cmと比較的大きい。遺構検出面からの深さは７～8.2cmを測る。掘形埋土は褐色土を主体とし、しまりが良い。柱圧痕・粘土等は確認できなかった。また遺物は柱穴５より土師器の杯と甕片が数点出土したのみである。なお主軸方位はＳＢ３と同一方向を示している。



第16図　ＳＢ４　実測図



第17図　ＳＢ６　実測図

3. 土　　坑

ＳＫ１（第18図　図版11－１・２・３）

７Ｍグリッド西側に位置し、北西の張り出しを除けば一辺約1.70mのやや歪んだ隅丸方形を呈している。深さは18～25cmで、底面は平担で、東側が比較的浅く、西側へいくにつれて深くなっている。壁は西側が緩やかに立ち上がるほかは、垂直気味となる。覆土は３層に識別されるが、最下層の暗赤褐色土は部分的に存在するものである。遺物は、底面直上付近から土師器の杯が10個体と上層の褐色粘質土から須恵器の甕胴部片１点が出土した（第30図22～29）。

ＳＫ２（第18図　図版11－３）

７Ｍグリッド西側に位置し、すぐ南側にＳＫ１が存在する。プランは不整形で、南北約2.2m、東西２mで、深さは18～30cmを測る。土坑中央付近の底面は平担であるが、縁辺部になると掘り込みが一定しない。覆土は褐色粘質土に黄褐色粘質土が混入するものが基本である。遺物は出土していない。

ＳＫ３（第18図　図版11－４）

９Ｊグリッド西側に位置し、平面形は円形で、径1.75m、深さ57cmを測る。底面は平らで、やや硬化している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁際には幅15cm前後、深さ５cm前後を測る溝が巡っている。覆土は褐色土を基本とし、４層に識別され、レンズ状に堆積している。遺物は土師器の甕片３点、覆土下層より珠洲系陶器の破片１点・礫10点が出土している。

ＳＫ４（第19図　図版12－３）

12Ｉグリッドの北側に位置し、平面形は方形で、長軸1.08m、短軸0.94m、深さ65cmを測る。底面は平らで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は褐色土を基本とし、４層に識別される。遺物は出土していない。

ＳＫ５（第18図）

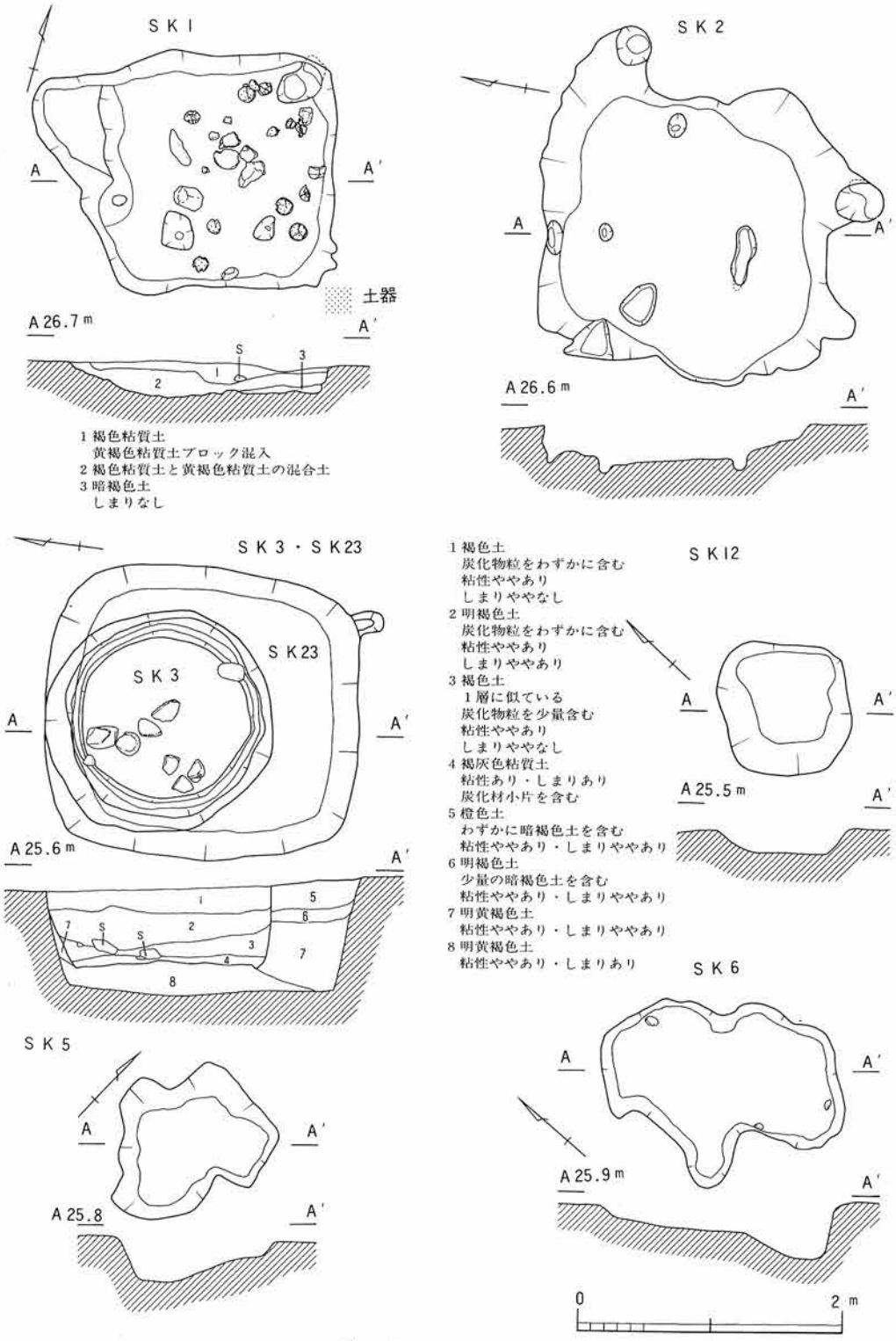
７Ｌグリッドのほぼ中央に位置し、平面形は不整形で、最大幅約1.4m、最小幅約0.7m、深さ11～33cmを測る。底面は南西方向へ緩やかに傾斜し、壁は南西壁で急に、それ以外では緩やかに立ち上がる。遺物は土師器の杯片２点が出土している（第30図36）。

ＳＫ６（第18図）

７Ｌグリッド南側に位置し、平面形は不整形で最大幅約1.9m、最小幅約0.9m、深さ10～43cmを測る。底面は南東方向へ緩やかに傾斜し、壁は南東壁でほぼ垂直に、それ以外では緩やかに立ち上がる。覆土は暗褐色土を基本としている。遺物は北西部の遺構確認面より縄文土器片１点（第26図５）、北東壁際の覆土より縄文土器片数点（第25図１・２）、南東部の覆土下層より縄文土器片数点（第25図３）が出土している。

ＳＫ７（第19図　図版12－１・２）

７Ｈグリッド東側に位置し、平面形は不整形で、最大幅約3.1m、最小幅約1.6m、深さ52cm


SK1
A
A′
土器
A 26.7 m
A′
S
1
2
3
1 褐色粘質土
黄褐色粘質土ブロック混入
2 褐色粘質土と黄褐色粘質土の混合土
3 暗褐色土
しまりなし
SK2
A
A′
A 26.6 m
A′
SK3・SK23
SK23
SK3
A
A′
A 25.6 m
A′
1
2
3
4
5
6
7
8
S
1 褐色土
炭化物粒をわずかに含む
粘性ややあり
しまりややなし
2 明褐色土
炭化物粒をわずかに含む
粘性ややあり
しまりややあり
3 褐色土
1層に似ている
炭化物粒を少量含む
粘性ややあり
しまりややなし
4 褐灰色粘質土
粘性あり・しまりあり
炭化材小片を含む
5 橙色土
わずかに暗褐色土を含む
粘性ややあり・しまりややあり
6 明褐色土
少量の暗褐色土を含む
粘性ややあり・しまりややあり
7 明黄褐色土
粘性ややあり・しまりややあり
8 明黄褐色土
粘性ややあり・しまりあり
SK12
A
A′
A 25.5 m
A′
SK5
A
A′
A 25.8
A′
SK6
A
A′
A 25.9 m
A′
0
2 m

第18図　土坑実測図(1)

を測る。底面は中央部が緩やかにくぼみ、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は暗褐色土を基本とし、2層に識別され、レンズ状に堆積する。遺物は土師器の杯片1点、南壁際の遺構確認面より土師器の甕底部片1点（第30図37）、中央部付近より礫約30点が出土している。

ＳＫ８（第19図　図版12―５）

６Ｈグリッドのほぼ中央の西斜面上に位置し、平面形は楕円形で、長径1.06m、短径0.81m、深さ15cmを測る。底面は西側に向かって緩やかに傾向し、北側と南壁際にはピットを有し、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は褐色土と明褐色土に識別され、レンズ状に堆積している。遺物は出土していない。

ＳＫ９（第19図　図版12―６）

６Ｇグリッドの西側に位置し、平面形は楕円形で、長径1.69m、短径1.33m、深さ23cmを測る。底面は平らで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は褐色土を基本とし、単層である。遺物は出土していない。

ＳＫ10（第19図）

９Ｈグリッドの南西隅に位置するが、水道管が埋設されており完掘することはできなかった。平面形は不整形で、最大幅約1.8m、深さ42cmを測る。底面は北西方向へ緩やかに傾斜し、北西壁際、南東壁際にはピットを有する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は出土していない。

ＳＫ11（第19図）

７Ｋグリッドの西側に位置し、平面形は不整長方形で、長軸約1.8m、短軸約0.8m、深さ17cmを測る。底面は平らで、壁は急傾斜で立ち上がり、覆土は暗褐色土を基本としている。遺物は縄文土器片約20点が出土している（第26図12・24・27）。

ＳＫ12（第18図　図版11―５）

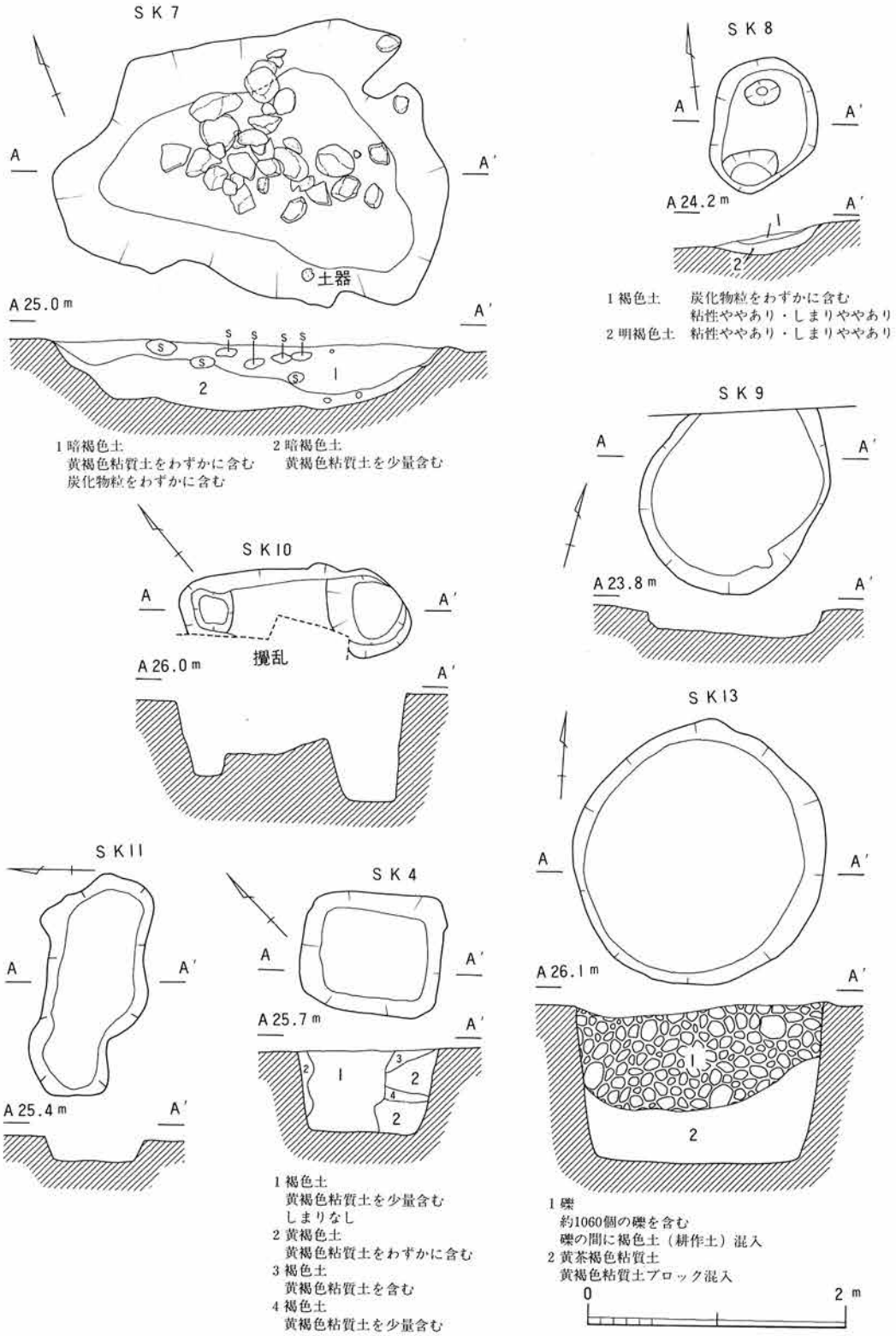
12Ｉグリッドの北側に位置し、ため池状遺構に接している。平面形は不整方形で、長軸0.98m、短軸0.95m、深さ23cmを測る。底面は平らで、壁は緩やかに立ち上がり、覆土は褐色土を基本としている。遺物は土師器の杯片４点、須恵器の坏片２点、杯蓋片４点が出土している（第30図30～35）。

ＳＫ13（第19図　図版13―１・２）

９Ｊグリッドの東側に位置し、平面形は円形で、径1.97m、深さ122cmを測る。底面は平らで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は２層からなり、上層は礫が約1,060個混入する層で下層は黄茶褐色粘質土層である。遺物は上層より江戸時代の所産と思われる染付の破片数点、下層より灰釉陶器の椀の破片１点が出土している。

ＳＫ14（第20図　図版12―４）

11Ｊグリッドの南側に位置し、平面形は円形で、径1.23m、深さ77cmを測る。底面は平らで壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は暗褐色腐植土、腐植木片、白い石灰状の塊が混合した土である。遺物は江戸時代の所産と思われる染付皿の破片１点が出土している。覆土の様子、出土


SK7
A
A'
土器
A 25.0 m
S
1
2
1 暗褐色土
黄褐色粘質土をわずかに含む
炭化物粒をわずかに含む
2 暗褐色土
黄褐色粘質土を少量含む
SK8
A 24.2 m
1 褐色土　炭化物粒をわずかに含む
粘性ややあり・しまりややあり
2 明褐色土　粘性ややあり・しまりややあり
SK9
A 23.8 m
SK10
A 26.0 m
攪乱
SK11
A 25.4 m
SK4
A 25.7 m
3
4
1 褐色土
黄褐色粘質土を少量含む
しまりなし
2 黄褐色土
黄褐色粘質土をわずかに含む
3 褐色土
黄褐色粘質土を含む
4 褐色土
黄褐色粘質土を少量含む
SK13
A 26.1 m
1 礫
約1060個の礫を含む
礫の間に褐色土（耕作土）混入
2 黄茶褐色粘質土
黄褐色粘質土ブロック混入
0
2 m

第19図　土坑実測図　(2)

遺物より近世以降の遺構と推定される。

ＳＫ15（第20図　図版13―３・４）

７Ｋグリッドの西側に位置するが、水田の段切りで、西側は破壊を受けている。平面形は不明で、最大幅約1.0m、深さ33cmを測る。底面は平らで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は褐色土と暗褐色土を基本とする２層に識別され、レンズ状に堆積する。遺物は２層上面より土師器の完形杯３点、杯片１点が出土している（第30図38～40）。

ＳＫ16（第20図）

７Ｊグリッドの南西隅に位置し、平面形は不整形で、最大幅約1.8m、最小幅約0.4m、深さ21～109cmを測る。底面は凹凸が激しく、壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は縄文土器の破片11点が出土している。

ＳＫ17（第20図）

８Ｉグリッドの南東隅に位置するが、試掘溝で東側の一部は破壊を受けている。平面形は不整長方形で、長軸約2.9m、短軸約0.8m、深さ41cmを測る。底面はほぼ平らで、壁は急傾斜に立ち上がる。覆土は褐色土を基本とし、単層である。遺物は出土していない。

ＳＫ18（第20図）

８Ｉグリッドの南東隅に位置するが、試掘溝で東側の一部は破壊を受けている。平面形は不整長方形で、長軸約3.3m、短軸約1.0m、深さ33cmを測る。底面はほぼ平らで、壁は北壁では急傾斜に、南壁では緩やかに立ち上がる。覆土は褐色土を基本とし、単層である。遺物は出土していない。ＳＫ17・18は並列し、形状・覆土が非常に近似している。

ＳＫ19（第20図）

６Ｋグリッドの西側に位置し、平面形は不整方形で、径約1.1m、深さ21cmを測る。底面は中央部がややくぼみ、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は暗褐色土を基本とし、単層である。遺物は出土していない。

ＳＫ20（第20図　図版13―５）

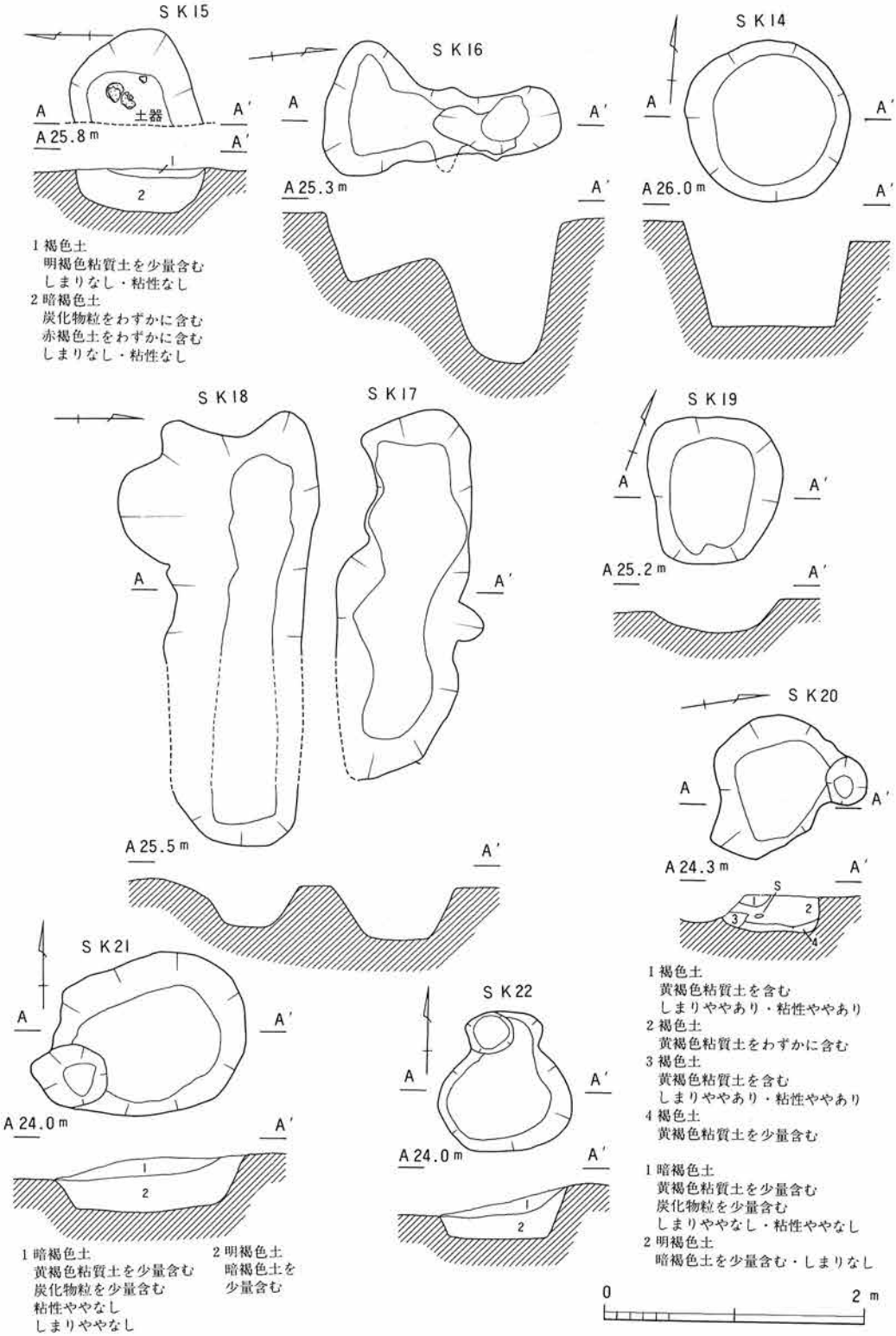
６Ｈグリッドのほぼ中央部に位置し、南側はＳＤ１に切られている。平面形は不整形で、最大幅約1.7m、深さ19cmを測る。底面はほぼ平らで、壁はほぼ垂直に立ち上がり、北側にピットを有する。覆土は褐色土を基本とし、４層に識別される。遺物は出土していない。

ＳＫ21（第20図）

６Ｆグリッドの東側に位置し、平面形は不整楕円形で、長径1.68m、短径1.19m、深さ41cmを測る。底面は平らで、壁は急傾斜に立ち上がり、西側にはピットを有する。覆土は暗褐色土と明褐色土を基本とする２層に識別され、レンズ状に堆積している。遺物は出土していない。

ＳＫ22（第20図　図版13―６）

７Ｆグリッドの西側に位置し、平面形は不整形で、最大幅約1.1mを測る。底面は平らで、壁は急傾斜に立ち上がり、北側にはピットを有する。覆土は暗褐色土と明褐色土を基本とする２


SK15
土器
A
A'
A 25.8 m
1
2
1 褐色土
明褐色粘質土を少量含む
しまりなし・粘性なし
2 暗褐色土
炭化物粒をわずかに含む
赤褐色土をわずかに含む
しまりなし・粘性なし
SK16
A 25.3 m
SK14
A 26.0 m
SK18
SK17
A 25.5 m
SK19
A 25.2 m
SK20
A 24.3 m
S
1
2
3
4
1 褐色土
黄褐色粘質土を含む
しまりややあり・粘性ややあり
2 褐色土
黄褐色粘質土をわずかに含む
3 褐色土
黄褐色粘質土を含む
しまりややあり・粘性ややあり
4 褐色土
黄褐色粘質土を少量含む
SK21
A 24.0 m
1 暗褐色土
黄褐色粘質土を少量含む
炭化物粒を少量含む
粘性ややなし
しまりややなし
2 明褐色土
暗褐色土を
少量含む
SK22
A 24.0 m
1 暗褐色土
黄褐色粘質土を少量含む
炭化物粒を少量含む
しまりややなし・粘性ややなし
2 明褐色土
暗褐色土を少量含む・しまりなし
0
2 m

第20図　土坑実測図 (3)

層に識別され、レンズ状に堆積している。遺物は出土していない。

ＳＫ23（第18図　図版11－６）

９Ｊグリッドの西側に位置し、ＳＫ３の下に存在し、これよりも古い。平面形はほぼ方形で、長径2.39m、短径2.19m、深さ83cmを測る。底面は平らで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は４層に識別されるが、暗褐色粘質土によく似た土であり、埋土と推定される。遺物は出土していない。

4.　溝

ＳＤ１（第９図・第21図　図版14－１・２）

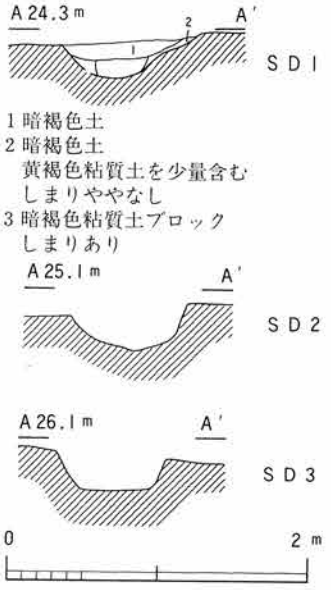
５Ｈ・６Ｈ・７Ｉ・８Ｉグリッドの東西に延び、延長約13.4mを測る。両端は掘り込みが浅く、検出されなかったが、さらに延びていたものと思われる。掘り込みのしっかりしたところでは、幅約0.9m、深さ約20cm前後を測り、壁が緩やかに立ち上っている。また、覆土は暗褐色土を基本とし、３層に識別され、レンズ状に堆積している。底面は地形に合わせ西に向かって低くなる。遺物は礫数点、土師器の破片数点が出土している（第31図58・59）。

ＳＤ２（第９図・第21図）

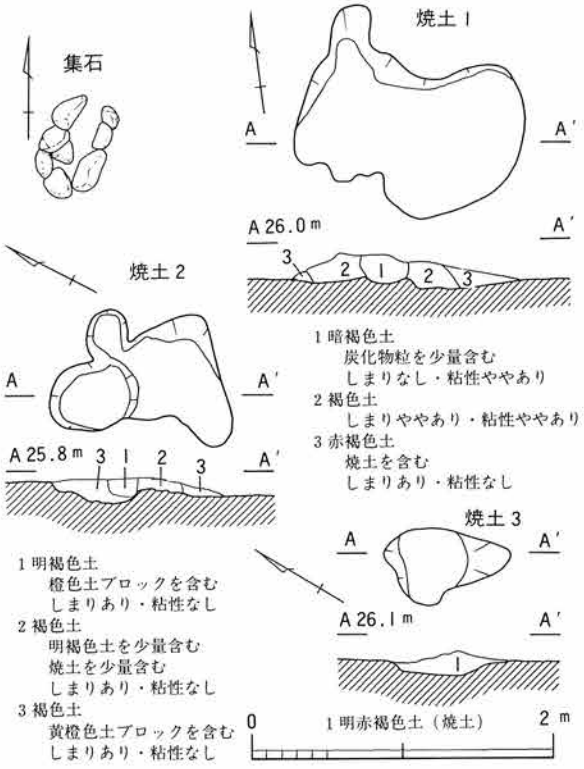
５Ｋグリッドに位置し、延長約3.0mを測り、調査区域外の北西になお延びている。幅約0.8m、深さ30cm前後を測り、壁は緩やかに立ち上がる。底面は北西に向かって低くなる。覆土は暗褐色土を基本とし、単層である。遺物は出土していない。

ＳＤ３（第９図・第21図　図版14－５）

11Ｋグリッドの南北に延び、北側でほぼ直角に東へ曲がり、延長約10.2mを測る。11Ｌグリッドでは検出されなかったが、なお延びていたものと思わ



第21図　溝断面図



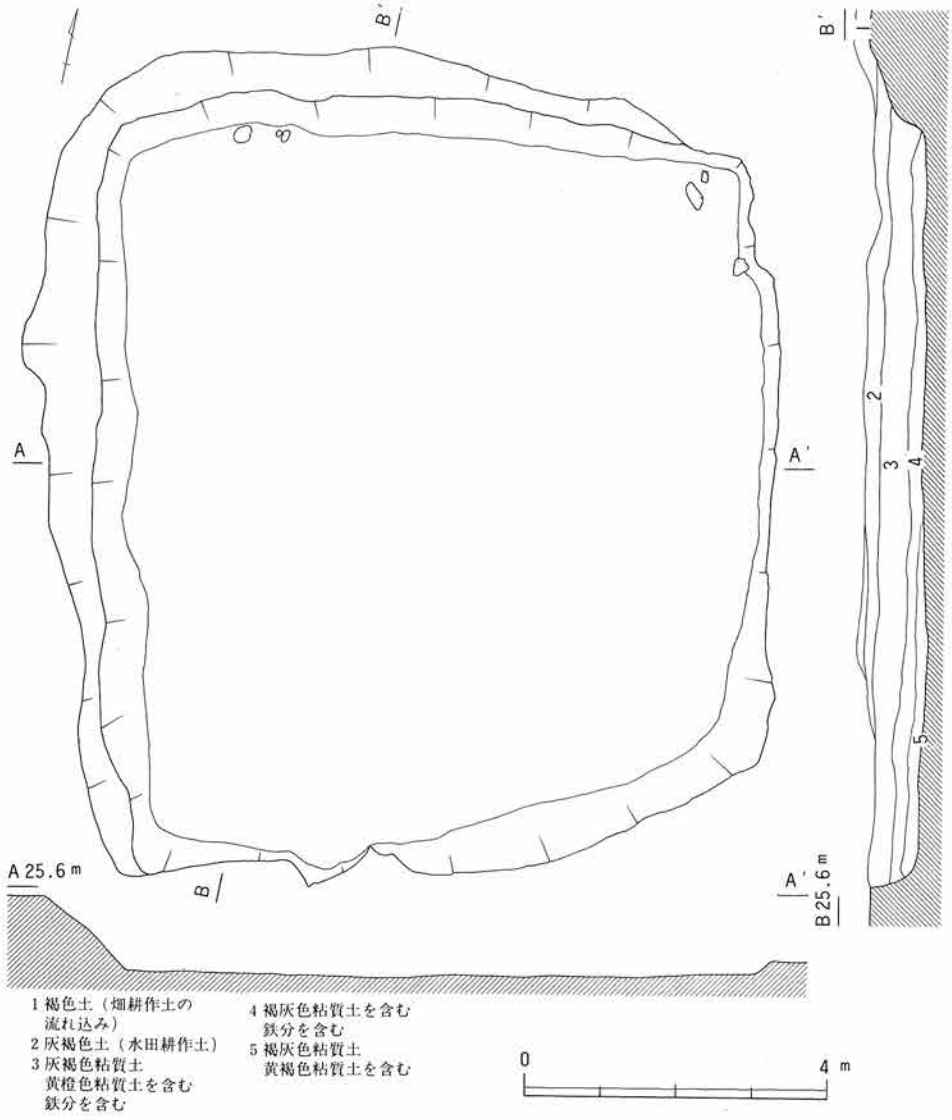
第22図　集石・焼土実測図

れる。掘り込みのしっかりしていたところでは、幅約0.7m、深さ20cm前後を測り、壁は急傾斜で立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面は地形に合わせ北に向かって低くなる。覆土は暗褐色粘質土を基本とする単層である。遺物は土師器の杯片14点、須恵器の杯片1点が出土している。

5. その他の遺構

集石（第22図　図版14―３）

10Ｉグリッドの西側に位置し、８個の礫が「コ」の字状に並べられている。当初、炉跡かと



第23図　ため池状遺構実測図

第24図　ピット配置図

思われたが、礫に熱を受けた痕跡も認められず、焼土もなかった。遺物は出土していない。

焼土１（第22図）

７Ｌグリッドのほぼ中央部に位置し、厚さ18cm、範囲は1.5m×0.7mである。しっかりした掘り込みが見られず、底面に熱を受けた痕跡も認められない。遺物は土師器片が数点出土している（第30図51・52）。

焼土２（第22図）

７Ｌグリッドの北西部に位置し、厚さ15cm、範囲は1.2m×0.5mである。しっかりした掘り込みが見られず、底面に熱を受けた痕跡も認められない。遺物は出土していない。

焼土３（第22図　図版14―４）

７Ｋグリッドの南側に位置し、平面形は不整形で、最大幅84cm、最小幅51cm、深さ11cmを測る。底面はほぼ平らで、壁は南壁・北壁は緩やかに、東壁・西壁は垂直に立ち上がる。覆土は焼土であり、底面は熱を受けた痕跡が認められる。遺物は土師器の杯片、甕片（第30図16～21）など多数、須恵器の甕片１点が出土している。

ため池状遺構（第23図　図版15―１）

12Ｈ・12Ｉ・13Ｈ・13Ｉグリッドに位置し、ＳＢ３の東側に、旧流路の西側に存在する。またＳＫ12と重複し、これを切っている。平面形は方形で長辺約10.6m、短辺約9.6m、深さ約1.0mを測る。底面は平らで、壁は急傾斜で立ち上がる。覆土は褐色土と褐灰色粘質土を基本とし、５層に識別され、ほぼ水平に堆積する。遺物は土師器の破片約40点、須恵器の杯片１点、江戸時代の所産と思われる陶器の破片１点、礫数点が出土している。

ピット（第２表　第24図　図版15―２・３）

調査の結果、ピットは多数検出された。しかしながら、耕作や開田等による攪乱で破壊されたものも多く存在したと推定される。特に９Ｌ・10Ｌグリッド付近では、開田の際の削平のためか、ほとんどピットは検出されなかった。検出されたピットで掘り込みのしっかりしたものについては、ピット説明表とピット配置図を表示した。

第２表　ピット説明表

番号	長径×短径×深さ(cm)			出土遺物	グリッド	備　考	番号	長径×短径×深さ(cm)			出土遺物	グリッド	備　考
1						ＳＢ４	66	24	20	36		７Ｈ	
〃						〃	67	25	23	27		７Ｈ	
6						ＳＢ４	68	45	30	31		６Ｌ	
7	35	30	48		12H		69	28	25	18		７Ｈ	
8	42	42	39		12G		70	44	32	37		６Ｌ	
9	37	35	40		12G		71	35	33	27		７Ｆ	
10	64	35	35		12G		72						ＳＢ２
11	41	40	42		11G		〃						〃
12	75	40	34		11G		82						ＳＢ２
13	43	40	40		11H		83	82	65	78		10G	
14	40	32	33		６Ｆ		84	65	50	42		10G	
15	48	45	27		12H		85	65	48	38		10G	
16	42	40	27		11H		86	60	60	77		10G	
17	40	30	42		11G		87						ＳＢ７
18	55	40	62		11G		88						ＳＢ７
19						ＳＢ６	89	63	55	57		10G	
20	53	45	64		11G		90						ＳＢ６
21	35	33	41		11G		91						ＳＢ６
22	50	50	74		11G		92	45	35	63		10H	
23						ＳＢ６	93						ＳＢ７
24	80	70	68		11G		94						ＳＢ７
25	120	80	37		11G		95	55	35	51		９Ｈ	
26						ＳＢ３	96	45	45	43		９Ｈ	
〃						〃	97	40	35	39		７Ｈ	
31						ＳＢ３	98	28	26	25		７Ｆ	
32						ＳＢ１	99	32	22	30		７Ｈ	
〃						〃	100	37	34	33		７Ｈ	
43						ＳＢ１	101	58	48	15		７Ｉ	
44	100	68	42		８Ｈ		102	43	28	37		７Ｉ	
45	67	38	10		８Ｇ		103	35	28	46		７Ｊ	
46	30	30	25		８Ｇ		104	62	23	35		７Ｊ	
47	102	50	19		８Ｇ		105	60	38	58		６Ｈ	
48	38	30	24		８Ｇ		106	68	47	13		５Ｈ	
49	34	25	22		８Ｇ		107	25	16	29		７Ｋ	
50	68	65	10		８Ｇ		108	56	30	47		７Ｋ	
51	50	43	23		８Ｇ		109	35	22	22		７Ｋ	
52	50	37	12		８Ｇ		110	23	18	67		７Ｋ	
53	68	43	31		６Ｈ		111	35	25	51		７Ｋ	
54	84	62	22		７Ｈ		112	35	38	39		７Ｋ	
55	32	27	26		６Ｋ		113	24	20	26		７Ｋ	
56	57	52	21		７Ｇ		114	80	49	38		６Ｈ	
57	60	57	16		７Ｇ		115	79	45	22	師　須	６Ｈ	
58	53	50	15		７Ｇ		116						ＳＢ３
59	40	38	24		７Ｇ		〃						〃
60	45	43	25		６Ｋ		119						ＳＢ３
61	23	22	21		６Ｋ		120	37	30	35		７Ｋ	
62	80	65	7		８Ｈ		121						ＳＢ６
63	28	20	21		６Ｋ		122	40	35	33		10G	
64	29	24	22		６Ｋ		123						ＳＢ７
65	22	20	20		６Ｋ		124	40	35	29		10G	

番号	長径×短径×深さ(cm)			出土遺物	グリッド	備　考	番号	長径×短径×深さ(cm)			出土遺物	グリッド	備　考
125						ＳＢ７	179	26	22	28		７Ｌ	
126				師		ＳＢ６	180	63	57	42		８Ｆ	
127	48	45	21		11Ｇ		181	97	85	36		８Ｆ	
128	32	31	26		11Ｇ		182	132	124	29		８Ｆ	
129						ＳＢ６	183	40	38	22		８Ｇ	
130	58	35	37		11Ｈ		184	32	26	18		８Ｇ	
131						ＳＢ６	185	33	30	17		８Ｇ	
〃						〃	186	38	30	35		８Ｇ	
135						ＳＢ６	187	80	30	23		８Ｈ	
136	52	48	14		11Ｈ		188	20	20	41		８Ｈ	
137	87	83	37		11Ｈ		189	48	42	30		８Ｈ	
138						ＳＢ３	190	32	25	24		８Ｈ	
〃						〃	191	50	21	31		８Ｉ	
142						ＳＢ３	192	60	50	26		８Ｉ	
143	22	20	36		７Ｋ		193	44	43	27		８Ｊ	
144	48	18	31		７Ｋ		194	65	47	31		８Ｊ	
145	42	40	78		12Ｉ		195	32	20	30		８Ｊ	
146	90	65	35		11Ｉ		196	20	18	30		８Ｊ	
147	72	63	40		11Ｉ		197	35	25	37		８Ｊ	
148	60	55	40		10Ｉ		198	118	67	22		８Ｋ	
149	45	40	31		11Ｇ		199	58	33	54		８Ｋ	
150						ＳＫ４	200						ＳＢ５
151	32	25	16		11Ｇ		〃						〃
152	74	38	30		12Ｇ		209						ＳＢ５
153	30	27	28		７Ｋ		210	109	84	11	師	８Ｋ	
154	90	85	25		11Ｇ		211						欠　番
155	55	40	27		７Ｋ		212	58	40	27	縄	７Ｌ	
156	30	25	25		７Ｋ		213	75	55	14		７Ｍ	
157	32	30	28		６Ｆ		214	43	34	38	師	７Ｍ	
158	50	45	34		６Ｆ		215	85	57	25	師(30-48・49)	７Ｍ	
159	52	36	26	師	６Ｆ		216	37	34	7	師(30-50)	７Ｍ	
160	40	38	31		６Ｆ		217	33	20	30		７Ｋ	
161	58	30	24		６Ｆ		218	27	23	33		７Ｋ	
162	26	25	46		７Ｋ		219	50	32	34		８Ｋ	
163	25	20	43		７Ｋ		220	35	30	39		７Ｋ	
164						ＳＫ21	221	48	30	18		７Ｋ	
165						ＳＫ22	222	30	25	18		７Ｋ	
166	50	27	28		７Ｋ		223	25	23	11		７Ｋ	
167	70	30	12	師　縄	８Ｉ		224	25	25	25	師	７Ｋ	
168	35	33	17		８Ｉ		225	25	20	23		７Ｋ	
169	53	48	24		７Ｉ		226	33	23	16		７Ｋ	
170	34	30	9		７Ｉ		227	20	18	29	師	７Ｋ	
171						ＳＫ20	228	25	23	32		８Ｋ	
172	35	25	32		７Ｋ		229	35	28	24		７Ｋ	
173	30	22	30		７Ｋ		230	35	25	33		７Ｋ	
174	30	24	28		８Ｋ		231	40	37	34		８Ｋ	
175	27	16	8		11Ｈ		232	30	24	31		８Ｋ	
176	18	17	23		７Ｌ		233	22	17	27		８Ｋ	
177	21	20	23		７Ｌ		234	28	23	28		８Ｋ	
178	33	25	33		７Ｌ		235	23	18	26		８Ｋ	

番号	長径×短径×深さ(cm)			出土遺物	グリッド	備 考	番号	長径×短径×深さ(cm)			出土遺物	グリッド	備 考
236	26	20	30		8 K		286	60	48	33		9 H	
237	24	23	36		8 K		287	38	36	26		9 H	
238	36	25	31		8 K		288	47	22	13		9 H	
239	84	45	26		8 K		289	40	37	25		9 G	
240	63	45	33	師(30-41～46)	7 K		290	32	32	28		9 G	
241	20	18	25		7 K		291	83	60	22		11F	
242	35	30	42		7 K		292	38	35	46		11F	
243						焼土1	293	71	62	50		10F	
244						焼土2	294	60	32	24		10F	
245	62	47	86		11K		295	40	35	35		9 H	
246	45	44	30		11K		296	130	105	102		10E	
247	30	27	19		11K		297	40	37	37		10E	
248	60	60	24		11K		298	96	65	51		10E	
249	35	33	35		11K		299	33	33	21		10E	
250						SK6	300	60	50	32		10E	
251	55	43	16		7 L		301	42	40	51		10E	
252						欠 番	302	65	45	44		10E	
253						欠 番	303	46	37	28		10G	
254						欠 番	304	35	33	24		11E	
255	40	38	52		7 L		305	62	47	70		11E	
256						SK19	306	106	95	73		11E	
257	41	27	48		6 K		307	120	80	23'		11E	
258	32	30	23		7 L		308	33	25	21	縄須(30-47)	7 K	
259	54	25	16		7 L		309	25	24	35	師	7 K	
260	27	25	36		11K		310	28	25	17		9 H	
261						SK5	311	25	20	36		9 H	
262	28	23	31		9 G		312	45	40	25		9 I	
263	83	66	56		11F		313	48	35	32		9 I	
264	62	45	26		11F		314	65	42	35		9 I	
265	60	58	34	師 須	11F		315	70	53	21		9 I	
266	50	42	32		9 G		316	32	20	26		9 I	
267						欠 番	317	60	55	16		9 I	
268						欠 番	318	110	45	28		9 I	
269	38	35	33		10F		319	30	25	27		9 I	
270	130	65	91		10E		320	87	70	28		9 I	
271	50	45	23		10E		321	52	40	33		9 J	
272	25	23	11		10E		322	48	30	45		9 J	
273	73	50	39		10E		323	25	20	35		9 J	
274	37	35	32	師	9 G		324	32	32	31		10E	
275						SB7	325	34	23	67		10E	
276	60	49	37		9 G		326	45	23	40		10E	
277						欠 番	327	30	27	40		10E	
278	55	25	33		9 H		328	38	35	50		10E	
279	50	37	26		9 H		329	30	25	59		10E	
280	26	22	31		10H		330	27	27	56		10E	
281	53	30	43		10H		331	35	35	32		10F	
282	25	22	29		10H		332	30	25	25		10F	
283	30	25	34		9 H		333	32	32	40		10F	
284	55	30	44		9 H		334	33	32	24		10F	
285	70	47	73		9 H		335	45	35	32		10G	

番号	長径×短径×深さ(cm)			出土遺物	グリッド	備　考	番号	長径×短径×深さ(cm)			出土遺物	グリッド	備　考
336	38	24	46		10G		373	60	55	38		12 I	
337	45	35	26		10G		374	57	50	39		12 I	
338	25	20	26		10G		375	30	22	21		12 I	
339	38	25	30		10G		376	34	32	14		11K	
340	35	34	38		10H		377	50	46	50		11K	
341	35	30	27		10 I		378	38	21	43		12K	
342	27	26	25		10 I		379	42	30	22		12K	
343	47	43	59		10 I		380	60	48	74		12K	
344	45	35	20		10 I		381	20	17	41		12K	
345	85	45	24		10 I		382	26	25	35		13K	
346	35	25	21		10 I		383	30	28	24		13K	
347	52	50	20		10 I		384	34	25	33		13K	
348	80	55	111		10 I		385	27	25	21		13K	
349	53	42	30		10 J		386	33	30	28		13K	
350	45	37	50		11E		387	25	23	23		13K	
351	45	37	50		11E		388	50	48	29		13K	
352	53	45	46		11F		389	35	33	20		13K	
353	45	34	32		11F		390	25	24	21		13K	
354	38	30	38		11F		391	37	35	41		13K	
355	28	25	26		11G		392	43	42	50		13K	
356	53	45	25		11G		393	40	35	48		13K	
357	28	25	21		11H		394	30	28	32		13K	
358	48	26	21		11H		395	46	25	29		13K	
359	62	45	20		11H		396	25	22	44		13K	
360	23	18	8		11H		397	48	30	24		13K	
361	35	30	21		11 I		398	32	29	23		13K	
362	30	23	24		11 I		399	30	25	26		13K	
363	55	35	23		11 I		400	40	40	24		13K	
364	23	22	23		12F		401	36	23	30		13K	
365	35	32	23		12F		402	45	40	29		13K	
366	48	34	30		12G		403	24	20	27		13K	
367	58	45	32		12H		404	40	35	33		14K	
368	40	38	56		12H		405	42	40	28		14K	
369	60	45	94		12 I		406	35	21	28		14K	
370	38	30	42		12 I		407	73	32	32		14K	
371	64	45	25		12 I		408	30	26	34		14K	
372	25	22	18		12 I		409	35	25	34		14K	

※ピット説明表の見方について

○番号欄

数字はピットの番号

○出土遺物

師⟶土師器の破片

縄⟶縄文土器の破片

須⟶須恵器の破片

（○—○）⟶の実測図の番号

例　（24—40～46）は第24図40～46を表している。

○備考欄

ＳＢ○・ＳＫ○⟶ピットが、ＳＢやＳＫであったということである。

例　ピット１から６の備考欄を見ると、ＳＢ４と書かれているから、これらのピットはＳＢ４の柱穴であることを表している。

第Ⅳ章　遺　　物

発掘調査により、出土した遺物は、コンテナで約30箱である。内容は縄文時代の土器･石器、奈良・平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器・土製品、中世・近世の陶磁器等であり、主体は奈良・平安時代の遺物である。また、遺構内出土の遺物は少なく、遺跡の東側を流れる旧流路から出土したものが多い。以下、各時代ごとに出土遺物の概要を述べる。

1.　縄文時代

A．縄文土器（第25図１～３・第26図４～30　図版16）

出土した縄文土器は約160点である。そのほとんどが遺跡中央部より西側の地区から出土しており、特にＳＢ５、竪穴住居周辺のグリッドから出土したものが多い。縄文時代と推定される遺構からの土器は、ＳＫ６の遺構確認面より５が、覆土上層より１・２が、覆土下層より３が、ＳＫ11より12・24・27が出土した。これらの土器には、比較的まとまった破片もあり、１～３のように全体の器形が推定できるものもある。これ以外の土器はすべて小破片である。以下、時期別に概略を説明する。

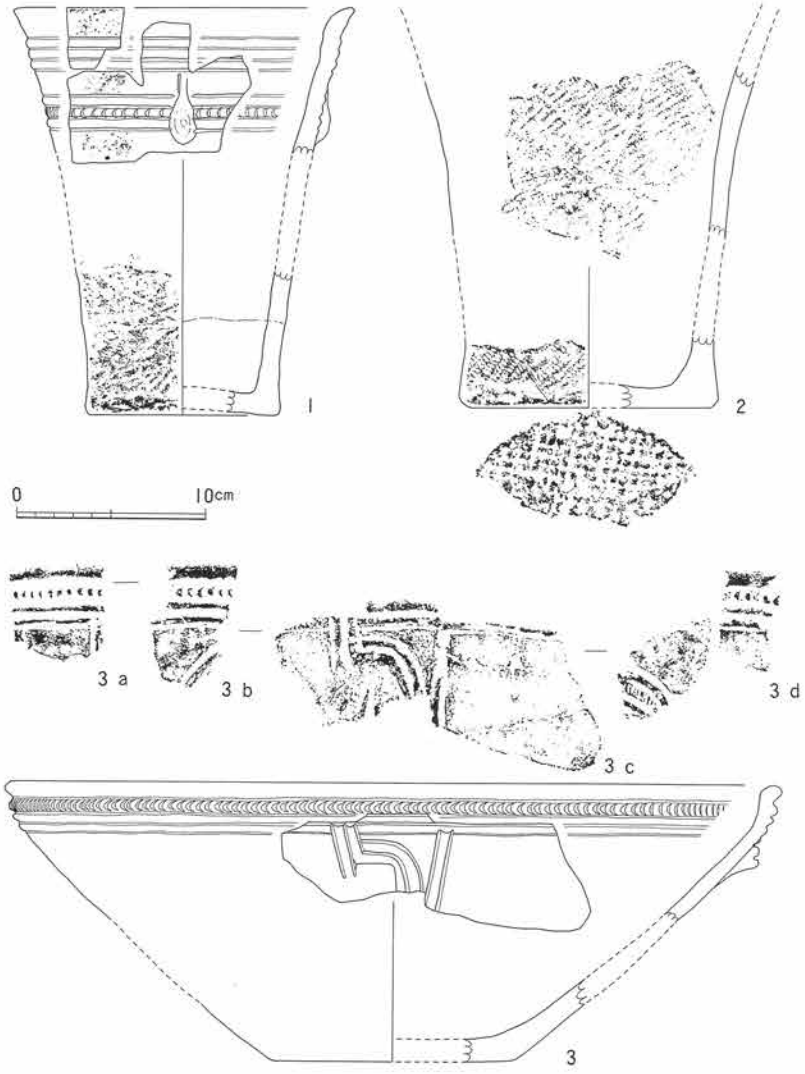
前期後半～前期末葉（第26図４～９　図版16―４～９）

４は深鉢の胴部破片で半截竹管の平行線文に、爪形文が「Ｄ」字状に施文されている。色調は外面暗褐色、内面茶褐色を呈する。胎土には石英や砂が多く含まれ、厚手のつくりである。５は深鉢の口縁部破片で、推定口径15.5cmを測る。文様は三角形印刻文による鋸歯状文と粘土紐を貼付し、これを半截竹管で押し引いたいわゆる結節状浮線文が施文される。口唇部には刻目を有し、内面から外面への押圧による横方向の波状を呈する。内面には稜をつくり、稜の上下には炭化物が多く付着している。色調は内外面共灰褐色を呈する。５ａは５の拓影である。６は深鉢の口縁部破片で、無文地上に粘土紐が貼付される。口唇部は丸棒状の工具と推定される刻目が施される。色調は外面暗褐色、内面灰褐色を呈する。胎土には砂が多く含まれている。７は深鉢の口縁部破片で、三角形印刻文と結節状浮線文が施文されている。口唇部には小突起が付けられている。色調は外面明褐色、内面暗褐色を呈し、薄手のつくりである。８は深鉢の口縁部破片であり、帯状の粘土紐が波状に貼付され、この紐の上下には三角形印刻文が交互に施されている。口唇部は内面から外面への押圧により、横方向の波状を呈している。色調は内外面共明褐色を呈し、薄手のつくりである。９は深鉢の胴部破片で、横位、斜位に結節状浮線文が施文されている。色調は内外面共明褐色を呈し、外面には煤の付着が認められる。

中期初頭～中期前葉（第25図１～３　第26図10～19・22～24　図版16―10～19・22～24）

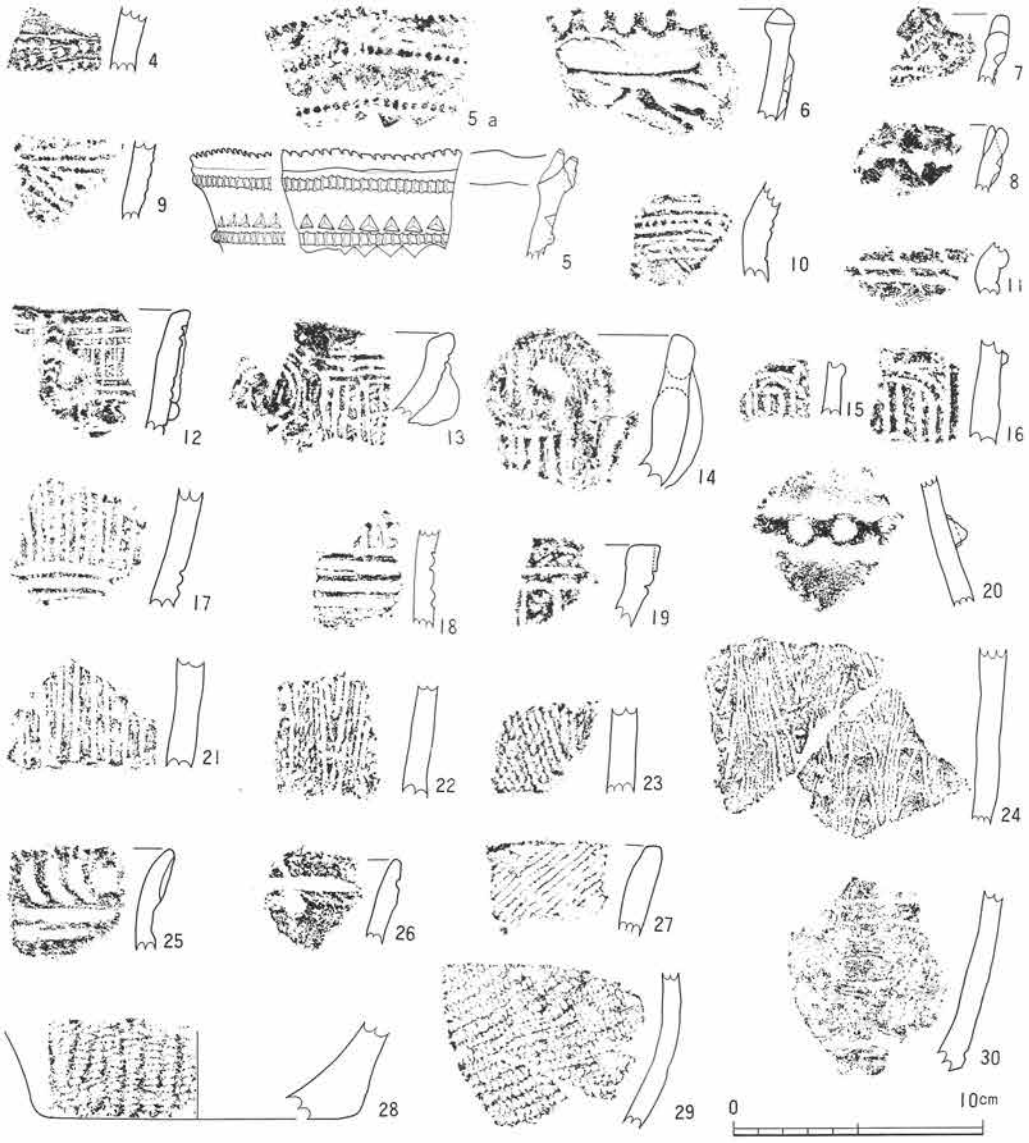
１は底部から胴部にかけてが外反ぎみに立ち上がり、口縁部が直線的に開いて、口唇部で緩く外反するバケツ形の深鉢である。推定底径10.3cm、推定口径18.0cmを測る。文様は全面にＬ

Rの縄文が弱く施文され、口縁部と胴上半部に３条ずつ半隆起線が横走する。胴上半部の半隆起線の１本には爪形文が施され、瘤状の突起が貼付される。瘤状の突起は同一土器の別の破片にも認められることから、少なくとも２個は貼付される。色調は外面明褐色、内面灰褐色を呈し、内面の胴上半部から口縁部にかけて炭化物が多く付着している。胎土には径１～２㎜の砂が多く含まれている。胴下半部には成形時の輪積み痕が認められる。２は底部から胴部にかけてが外反ぎみに立ち上がり、胴部はさらに外反すると思われる深鉢の破片である。推定底径16.6㎝を測る。全面にＬＲの縄文が施文され、底面には網代痕を残す。色調は内面暗褐色、外面茶褐色を呈し、内面には炭化物が付着している。３は底部から直線的に開き、口縁部で内彎ぎみになる浅鉢で、推定口径41.2㎝、推定底径15.8㎝、推定器高14.8㎝を測る。3a・3b・3c・3dは



第25図　縄文土器 (1)

3の拓影である。文様は口縁部に3条の半隆起線が横走し、最上部の半隆起線には爪形文が施される。胴部の無文地上には、口縁部から半隆起線が垂下したり（3a･3c）、曲線状の半隆起線が施されたり（3b・3d）する。したがって、胴部の文様構成はa＋b＋a′＋b′の2単位と推定される。色調は内外面共灰褐色を呈し、外面の一部に煤の付着が認められる。10は深鉢の頸部破片である。弱い縄文地上に3条の半隆起線が横走し、1本には爪形文が施され、その下には沈線が巡っている。色調は内外面共灰褐色を呈する。11は深鉢の頸部破片で、3条の半隆起線が横走し、半隆起線の上には右下がりの沈線状の刻目が施される。色調は内外面共明褐色を呈し、



第26図　縄文土器 (2)

胎土には砂が多く含まれている。12は深鉢の口縁部破片である。爪形文を持つ隆帯で区画され、その区画内には半截竹管の平行沈線が縦位に施され、その上下には2条ずつ横位の平行沈線が施される。区画内の左下隅には、小突起が貼付された痕跡が認められる。色調は内外面共褐色を呈し、外面には煤が付着する。胎土には砂が多く含まれている。13はキャリパー形深鉢の口縁部破片である。半截竹管の横位平行沈線が3条施され、その下は縦位沈線で満たされている。また、突起が貼付され、突起上には沈線が施される。色調は内外面共褐色を呈し、外面には煤が付着する。14はキャリパー形深鉢の口縁部破片である。13と同様に半截竹管の横位平行沈線が1条施され、その下部は縦位沈線で満たされている。口唇部には太い粘土紐が突起として「の」字状に貼付されている。その突起の外面には、細い沈線が施されている。色調は内外共明褐色を呈し、胎土には径1㎜前後の砂が多く含まれている。外面の一部には煤が付着する。15・16は深鉢の胴部破片で、隆帯が横位に1条貼付され、半隆起線の曲直線が施文されている。色調は15が外面褐色、内面暗褐色、16が外面明褐色、内面暗褐色を呈している。15の外面には煤が付着し、胎土には砂が多く含まれている。17はキャリパー形深鉢と推定される頸部破片である。半隆起線が縦位に満たされ、その下には横位に2条施文されている。色調は内外面共明褐色を呈している。外面には煤が付着している。胎土には1～2㎜の砂が多く含まれている。18は深鉢の頸部破片である。蓮華文の一部と思われる縦位平行沈線が施され、その下には3条の半隆起線が施されている。色調は外面暗褐色、内面灰褐色を呈している。外面の一部には煤が付着している。19は口縁が緩く内彎することから、キャリパー形深鉢と推定される口縁部破片である。口唇部は肥厚し、縄文地上に1条の半隆起線が横走し、そこから沈線が垂下している。色調は内外面共明褐色を呈している。胎土には径1～2㎜の砂が多く含まれている。22～24は深鉢の胴部破片で、木目状撚糸文が施文されている。色調は22が外面橙色、内面暗褐色、23が内外面共明褐色、24が内外面共褐色を呈している。いずれも胎土には、径1～2㎜の砂が多く含まれている。また、23の外面には煤が付着している。

中期中葉（第26図20・21　図版16―20・21）

20は頸部がくびれ胴部の張る深鉢と推定される破片である。無文地上に隆帯が横走し、指頭圧痕が施される。色調は内外面共茶褐色を呈し、胎土には雲母と砂が多く含まれている。21は深鉢の胴部破片で、平行沈線文が施されている。色調は内外面共明褐色を呈し、内面の一部には炭化物が付着する。胎土には砂が多く含まれている。

後期前葉（第26図25・26　図版16―25・26）

25は頸部が緩くくびれると思われる深鉢の破片で、弧状の沈線と円形刺突が施され、下位には2条の沈線が横走する。色調は内外面共明褐色を呈する。26は深鉢の口縁部破片で、無文地上に1条の沈線が横走する。色調は外面茶褐色、内面明褐色を呈する。25・26の外面には煤が付着する。胎土には径1～2㎜の砂が多く含まれ、薄手のつくりである。

その他の縄文土器（第26図27～30　図版16―27～30）

27は深鉢の口縁部破片で、無節の縄文が施されている。色調は外面暗褐色、内面褐色を呈し、胎土には径１～２㎜の砂が多く含まれている。28は深鉢の底部破片で、推定底径13.0㎝を測り、多条縄文が縦方向に施されている。色調は外面褐色、内面明褐色を呈し、胎土には径１～２㎜の砂が多く含まれている。29・30は深鉢の胴部破片で、29は胴部の張ったものである。29はＬＲの縄文が施され、30は無文で、色調はどちらも外面明褐色、内面灰褐色を呈する。

以上、時期別に概略を記述した。それぞれの時期について、４は前期後半の諸磯ａ式に、５～９は前期末葉の鍋屋町II式、北陸地方の福浦上層式に、10・12～14・17は中期初頭の剣野Ｅ式、北陸地方の新保式に、１～３・11・15・16・18・19・22～24は中期前葉で北陸地方の新崎式に、25・26は後期前葉で北陸地方の気屋式に類以しており、ほぼその頃の時期と思われる。21は文様より中期中葉と推定される。20は胎土、文様より中期中葉と考えたが明確でない。27～30は時期不明であるが、岩野下遺跡の出土土器が前期末葉から中期前葉が主体であることから、ほぼその頃の時期と考えられるものであろう。

Ｂ．石器・石器類等（第27～29図　図版16・17）

出土した石器・石器類等の内訳は、磨製石斧９点、磨製石斧未製品４点、打製石斧10点、二次加工のある剥片石器２点、石錘２点、磨石３点、敲石１点、凹石１点、翡翠原石１点、玦状耳飾り１点、垂玉１点、石鏃未製品１点、その他の石製品３点、剥片35点、焼石27点の計101点である。出土位置は縄文時代と推定される遺構からの出土がなく、遺跡全体から散漫に出土している。以下、概略を説明する。

磨製石斧（第27図１～９　図版16―16～38・図版17―１）

小型磨製石斧３点が含まれている。よく研磨されているもの（１・４～９）と粗雑な研磨で打痕を残しながら完成品として使用されたと思われるもの（２・３）がある。基部を観察すると側面と主面との間に稜を持ち、断面形が隅丸長方形のもの（１～3・５・７・８）と側面を丸く研磨し、断面形が楕円形のもの（４）がある。また、基端がよく研磨され薄くなっているもの（２・４）がある。刃部を観察すると平面形が丸刃のもの（２・５～７・９）、平刃のもの（８）があり、１は丸刃であったと思われる。刃部断面形は両刃のもの（１・５～７）と片刃のもの（２・８・９）がある。２・８は刃部から基部にかけて抉れており、側面形は彎曲している。７は使用による擦痕が認められる。石材は蛇紋岩（１・２・４～９）であり、３は不明である。完成品の重さは１が170ｇ、２が173ｇ、８が14ｇである。

磨製石斧未製品（第27図10～13　図版17―２～５）

いずれも、礫の一部を打ち欠いただけで、自然面を多く残しているもの（11～13）である。10は剥片に調整が加えられているが、風化のため詳細は不明である。11・13は扁平な礫を、12は棒状の礫を材料としている。石材は蛇紋岩（11～13）であり、10は不明である。

打製石斧（第27図14・15　第28図16～22　図版17―6・7　図版17―8～14）

平面形の形態から、撥形（14～19）、短冊形（20～22）がある。表裏面を観察すると片面に自然面を残すもの（14～17・19・20・22）、自然面を残さないもの（18・21）がある。刃部の調整は素材の形状を生かし細かな調整を加えてないもの（14～17・22）、細かな調整を加えたもの（20・21）がある。18は器面が風化のため不明である。22は基部の一部が欠損しているが、出土した打製石斧の中では大型と推定される。石材は砂岩（15・18～20）、硬質砂岩（17）、粘板岩（21）、石英粗面岩（14・16）であり、22は角閃石安山岩と思われる。完形品の重さは14が320ｇ、15は186ｇ、16が260ｇ、17が89ｇ、18が56ｇ、20が215ｇ、21が74ｇである。

二次加工のある剝片石器（第28図23　図版17―15）

厚手の剝片の一部に細かい調整が加えられている。刃部と思われる部分には使用による磨滅が認められる。石質は硬質砂岩であり、重さは310ｇである。

石錘（第28図24・25　図版17―16・17）

24は扁平で楕円形の礫に、25は扁平で円形の礫の両端に剝離を加えたもので、表裏面に多くの自然面を残している。石材は24が砂岩、25が角閃石安山岩であり、重さは24が310ｇ、25が340ｇである。

敲石（第29図26　図版17―18）

一部分のみ残存するもので、先端部に敲打痕が認められる。石材は砂岩である。

磨石（第29図27～29　図版17―19～21）

27は扁平で楕円形の礫、28は扁平で円形の礫、29は球形に近い礫である。磨り痕は27が側面に、28が表面に、29は全面に認められる。27は表面に小さな凹みも認められ、凹石と兼用であったと思われる。石材は27が角閃石安山岩、28が石英安山岩、29が安山岩である。重さは27が530ｇ、28が705ｇ、29が550ｇである。

凹石（第29図30　図版17―22）

扁平で楕円形の礫の表裏面に小さな凹みが認められる。石材は角閃石安山岩で、重さは370ｇである。

翡翠原石（第29図34　図版17―25）

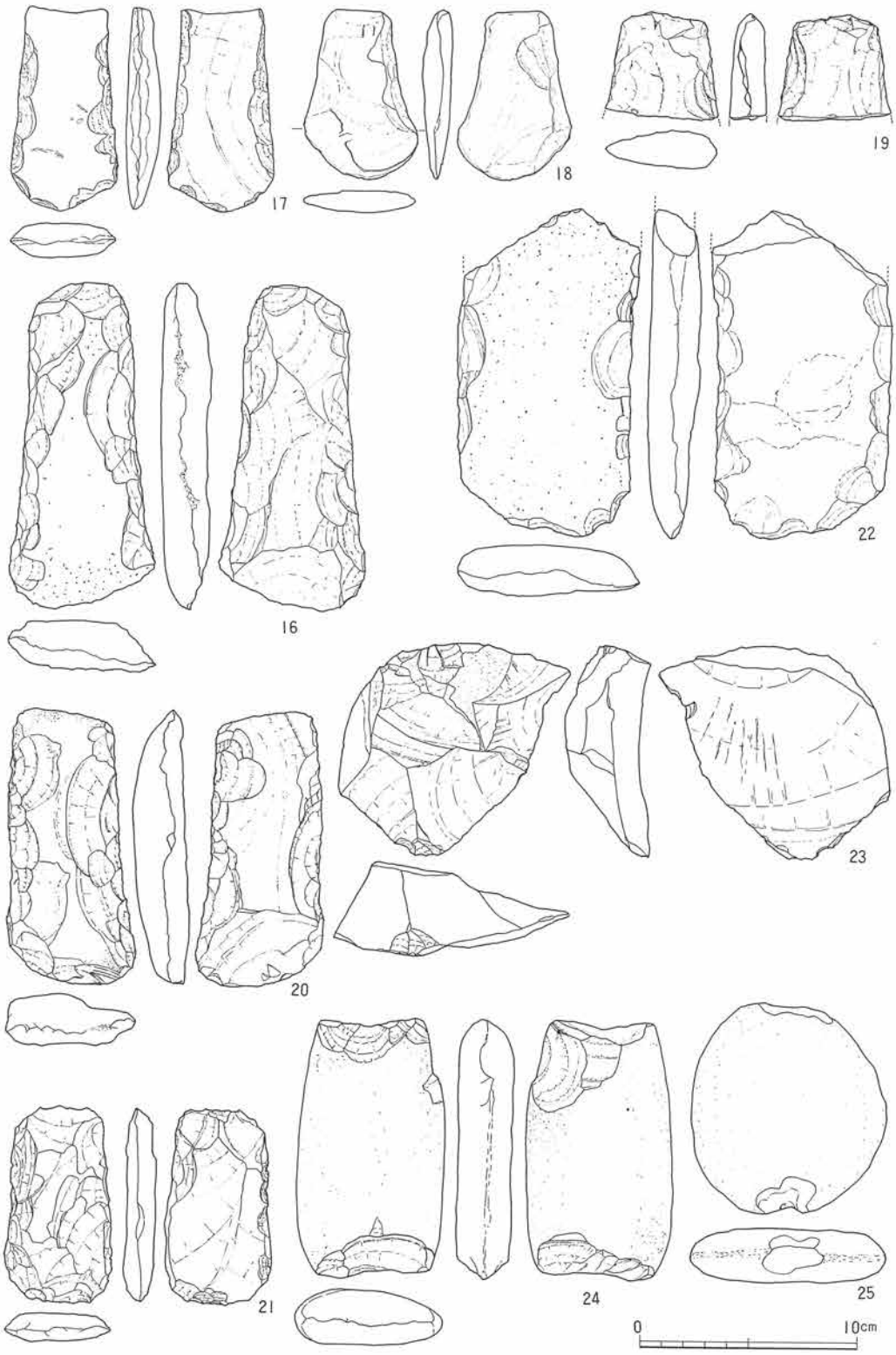
重さ435ｇで、表面の一部に荒れた面があり、荒れた面は敲打によるものか、風化によるものか明確でない。

玦状耳飾り（第29図35　図版17―26）

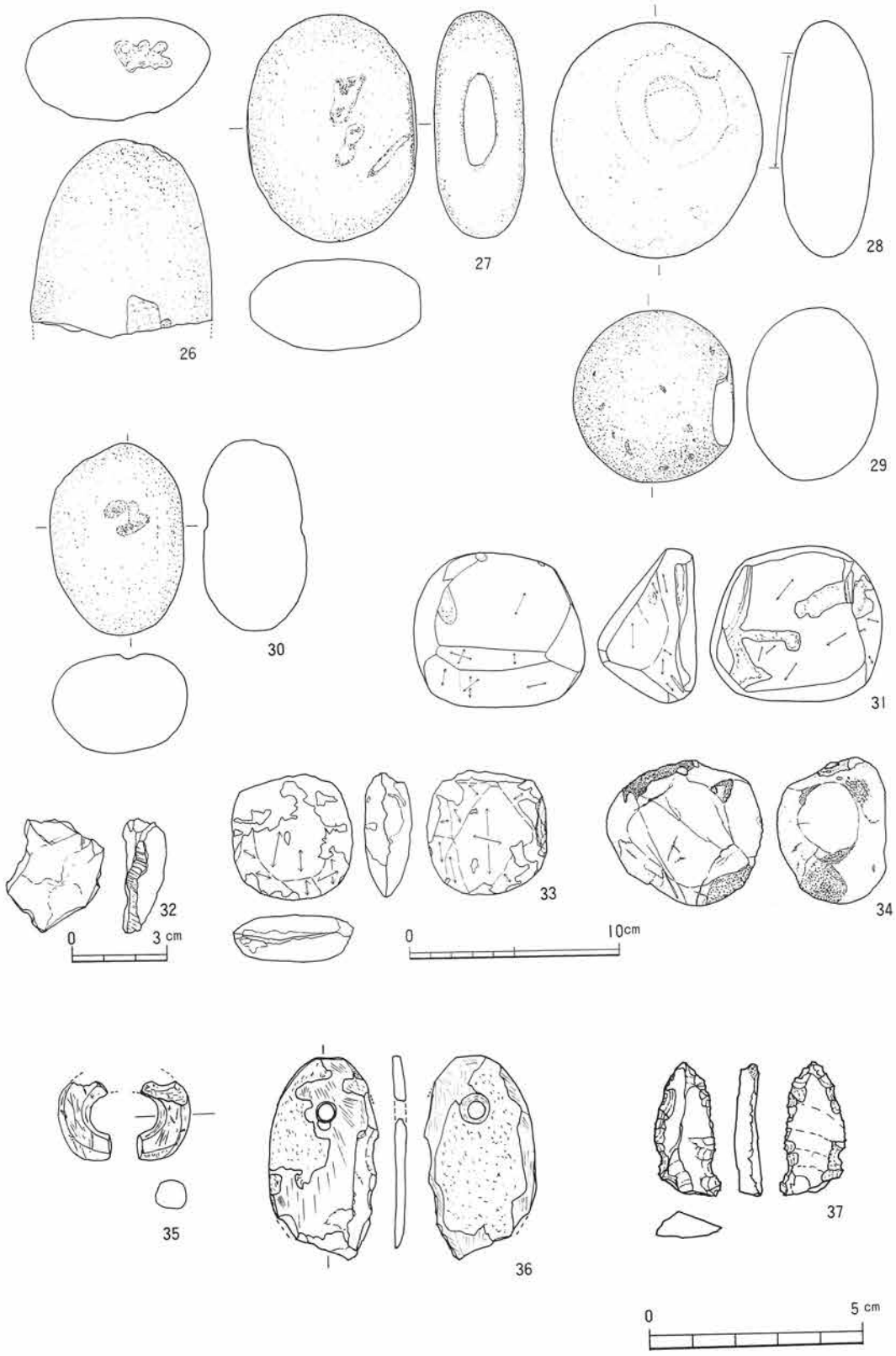
切目部分の破片であり、平面形は円環状と推定され、断面形は丸みをおびる。孔側の長さは7.2㎜、切目の長さは5.7㎜を測り、型式率は0.79である。(註) 石材は黒色の滑石である。

（註）型式率は切目の長さ÷孔側の長さで求められ、型式率で編年を試みている論文もあるため記述した（藤田　1983）。

第27図　石器 (1)



第28図　石器 (2)



第29図　石器 (3)

垂玉（第29図36　図版17―27）

一部欠損している。板状の剝片に研磨が加えられているが、表裏面の研磨面は粗雑で、剝離痕が多く残っている。上部の中央には径4.0㎜の小孔が穿たれている。石質は灰白色の蛇紋岩であり、重さ５ｇである。

石鏃未製品（第29図37　図版17―28）

縦形の剝片の両側縁に沿って細かな調整が加えられ、基部付近で対をなすように抉りが入れられている。石錐とも思われたが先端の尖りや調整がないことから、石鏃未製品とした。しかし、断定はできない。石質は鉄石英で、重さは３ｇである。

その他の石製品（第29図31～33　図版17―23・24）

31は面と面の間に稜があり、器面がよく研磨され、三角柱状を呈する石製品である。石材は緑灰色の硅岩であり、重さは380ｇである。32は側面に粗雑な研磨が認められ、表裏に自然面を残している。石材は灰褐色の滑石で、重さは15ｇである。33は磨製石斧の刃部の転用品と思われるもので、基部欠損後、破損部の一部に研磨を加えている。石材は暗赤褐色の蛇紋岩であり、重さは115ｇである。32・33は玉類の未製品と思われる。しかし、断定はできない。

2．古　　代

本遺跡で出土した古代の遺物は須恵器、土師器が主体をなし、他に灰釉陶器、土製品、鉄製品がある。須恵器や土師器の中には、墨書土器、転用硯及び刻書土器も含まれている。遺物の90％以上は旧流路より出土したものである。遺物量はコンテナで約20箱を数える。このうち、須恵器と土師器は１：４の割合である。灰釉陶器は20点出土している。主な遺構からの出土土器は土師器が主体を占めている。ここでは、遺構出土土器の中でも良好な一括出土の土器を最初に説明し、その後に他の遺構出土のものについて説明を加える。遺構外出土土器のうち、須恵器は旧流路より出土したものが大部分を占める。遺構外出土土器は比較的遺存度の高いものや、稜椀や短頸壺、鉄鉢型土器のように周辺の遺跡でも出土量の少ない遺物などを中心に図示した。

須恵器　今回の調査で出土した土器の器種は様々であるが、杯蓋・杯・稜椀などの供膳形態が100個体以上を占め、その他に、甕・壺・瓶・鉢類などの貯蔵形態が40個体以上出土している。

杯蓋や杯については、法量によって次のように細分した。尚、本遺跡では、壺蓋は出土していないので、杯蓋を「蓋」と呼ぶことにする。

蓋　蓋は口径の大きさによって、次の３種に分類した。

I（口径12㎝前後）〔第32図71・79・80など〕 ＜ II（口径13～16㎝）〔第32図61～65・72～76・81～83など〕 ＜ III（口径16.2㎝以上）〔第32図66～68・77・78など〕

また、蓋は形態によっても、当遺跡出土の傾向から２つに分けられる。天井部が低く、水平

に近いタイプと、天井部がやや高く、内彎ぎみに外下方にのび口縁部に至るタイプである。つまみは、前者は宝珠形、後者は扁平な擬宝珠様のものが多い。口縁端部の断面は、どちらも三角形を呈し、垂下しているのが大半を占める。

杯　高台を持つ有台杯と、それを持たない無台杯がある。身の深い、いわゆる「椀」と称されるものは、出土していない。有台杯と無台杯は法量によって次の３種に分けられる。

有台杯

I	<	II	<	III
口径11.8cm以下 器高３cm前後		口径12.1～14.2cm 器高3.7～4.2cm		口径15.4cm以上 器高5.7cm以上
〔第32図84・90など〕		〔第32図85～89・106など〕		〔第32図96～99など〕

無台杯

I	<	II	<	III
(口径11cm前後) 〔第33図107～109・117〕		(口径12cm～13.8cm) 〔第33図110～115・118など〕		(口径14.2cm以上) 〔第33図116・119など〕

有台杯のⅠ・Ⅱ・Ⅲは蓋のⅠ・Ⅱ・Ⅲに対応する可能性がある。

また、有台杯や無台杯の底部切り離し法は回転篦切りが主体を占め、回転糸切りはわずかしか出土していない。須恵器の杯類は特にことわらない限り、底部は回転篦切りである。

土師器　供膳形態と煮沸形態がある。供膳形態では杯類が90％以上を占める。煮沸形態では甕が大半を占め他に鉢・鍋がある。杯は遺構より出土したものに、遺存状態の良好なもの（第30図ＳＫ１、ＳＫ15、Ｐ240の出土土器など）が多い。遺構外出土のものは小破片で、磨滅したものが多いため、図示できるものは、少なかった。

土師器の場合、「杯」と「椀」の明確な基準がないため、ここでは高台の付かない「杯」と、それを付けた「椀」とに分類した。

杯　法量によって次の３種に分けられる。底部の切り離し法はすべて回転糸切りで、大半は無調整である。

I	<	II	<	III
(口径10.8cm以下) 〔第30図22・25、第36図156など〕		(口径11.2～13.8cm) 〔第30図23～29・38～40、第36図157・158など〕		(口径14cm以上) 〔第30図43、第36図159・160など〕

杯の中では、杯Ⅱが大部分を占める。

椀　底部から口縁部まで揃っているのは、１個体（第36図163）に過ぎないが、底部と体部の一部が残存するものは、87個体（第36図164～169など）出土している。底部欠損しているものは、体部下半の立ち上がりや口縁部が外反していることなどから椀（第30図11・44）とした。

鉢　体部や口縁部が殆ど直線的に立ち上がるのを鉢（第30図８、第36図174）とした。平底で、体部内外面を刷毛（棒状工具）で調整し、口縁部内外面を横撫でし、ロクロを使用しない、いわゆる「非ロクロ土師器」である。

甕　奈良・平安期の甕には法量によって大・中・小の３器種に分類される例（坂井　1984）

によると、当遺跡では、口径20cm以上の大形の甕（第31図60、第36図172・173など）が主体をなす。大形の甕は体部が長く丸底であり、中・小形の甕（第36図175）は、体部が短かく平底を呈する。前者は体部下半に叩き目をもち、後者は底部回転糸切り無調整で、ほかは両者ともロクロ撫で調整である。

鍋　体部のみ１点検出されたが、細片のため図示できなかった。

以上、土師器の概要を記したが、中には箆や棒状工具などによる削り整形や刷毛などによる撫で調整を施した椀又は鉢（第30図11、第36図171など）や甕（第36図176・177など）が若干量出土している。これらはいずれも胎土に径２㎜前後の小礫を多く含み、色調はやや暗く、暗褐色を呈する。また、古墳時代後期の所産と考えられる高坏（第36図178・179）も２個体出土しているが、挿図の関係上、本節で述べる。

A．遺構出土土器（第30図、第31図　図版18）

1)　竪穴住居出土土器（第30図１～６）

土師器の杯・椀、須恵器の甕、土錘（第40図１）がある。図化したもの以外に、土師器の杯・甕片65点、縄文中期前半の土器７点が出土している。

土師器

杯（１～３・５）　杯II（１～３）と杯III（５）がある。体部内面のロクロ撫でが丁寧である。１は竈の袖石の下より検出された。およそ1/6を欠損するだけで、ほぼ完形品に近いが、細片化していた。体部はやや弧状のカーブを残しながら口縁部に至る。２の体部は１より直線状に大きく開き、口縁部で少し外反している。３の体部下半は欠損して不明であるが、体部の立ち上がりは直線的である。

椀（４）　底径4.3cmを測り、内面は黒色処理され磨かれている。高台は磨滅している。

須恵器　甕（６）　体部片で、外面格子状の叩き目、内面には薄く同心円の叩き目が残る。

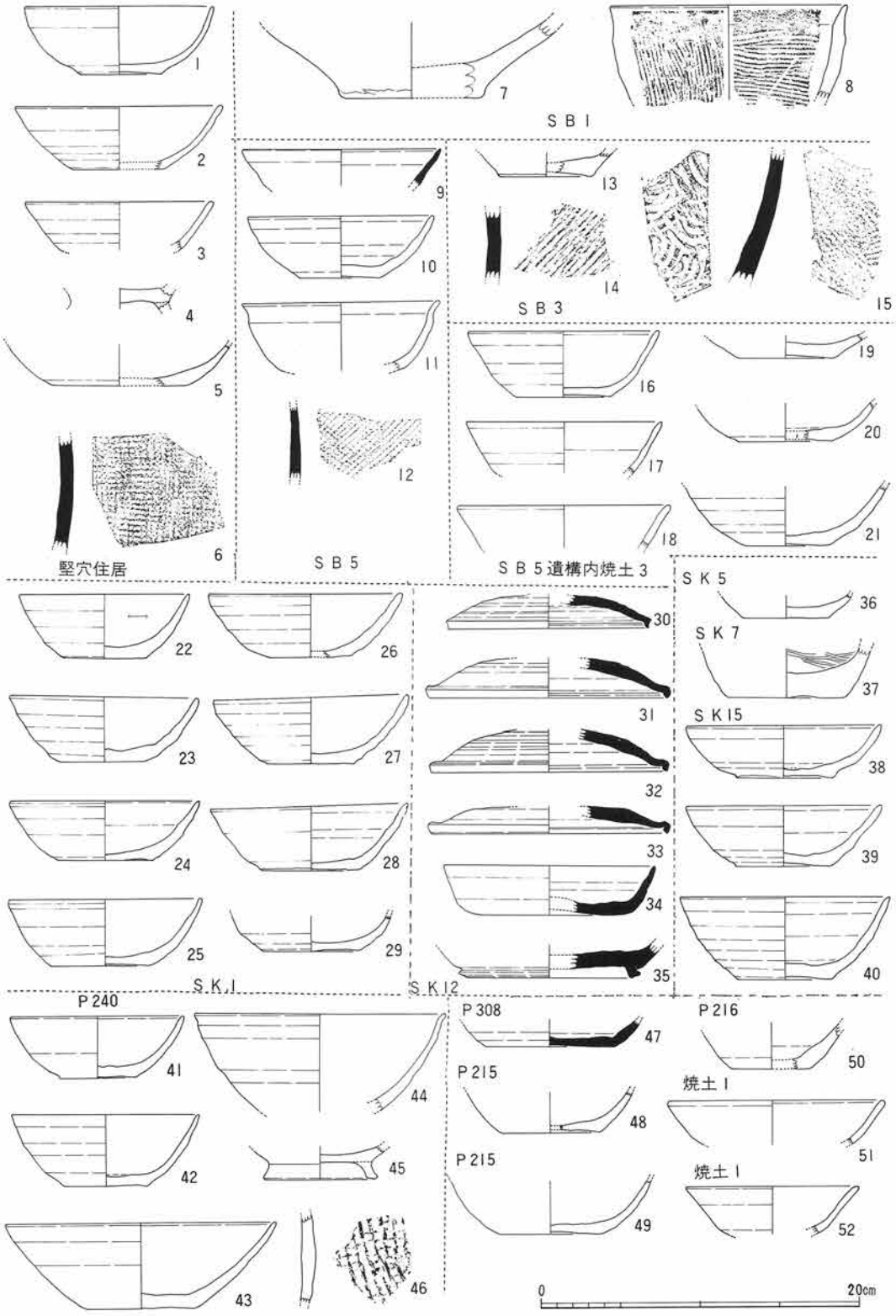
2)　ＳＫ１出土土器（第30図22～29）

床面付近で、土師器のほぼ完形の杯６個体と1/3以上を残すもの４個体が遺存良好の状態で検出された。

土師器

杯（22～29）　杯Ｉに22が、杯IIに23～28がある。径高指数（器高÷口径×100）(註)は31～38の間である。22～28の体部の立ち上がりは殆んど直線的で口縁部もやや内彎気味である。22の内外面はきれいに箆磨きが施されている。22・25の底部は糸切り後、回転箆削り調整されている。

（註）　今池遺跡報告書（坂井　1984）による。



第30図　遺構出土土器 (1)

24・25の口縁部内面下半にはロクロ撫でによって生じた稜が明瞭に残り、口縁部に近い程、薄手の作りになっている。24と28を除いて、内面の調整は丁寧である。体部外面はロクロ撫でが全般に粗く、特に、26は凹凸が顕著である。22・23・27の底部の器厚は約0.7cmと厚く、24～26と28は底面中央部が薄くなっている。28を除く全ての外面には濃淡の差はあるが、煤の付着が認められる。28の体部下半は黒変している所があるが、焼成時にできたものと思われる。内面にも薄く煤が付着しているのは、22と25の口縁部と26と28の底部である。

3)　ＳＫ12出土土器（第30図30～35）

一括出土したもので、須恵器の蓋11個体、有台杯と無台杯各一個体、土師器の杯６点が出土している。

須恵器

蓋（30～33）　30は蓋Ｉで、他は蓋IIである。どれも天井が高く、つまみを欠いている。30は天井部水平で、体部から口縁部にかけてなだらかに弧を描きながら外下方に開く。端部は鋭く屈折し、「く」の字状に外反しながら接地する。天井部外面は回転篦削り、他はロクロ撫で調整である。体部外面はロクロ撫でによる凹凸がみられる。全体に薄いつくりで、特に端部が薄くなっている。周縁の内外面に自然釉がかかり、無釉の部分との境から重ね焼きの痕と思われる。33は天井部水平で、31・32は天井部から体部にかけてやや弧状のカーブを残しながら体部下半に達し、そこからやや水平にのび端部に至る。端部の屈折は少し内側に入り、31と33は断面三角形、32は長方形を呈し、それぞれ外端接地する。33は天井部外面が回転篦削り、他はロクロ撫で調整である。胎土には１㎜大の小礫を少量含むが皆精良である。

無台杯（34）　無台杯IIである。底部は回転篦切りで、体部との境はゆるくカーブしている。体部はやや開きながら直線状に立ち上がる。ロクロ撫でにより、器面全体が滑らかである。

有台杯（35）　口縁部･体部を欠くが、有台杯IIIと考えられる。高台は底部との接合面が細くくびれ、外方に開きながら内端が接地している。接地面はロクロ撫でにより凹む。底部は篦切り後ロクロ撫で調整が施されている。底部内面の仕上げは丁寧である。

4)　ＳＫ15出土土器（第30図38～40）

土師器の杯のみでほぼ完形に近いものが２個体、1/2遺存するものが１個体分、一括で出土している。

土師器

杯（38～40）　３個体とも杯IIである。径高指数は38が26、39が30で口径の割に身が浅く、40は39で口径も大きく、身も深い。38は体部の開きが大きく、体部外面下位でくびれ、中位で丸味をもつ。39の体部下位も一部くびれ、立ち上がりは直線状に開くが、中位はロクロ撫でにより凹む。両者とも遺存度は良好であるが、内外面とも仕上げは雑である。特に底部内面には

ロクロ撫でによって生じた右回りの渦巻痕が残り凹凸している。40の体部はやや内彎気味に立ち上がる。内面の調整は丁寧である。

5) P240出土土器（第30図41～46）

土師器の杯３個体と細片25点、甕片４点、須恵器の杯片２点であるが、図化できたのは土師器の杯・椀・甕である。

土師器

杯（41～43）　杯II（41・42）と杯III（43）に分けられる。径高指数はそれぞれ34、38、31で、体部はやや内彎しながら立ち上がる。器面の仕上げは内外面とも丁寧で、特に内面はきれいである。

椀（44・45）　44は口径で15.8cmで、底部は欠損している。身が深く、体部から口縁部にかけてやや丸味を帯びて大きく開き、口縁部で小さく外反している。45は底径７cmを測り、高台は外側に開いている。内面は黒色処理されている。両者とも入念に調整され、焼成は良好である。

甕（46）　体部片のみで、外面に格子状の叩き目、内面は滑らかでわずかな凹みがみられる。

6) 掘立柱建物出土土器（第30図７～15）

遺物は７棟のうち５棟で検出されたが、一部の柱穴でしか出土していない。７・８はＳＢ１の柱穴１（第８図）より、13～15はＳＢ３の柱穴５（第12図）より、９・10はＳＢ５の柱穴７より、11は柱穴４より、12は柱穴９（第15図）より検出された。土師器の杯・椀・鉢・壺と須恵器の杯・甕である。

土師器

杯（10・13）　10は杯IIで、径高指数は33である。体部は丸味を帯びて立ち上がり、内外面とも入念な仕上がりである。13は磨耗が著しく、底部の1/3強を残すのみである。

椀（11）　底部欠損し、口縁部、体部で遺存度1/8程度である。口縁部は薄くつくられ、やや外反させている。口径12.4cmで、体部は大きく内彎しながら立ち上がる。器面は剝落して不明であるが、体部は箆削り整形したものと思われる。

鉢（８）　体部内面に横方向、外面に縦方向の刷毛目が施され、口縁部は横撫でにより磨消されている。整形技法は遺構出土の甕（第36図174）に類似する。口径は14.8cmで、体部はやや内彎させながらわずかに開いている。口縁部は薄く作られ、小さく外反させている。外面には薄く煤状のものが付着している。

壺（７）　底径8.6cmを測り、底部の器厚は体部の２倍近い厚さになるものと推定される。体部の立ち上がりは直線状に大きく開く。古墳時代後期の壺と考えられる。胎土は径約２mmの小礫を多く含み、また細砂粒も多いため器面は粗くなっている。焼成は軟質でもろくなっている。

須恵器

杯（9）　底部欠損しているが、無台の杯IIと考えられる。

甕（12・14・15）　12は体部片で、薄い作りの割に堅緻である。外面に格子文、内面には平行や斜行状の文様が付され、同一個体で違う部位の破片には同心円文の上に平行文が施されている。14の外面には斜行文が施され、内面は無文である。15は外面に斜格子文、内面に同心円文が見られる。

7）ＳＢ５遺構内焼土中出土土器（第30図16～21）

いずれも土師器の杯IIで、焼土３の下部面より出土している。遺存状況は全般に良くない。

土師器

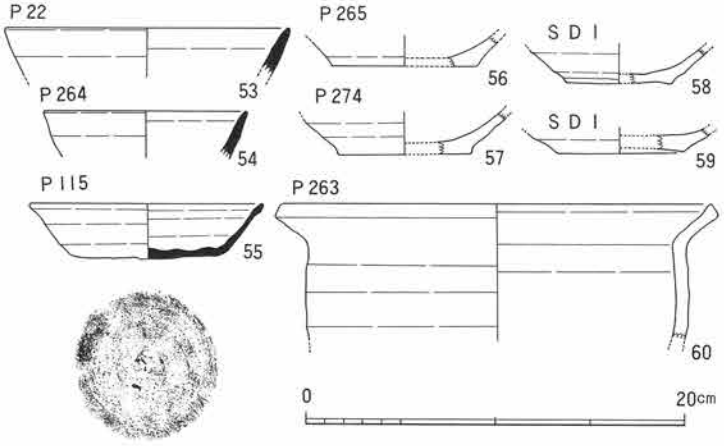
杯（16～21）　16の径高指数は34である。底部より体部下位にかけて腰が張り、そのまま直線状に立ち上がる。内外面には炭化物と思われるものが飛沫状に付着している。17は口縁部と体部の1/6弱遺存している。体部中位の内面にはロクロ撫での稜が見られる。18は口縁部のみで、やや外反気味に立ち上がり、厚手のつくりである。16・17・21の器面は黒味がかっているが、二次焼成によるものと思われる。

8）その他の遺構出土土器（第30図36・37・47～52、第31図53～60）

出土遺物の量は少なく、遺存状態も良くないため、図示できたものはわずかである。遺構はそれぞれ違うが、ここでは一括して器種ごとに説明することにする。37と60の土師器の甕を除き、他は須恵器と土師器の杯類である。

須恵器（第30図47、第31図53～55）

無台杯（47・53～55）　杯Ｉ（54）と杯II（55）と杯III（47・53）がある。どれも薄手の作りで、ロクロ撫で調整により仕上げは丁寧である。47は底部と体部の一部を遺存し、内面には煤状のものが付着している。ＳＢ５遺構内のＰ240と接するＰ308の出土である。53・54は有台杯とも考えられる。55の底部内面にはロクロ撫でによる稜が渦巻き状に残り、内面全体が入念なロクロ撫で調整により平滑に仕上げられている。体部



第31図　遺構出土土器（２）

は底部より外上方に直線状に大きく開き、口縁部でやや外反させている。53はＰ22、54はＰ264、55はＰ115より出土している。

土師器（第30図36・48～52、第31図56～66）

杯（36・48～52・56～59）　どれも細片で磨滅しているが、口縁部の残る51は杯Ⅲ、52は杯Ⅰである。体部下位で腰の張るタイプと考えられる。51・52は体部上位でやや外反しながら立ち上がる。50は底部よりほぼ直線状に開き、内面にはロクロ撫での凹凸が残る。焼成は軟質でもろくなっている。36・56～59の体部の立ち上がりは細片で不明であるが、入念にロクロ撫で調整されている。59の内外面はロクロ撫で後、丁寧に磨かれている。煤は51の内面の一部と52の外面、50の両面に付着している。36はＳＫ５、48・49はＰ215、50はＰ216、51・52は焼土１、56はＰ265、57はＰ274、58・59はＳＤ１より出土している。

鉢（37）　底径7.2cmで、174（第36図）の底径より小さい。内面は棒状工具による刷毛目痕が残り、凹凸している。外面全体の仕上げは不良で、表面が一部剝落している。内面全体に厚く煤が付着している。ＳＫ７出土である。

甕（60）底部と体部の大半が欠損するが、大形の甕と考えられる。口径は22.6cmを測る。体部より口縁部にかけて「く」の字に曲がり、口縁部の断面は少し内側に傾くようにつまみあげられている。器面剝落しているが、口縁部内面にはロクロ撫で痕が残る。外面の一部に煤が付着している。Ｐ263出土である。

Ｂ．遺構外出土土器（第32～36図　図版19～21）

遺構外出土土器の90％以上は旧流路付近より出土したもので、他は西側の段丘より出土している。土器は須恵器、土師器、灰釉陶器である。須恵器には蓋・杯・壺・瓶・鉢・甕等があり、旧流路より1,422点、段丘より552点出土している。土師器は細片で不分明なものが多い。器種は杯・椀・高杯・鍋などである。旧流路より7,706点、段丘より585点出土している。須恵器と土師器は器種ごとに述べ、その後に墨書土器、転用硯及び刻書土器、次に灰釉陶器を述べる。

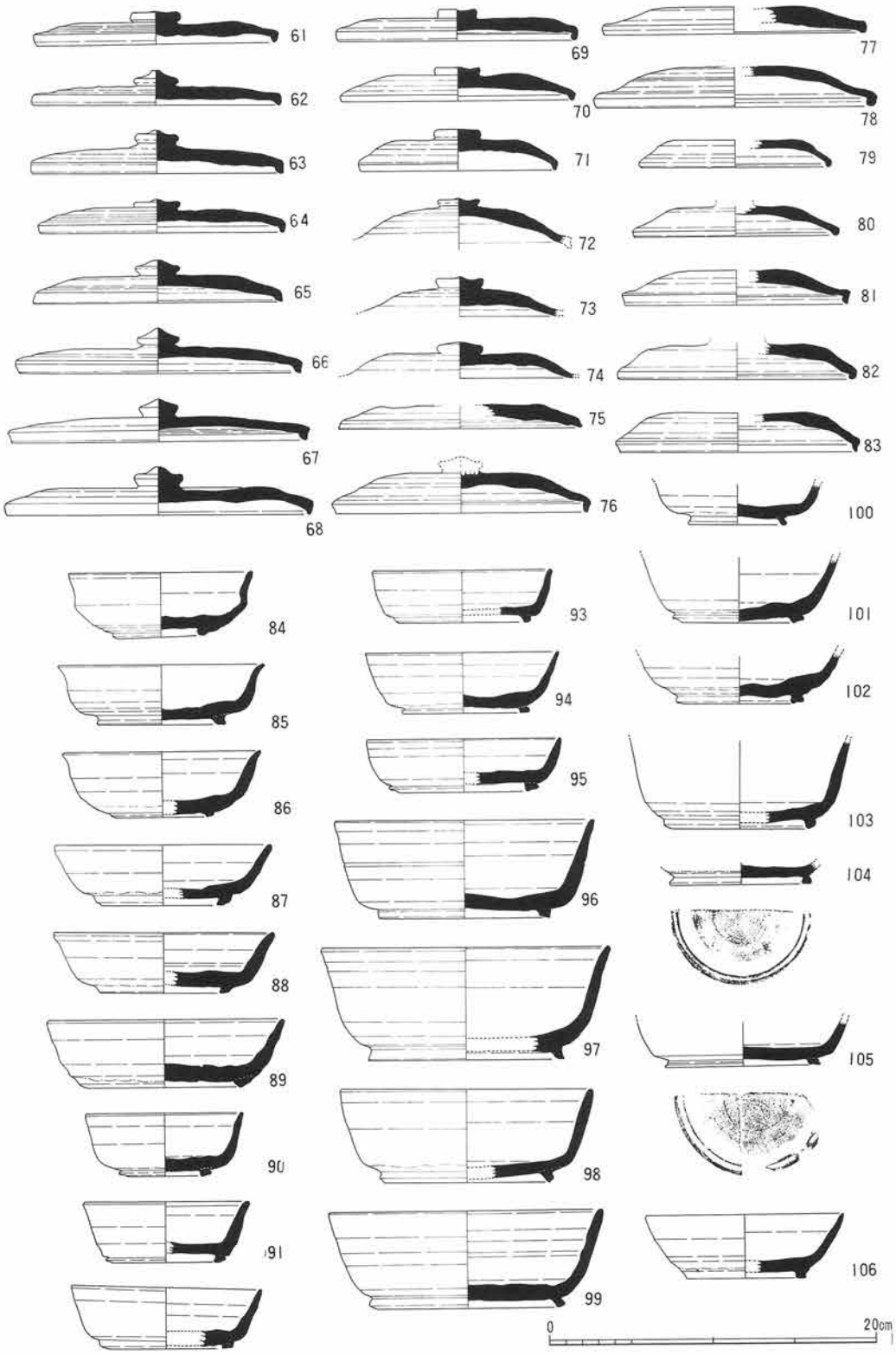
1）　須恵器（第32図～35図　図版19～21）

蓋（第32図61～83）　蓋は530点出土しているが、そのうち図示できたものが24個体である。66と68は完形、64もほぼ完形で、61・62・74・81は1/2以上遺存する。蓋の成形技法は杯と同一と考えられるが、天井部外面は箆削りやロクロ撫でにより、切り離し法の不明のものが多い。回転箆切り痕がみられるのは61・62・65・69・74・75・78・79の８個体である。76はつまみの接合部を浅くえぐり込んで貼り付けたと思われる痕が渦巻状に残っている。61・63・75の内面はロクロ撫でにより凹凸しているが、他は平滑に仕上げられている。蓋Ⅰには71・79・80があり、蓋Ⅱには61～65・69・70・75・76・81～83があり、蓋Ⅲには66～68・77・78がある。72～74は口縁部欠損しているが、蓋Ⅱと考えられる。61～69は天井部が低く、比較的平担を呈し、他

は天井部が高く体部で屈折しながら開いている。つまみの形態は61～68が宝珠形、70・72・73は中心部が低く、その周縁部が凹む擬宝珠様を呈する。71と74は平担で、69は中心部が凹む。口縁端部の屈折した断面は三角形を呈し、垂下するが、66・67・75・76・81・83の端部は外反している。63・65・69・77・78・82の屈折部分の断面は、長方形を呈し、63・65は外端接地し、69・77・78・82は丸くつくられている。61の外面はつまみ周縁部が低く天井部から体部にかけて徐々に高くなり、そのまま屈折し、口縁部に至る。内面はほぼ水平で、屈折部分の器厚が一番厚くなっている。64・68・70も同様の形態を呈し、内外面の仕上げは入念なロクロ撫で調整である。62の内面は口縁部･体部をロクロ撫でし、天井部を不整方向に撫で調整している。65･68の内面も同手法で調整している。62は特に平滑になっており、転用硯の可能性もある。66・67・71・74・76・81の体部中位の外面には、回転篦削り痕がみられる。他は皆入念なロクロ撫で調整である。特に、66の外面の回転篦削り痕は明瞭で、つまみ周縁部から口縁部にかけてみられる。65と82の天井部外面には篦削り痕が残る。69の内面中央部には刻線が１本直線状に走っている。68の天井部外面には２条の、78は天井部と体部に２条ずつ４本の沈線がめぐり、金属器の模作と考えられる。61・64・70・76・79・81・83の外面には暗灰色、77の外面には黄緑色、80の内面には緑色の釉がかかる。64・77の釉は飛沫状に剝落している。70・76・81は自然釉のかかり具合から、重ね焼きした痕がうかがえる。66は釉ではないが、天井部外面の一部が凹み、歪んでいることから、重ね焼きの痕が確認できる。77・78・82の内面の一部には、煤か墨状のものが付着している。

有台杯（第32図84～106）　有台杯Ⅰには84・90～95があり、有台杯Ⅱには85～89・106があり、有台杯Ⅲには96～99がある。径高指数は84・86・91～94・106が31～35で杯Ⅲが35～39と深い。85・87～89・95は27～29とやや深く、90は50と最も深い。底部内面は蓋と同様にロクロ撫でが丁寧である。不整方向の撫でを加えて整形しているのは、96・97・99・101・103・106である。底部回転篦切りとわかるのは、84・87～90・94・99・100・102である。回転糸切りは104・105の２個体で、底部中央部に糸切り痕が残り、その周縁部はロクロ撫で調整である。他の有台杯も貼り付け高台である。84・87～89・91の高台は内傾し、内端接地する。底部と体部の境が不明瞭なのは84・86・101・102・106である。84は特に底部より体部にかけて大きく開き、体部中位で稜をなし、上半が強く外反し稜椀の模作と考えられる。他に口縁部が外反するのは85～88・96・97で、口縁部で小さく外反するのは90・91・93である。体部の内外面は皆入念にロクロ撫でされ、器面は滑らかである。特に106は器面の仕上げが良好である。体部は高台からほぼ真っ直ぐ斜め上方に開き、高台は垂下している。外面全体に青灰色の釉がかかる。96の体部外面中位には、一本の沈線がめぐり、金属器の佐波里椀を模倣したものと思われる。84･90･97の体部外面には自然釉がかかる。

無台杯（第33図107～124）　無台杯Ⅰには107～109と117が、無台杯Ⅱには110～115と118が、無台杯Ⅲには116と119がある。身は有台杯より一般に浅く、径高指数ではやや身の深い30前後



第32図　遺構外出土土器 (1)

の107～109と114が、25前後の110～113と115・118が、20前後の最も身の浅い116と117がある。無台杯は有台杯と比べて軟質なものが多く、遺存度は良くない。有台杯と同じく、体部や底部内面はロクロ撫でが丁寧である。底部外面の切り離し法は120の糸切りを除き、すべて篦切りである。107・110・111・124の底部外面の一部に一定方向の刻線が見られ、111の底部は窯の刻印とも考えられる。121は篦切り未調整で、器面が粗くなっている。底部内面が凹むのは107～111・114・115で107は底部外面も凹み器形全体に歪みがみられる。111・120～124を除き、底部と体部との境は緩やかなカーブになっており、特に107～110・113～115は丸味がある。体部の立ち上がりは117～119など、薄手の作りの方が大きく開いている。108・111・115の体部中位の外面には自然釉による重ね焼きの痕が残る。112の底部外面の中央部に漆状のものが付着している。

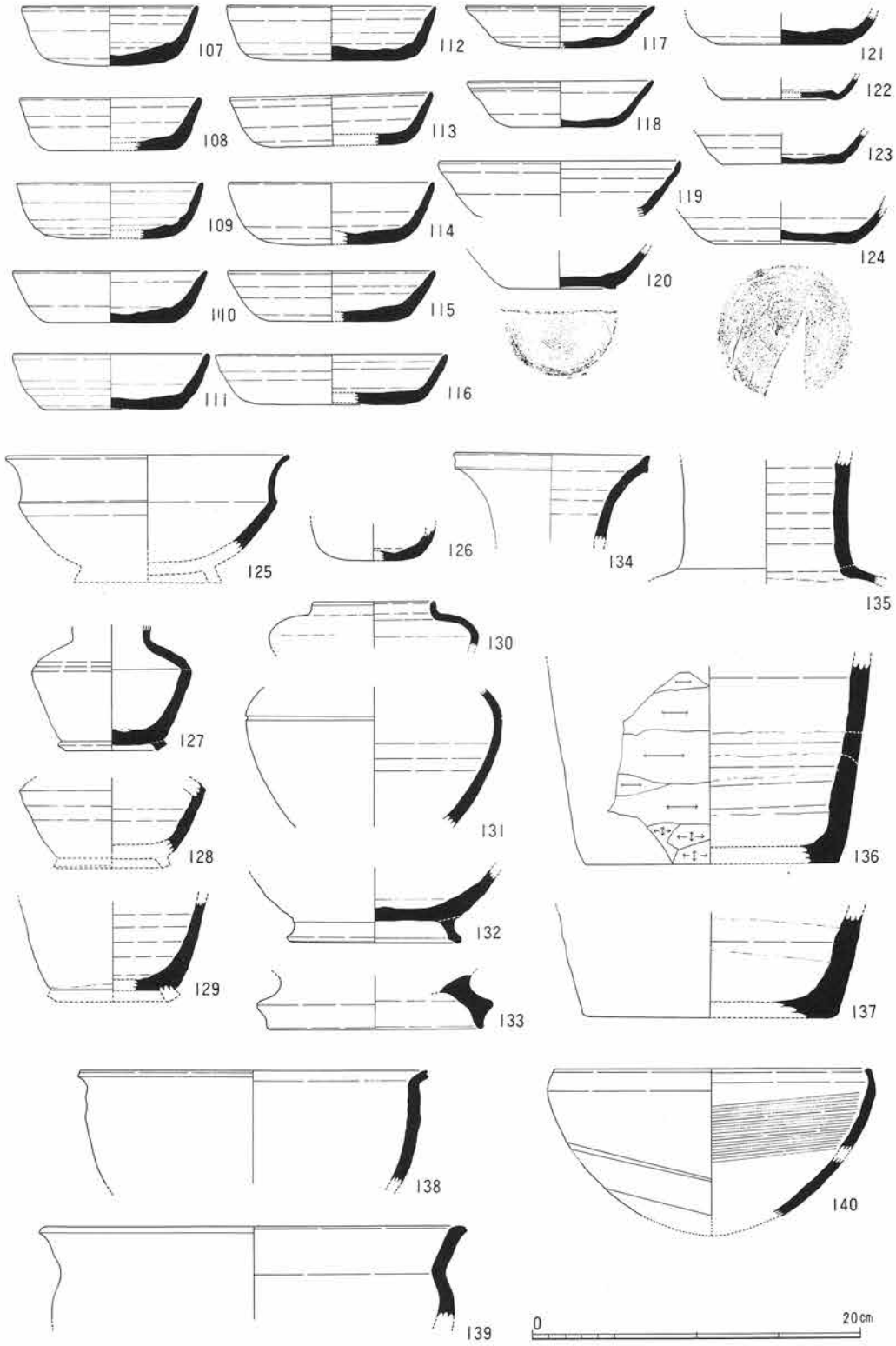
稜椀（125）　口径17.4cmで底部は欠損しているが、器高は7.5cm前後と考えられる。内外面ともロクロ撫でが丁寧で、稜の下には浅い沈線がめぐる。焼成は良好で、内面は白灰色・外面は灰色を呈する。

小形壺（126～129）　126は丸底で底部に篦切り痕が残る。最大径7.6cmを測る。127は頸部を欠き、体部の最大径9.8cm、底径5.4cmを測る。128は体部のみ残存し体部の最大径は11.4cmを測る。129は体部上半を欠き、底径は7.6cmを測る。3個体とも小形壺と考えられる。127は底部回転篦切りで、高台は外下方に開き内端接地する。ロクロ撫でにより高台の貼り付け部と接地面の中央がくぼむ。体部の屈折部より少し上位には沈線がめぐる。体部の内外面はロクロ撫でが丁寧で、内面には火ぶくれの痕が残る。128の体部内面や、129の体部と底部の内面にはロクロ撫でによる凹凸がみられる。焼成は皆良好である。127の体部外面と底部内面、128の体部の屈折部外面に自然釉がかかるが、剝落している。また、底部外面の一部には黒色の漆が付着している。

短頸壺（130）　口径7.4cm、体部の最大径は12.8cmを測る。体部下半を欠くが、内外面ともロクロ撫でが丁寧である。口縁部はほぼ直上し、体部はゆるやかに内彎する。体部外面に自然釉がかかるが、蓋をつけて焼成されたものと考えられ、口縁部周辺は無釉になっている。

長頸壺（134・135）　134は頸部を遺存し、口径11.8cmを測る。頸部より口縁部にかけて外傾し、口縁端部はつままれ、そのまま垂直に立ち上がる。小形壺の口縁部とも考えられる。135は口縁上部を欠き体部上半をわずかに遺存している。頸部は口縁部までほぼ垂直に立ち上がる。内面の頸部と体部の境目に、接合した後にできる粘土塊が垂れ下がっている。体部の器壁は薄くなっている。両者とも、外面はロクロ撫でが丁寧で、内面はロクロ撫でによる凹凸がみられる。134の内面、135の外面に自然釉がかかっている。

瓶（131～133）　131は口縁部と底部を欠き、体部の最大径は15.6cmを測る。入念なロクロ撫でにより器面は滑らかであり、内面には自然釉がかかっている。体部上位の外面には2本の沈線がめぐる。132は底部と体部の一部が遺存しているだけである。底径は10cmを測る。底部は回転糸切り後、ロクロ撫で調整されている。体部外面と内面は丁寧なロクロ撫で調整により、器



第33図　遺構外出土土器・須恵器 (2)

面は滑らかである。高台は外反し、外端接地する。色調は灰白色を呈し、焼成は良好である。133は瓶か壺の高台部と考えられ、底径12.8cmと大きい。丁寧にロクロ撫で調整されている。高台の外面は大きく外反し、中位で屈折し再び小さく外反する。高台内面はロクロ撫でにより内彎し、高台部上半は厚く作られ、下半は断面三角形を呈する。

双耳瓶（136・137）　いずれも体部と底部の一部が残存するもので、底径はどちらも15.6cmを測る。体部外面は入念な箆削り調整により滑らかである。内面はロクロ撫で調整されているが、粘土紐痕も見られ凹凸している。136の体部下位内面には暗茶褐色の炭化物と思われるものが付着している。

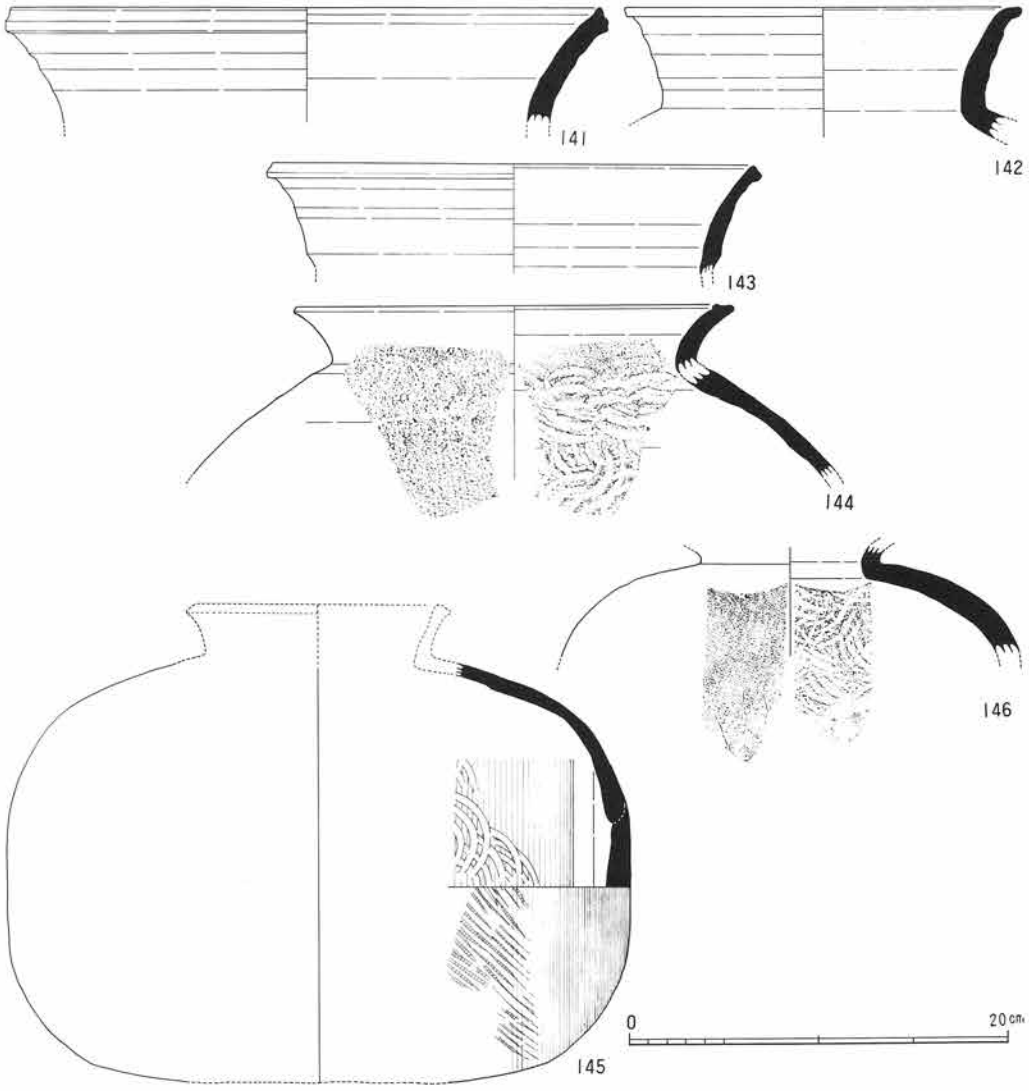
鉢（138・139）　138は体部下半を欠き、口径21.4cmを測る。器面は内外面ともロクロ撫でにより、滑らかである。体部はやや丸味を持って立ち上がり、口縁部で外に折れ曲がり、「く」の字を呈する。口縁端部は外面がほぼ直上するようにつままれている。139も体部下半を欠き口径25.6cmを測る。いわゆる、広口鉢と考えられる。体部は丸味を帯び、「く」の字状にくびれて口縁部に至り外反する。口縁部は丸味を呈しながら外傾している。体部外面に櫛目調整と推定される痕、口縁部内面には刷毛状工具によると思われる調整痕が残り、他はロクロ撫で調整である。

鉄鉢型土器（140）　口径19.2cm、推定器高は10.2cmを測る。尖底で、体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部で大きく内傾させて口縁部は丸くつままれている。体部中位から下位にかけて沈線がら旋状にめぐり、中位では２本になり下位では１本になっている。体部内面の上位から口縁部にかけて櫛状工具による撫で調整、他はロクロ撫で調整により平滑に仕上げられている。

甕（第34図141～144、第35図147～155）　本遺跡から330点出土し、141～144は口縁部や体部上半の破片である。口径は141が31.2cmと大きく、142は21.0cm、143は26.2cm、144は23.4cmを測る。口縁部の傾きは多少違うが皆外反し、口縁端部は外側に突出している。141・143の口縁端部は突出した後、やや内傾しながら丸くつままれている。142は外側に折れ曲がり、そのまま丸くつままれている。144は口縁部の外反が鋭く、端部はほぼ平担で広く、内側にも少しとび出している。144の同一個体と考えられる体部上半の破片があり、その外面に格子、内面に同心円の叩き目が見られる。口縁部は皆ロクロ撫で調整であるが、141・142の外面が凹凸している他は丁寧な仕上がりである。143・144の内外面には自然釉がかかり、144の外面は緑色を呈するが、体部は殆んど剝落している。147は口縁部を外側に折り曲げて上を平担にし、横は幅1.5cmの隆帯をなす。その下に波状の櫛目痕が施されている。内面はロクロ撫で調整である。口径は小片のため不明である。148・149・155は体部上位と考えられ、外面に平行（148・149）や格子（155）、内面に同心円状の叩き目痕が施されている。149の内面には、口縁部と体部の接合の際にできた粘土塊が貼り付いている。150～154は体部破片で、部位は不明である。叩き目は多様であるが、第35図に挙げたのはその一例である。150は外面、斜格子叩き目、内面同心円叩き目である。151は外面凹凸の少ない平行叩き目、内面同心円叩き目である。152・153の外面は平行叩き目であ

る。152の内面は滑らかでわずかなくぼみが見られる。153の内面は櫛状工具によると思われる整形痕が残る。154は外面斜格子叩き目、内面平行叩き目である。147・151・152の外面には自然釉がかかっている。149がP265出土の他は、遺構外である。

横瓶（第34図145・146　図版20・21）　145は口縁部を欠く。体部の端部を除く外面には、平行叩き目の後に端部まで達する細かいカキ目が施されている。内面は端部に粘土板の接合部を残し、その周辺がロクロ撫でされ、端部を除いた部分はカキ目調整の後に同心円叩き目が施されている。外面には自然釉のかかっている部分と無釉の部分があり、重ね焼きの痕と考えられる。内面には一部に緑色の釉が飛沫状にみられ、剝落している所もある。146は、口縁部の一部



第34図　遺構外出土土器(3)

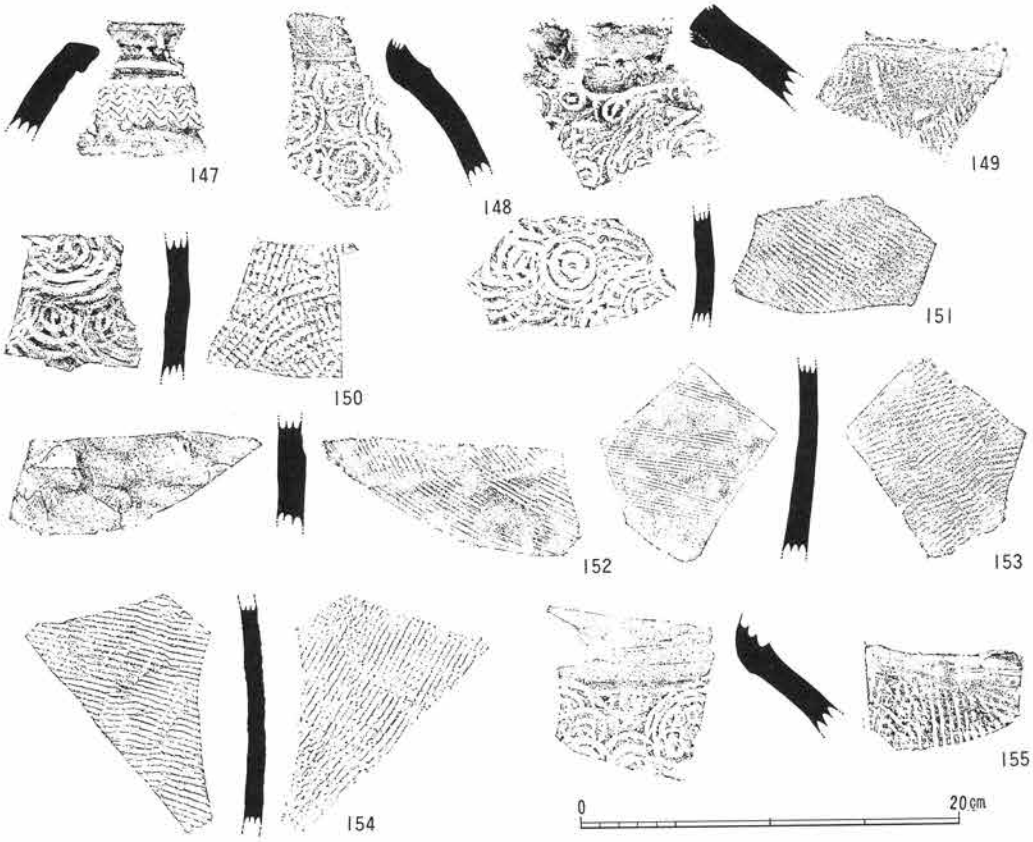
と体部上半が遺存し、口縁部のくびれの径は9.4cmを測る。体部外面には凹凸の少ない平行叩き目、その後に細かいカキ目が施され、最後に薄く自然釉がかかっているため、痕跡は明確ではない。内面には同心円の叩き目が施されている。内面にも釉がかかっている。

2) 土師器（第36図156～179　図版21）

土師器は器形不明の細片も多く、約8,300点を数える。そのうち内面黒色処理されたもの（殆ど椀で暗文２個体分を含む）30個体を数える。器種には杯・椀・鉢・甕が殆どで、図示できたものは須恵器に比べて少ない。

杯（156～162）

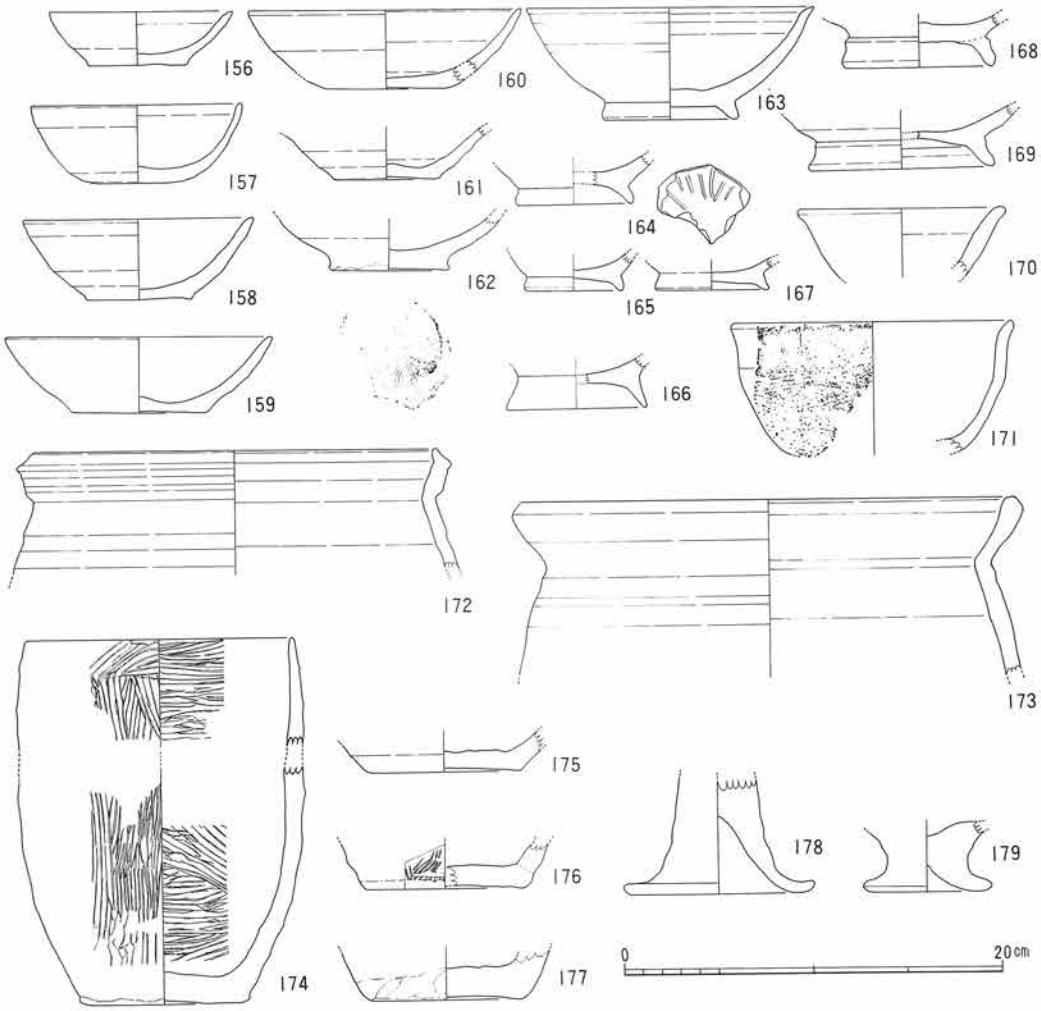
杯Ⅰには156、杯Ⅲには160、他は杯Ⅱである。径高指数は156が30、157が36、158が35でやや深く、159・160が28でやや浅い。156～161は磨耗著しく、調整や成形技法については158～161の底部回転糸切りの他は不明である。底部からの立ち上がりは、156・158・159・161が、体部中位で少しカーブさせ、他は直線状になっているのに対して、157・160・162は底部から口縁部まで全体が内彎気味に立ち上がる。特に157は、底部と体部の境周辺を丸くし、器面も滑らかで



第35図　遺構外出土土器（4）

ある。内面には油煙状の炭化物が付着し、灯明皿として使用されたものと思われる。161・162の体部はロクロ撫で調整である。162の底部は厚く作られ、回転糸切り無調整である。161の底部外面、162の内外面には煤が付着している。

椀（163～171）　全体の器形がわかるのは1個体しかない。163は口径15.2cm、底径（高台の径）は7cm、器高は5.9cmを測るが器面は磨滅している。高台の断面は三角形を呈し、外にやや直線状に開き、端部は丸くつままれている。高台の内面は浅くなっている。体部は内側にカーブしながら外上方に立ち上がり、口縁部で小さく外反している。端部は薄い作りになっている。164～169は底部破片（底径は5.0～9.8cmを測り、大小に差がある）で、高台の断面は皆三角形を呈するが、164・165は内彎、169は外反、166～168は直線状に外下方に開いている。164・165の体部下位にはロクロ撫での痕があり高台の内面は浅くなっている。167は内面黒色処理され、



第36図　遺構外出土土器（5）

暗文が底部を中心に放射状に見られる。底部外面はロクロ撫で調整が施されている。168の底部には回転糸切り痕がみられ、高台の貼り付け痕も顕著である。底部内外面の一部には、黒色の炭化物と暗赤褐色の付着物がみられる。170・171は底部を欠いているが、高台のつかない杯か鉢とも考えられる。胎土にはどちらも小礫が混入している。170は全体に歪んでいるが、推定口径は10.8cmを測る。体部の立ち上がりは、今までの杯や椀に比べてやや急である。口縁端部は厚く仕上げられ、断面円形を呈する。内外面とも横撫での痕が残る。内面には油煙が付着し、灯明皿に使われたものと思われる。171は口径14.6cmを測る。体部下位から外上方に立ち上がり、中位で直上し口縁部で外反している。端部は丸くつままれている。体部中位の外面には、刷毛状の工具による横撫で痕が残る。内面には、煤状のものが広がっている。

鉢（174・176・177）　平底で、体部や口縁部は円筒形を呈し、口縁部、体部は棒状工具による平行条線が、外面は縦、内面は横に施されている点が特徴である。174は口径14.0cm、器高19.2cm、底径9.0cmを測り、2/3程度遺存している。棒状工具によるカキ目は、体部外面を縦に掻いた後に、口縁部を斜か横に掻き最後に端部を丸くつまんでいる。内面は横行させているが、下から上に掻いている。底部の内外面や体部下位は撫で調整である。176・177は底部片で、体部下位の外面には174より細かい棒状工具による刷毛目痕が残る。176には底部と体部の接合痕が残る。176・177の胎土には小礫が多く含まれている。177の底部外面の周縁部には二次焼成時の煤が器面を黒変させている。

甕（172・173・175）　172・173は体部や底部を欠くが、いわゆる長胴、丸底の大形甕で、体部上位から口縁部にかけて「く」の字状にくびれそのまま外反している。172は口径21.4cmを測り、口縁部は直線状に開き、端部で内側に屈折し丸くつままれている。口縁部外面を厚くし、端部で薄い作りになっている。内外面とも入念にロクロ撫でされている。外面は煤で黒変している。173は口径26.2cmを測る。器壁は端部にいく程厚くなっている。端部は断面が丸く調整されている。内外面丁寧にロクロ撫でされている。175は底径8.0cmを測る。底部は回転糸切りで、体部下位の外面と底部内面はロクロ撫でによる凹凸がみられる。中形の甕の底部と考えられる。内外面に煤が付着している。皆、焼成が良好である。

高杯（178・179）　高杯は奈良・平安時代の遺物ではないが、紙面の都合上ここに載せておく。どちらも脚部だけの残存である。178は底径9.2cm、現存の高さは6.1cmを測る。179は脚部とその上は杯の底部が遺存している。底径5.4cm、現存の高さは5.4cmを測る。器面は剝落し、胎土にはどちらも小礫を多く含み粗くなっている。

3）　墨書土器（第37図　図版21・22—15～21）

本遺跡から墨書土器は総数12点出土し、その内訳は須恵器の無台杯10点と土師器の杯２点である。墨書の位置としては、体部に書かれているのが７点、底部には５点である。注目されるのは２・３・５・６のように同一文字と考えられるものや、１のように「木」と明確に読める

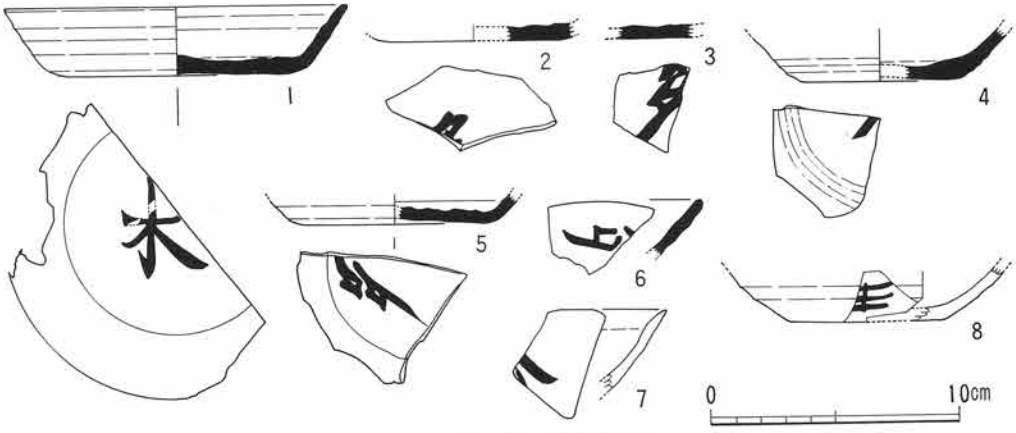
ものがある。

須恵器（1～6）　1は径高指数が20で、第33図の116と同一個体とも考えられる。墨書は底部外面の中央に、しっかりとやや大きく書かれている。「木」の2画目の上部が上に伸びており、下ははねている。三画目の最後を短かくはね気味にし、四画目を長くはらっている。2・3・5も無台杯の底部破片である。皆薄手に造られ底部は回転篦切りとなっている。6は口縁部の破片である。墨書はいずれも外面に書かれている。5の墨書は、底部周辺部にカタカナの「タ」が2つ重なったような「多」と書かれており、「郷」の偏「ﾀ」とも考えられるが、旁の方が他のどの墨書土器片にも見当らない。独立した一字と考えると「多」ともなるが、タが縦に重なっている点が不可解である。

土師器（7・8）　7は杯の口縁部であるが小片のため口径は不明である。比較的薄く作られ、外面にはロクロ撫でによる稜がみられる。口縁部内面はややふくらみ、端部で薄くつままれている。外面に墨書の一部があるが、文字は不明である。8は底径6㎝を測り、底部に回転糸切り痕が残る。ロクロ撫でにより器面は滑らかになっている。墨書は体部中位に横書きで「卅」（三十ヵ）と書かれている。7は竪穴住居出土、8は10Gグリッド表採である。他は旧流路より出土している。

4）刻書土器及び転用硯（第38図　図版22―4・5）

転用硯と思われるものが2個体あり、ともに旧流路出土である。底部外面には刻書と引っ掻きの痕が見られる。いずれも、須恵器の有台杯の底部破片である。底部は回転篦切りである。1は底径9.2㎝を測る。器面は滑らかで、内面の凹みの一部にロクロ撫での痕が見られるが、他は丁寧な撫で調整か研磨により消えている。体部の割れ口は、人為的に高台に沿って二次加工したことを物語っている。高台は外反しており、接地面は外に突出した分だけ広くなっている。高台内面はほぼ直角に削られている。体部外面に青灰色の釉がかかる。内面は平滑になってお



第37図　墨書土器

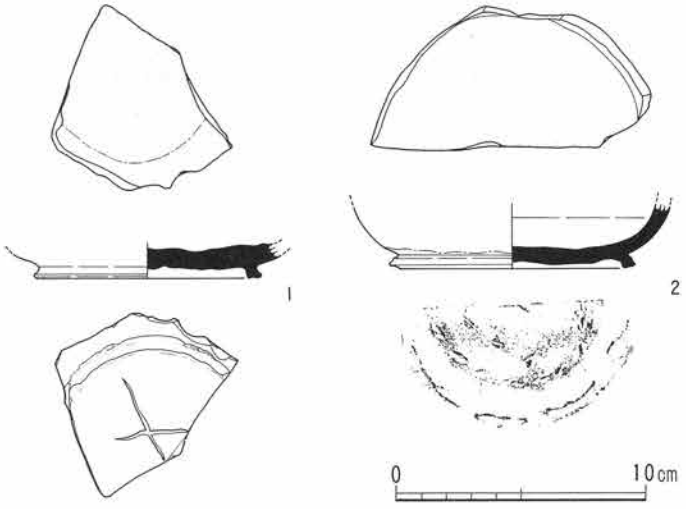
り、小さな凹みの一部には、墨と思われるものがみられる。底部外面中央には、鋭い金属器のようなもので「×」の刻印があり、窯印かと思われる。2は底径9㎝を測り、底部中央部が低くそのまま彎曲しながら、体部の立ち上がりにつながっている。体部下位の内外面や底部の高台内付近にはロクロ撫での痕が残る。底部内面には不整方向の撫で痕がみられ、滑らかになっている。一部が黒ずんでいる。高台は1より外に大きく開き、中位外面に小さな稜がみられ、内端接地している。高台内面は内彎している。所々高台内面の接地面が突出していて、高台の仕上げは良くない。底部外面には、二重の同心円状に引っ掻き痕が見られる。時計回りのロクロ回転に対して、反対方向から斜めに鋭利なもので刺したものと思われる。

5) 灰釉陶器（第39図　図版22―1～3）

本遺跡から20点（確認調査で1点検出されたのも含む）出土している。器種としては椀が6点、皿が5点、段皿が1点、長頸瓶が1点、その他不明の体部片が8点である。細片が多く、図示できたのは5個体に過ぎない。胎土、色調、釉などそれぞれ異なる。

長頸瓶（1）　口縁部の破片で、口径13.2㎝を測る。頸部から口縁部にかけてラッパ状に開いた後、端部を上下に突出させ、外側に隆帯状にめぐっている。端部の外側を小さく外反させながら、徐々に薄くなり、端部は丸くつままれている。口縁外面にロクロ撫での痕が見られ、他は灰釉が厚くかかっている。淡緑灰色の釉が漬け掛けされている。胎土は緻密であり、乳白色を呈する。

椀（2～4）　2～4は下半部の破片である。2は底径（高台径）8.3㎝と比軽的大きい。形態の特徴は高台が高く、斜め外下方に真っ直ぐ開く。外面の貼り付け部がくびれ、高台の器壁は中位が一番厚くなり、接地面は丸くつままれている。底部から体部にかけての立ち上がりは緩やかに彎曲している。内外面とも入念なロクロ撫でにより器面は滑らかである。胎土は緻密であり灰白色を呈する。刷毛塗りにより、上部外面乳白色、内面淡緑灰色の施釉がみられる。内面の底部付近の釉は剝落している。3は底径6.7㎝を測る。高台は外に開き、内面が内彎し、外面下



第38図　刻書土器及び転用硯（スクリーントーンは磨り痕範囲を示す）

端が内傾し、いわゆる断面は三日月形を呈する。体部の立ち上がりは2と同様に緩やかに彎曲している。外面の高台上半部と体部下位は、回転篦削り調整で、他はロクロ撫で調整により仕上げは良い。胎土は緻密であり、淡灰褐色を呈する。漬け掛けと思われる淡緑灰色の釉が、内面には見込みに一筋、外面には体部下位から流れて一部高台部まで達している。釉はおそらく他例と同様、体部上半部に施釉されていたものと思われる。殆ど薄目で、淡黄褐色を呈している。4は底径が6.7cmを測ることや体部の立ち上がりの形態など3に類似する。高台の断面は三日月形だが、外面中位の屈折部は、ロクロ撫でにより滑らかで内端接地する。内外面全体に丁寧にロクロ撫で調整されている。胎土はほぼ緻密で、灰色を呈する。上部内外面に刷毛塗りか漬け掛けか不明であるが、灰白色と淡緑色の施釉がみられる。

段皿（5）　下半部が遺存するもので、底径は6.1cmを測る。高台は低いが、幅が広く外下方に開く。内面が彎曲し、接地面は丸くおさまる。体部は外に大きく開き、見込み付近が一段低くなり、幅約3mmの沈線がめぐる。高台内面と、段による凹みは、回転篦削りで、他はロクロ撫でにより丁寧に調整されている。体部中位の割れ口は人為的に引っ掻いて調整した痕と思われる。施釉は漬け掛けで、内面上半部と段による凹みに淡緑灰色の釉がみられる。3は9Jグリッドの SK13より、4は確認調査により検出され、他は旧流路出土である。

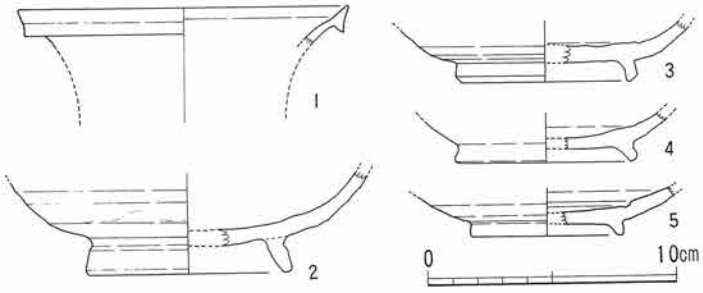
C．その他の遺物

土器以外の遺物には土製品、鉄製品、銭貨があるが、奈良・平安時代より新しい遺物も紙面の都合で一括してとり挙げた。

1）　土製品（第41・42図　図版22―6～11・13・14）

本遺跡では、土錘が比較的多く（53点）出土し、他にフイゴの羽口（4点）、不明土製品（1点）がある。

土錘（第40図　図版22―6～11）　1・3・5は完形品で、4もほぼ完形である。半数以上が細片で磨耗している。形態的に分類すると、円筒形（1・3など）と多面体形（2・4・5など）の2種に分けられる。円筒形は6体を数え、他は多面体形（不整形で歪んだものが多い）で、長さは5.3～6.8cm、最大径は3.9～5.2cmを測る。成形は、棒状のものに粘土塊を巻きつけた後に、撫でて調整したものである。1・3のように、丁寧に仕上げられているもの



第39図　灰釉陶器

と、2・4・5のように雑なつくりのものがある。従って、孔が土錘の中心を通っていないものが殆どである。孔の径は、上下ともほぼ同じ径量を呈するが、3・5は、一方が成形時に潰れたものと思われる。孔の径は1.0～1.5cmを測るものが大半を占める。重量は、1が100g、3が106g、4が105g、5が131gである。1は竪穴住居、2はP277出土の他は旧流路である。

羽口（第41図1　図版22—13）　端部破片で、推定外径約6.6cm、内径約2.3cmを測るが、歪んでいる。先端には、ガラス質の溶解物が付着し厚くなっている。旧流路出土である。鉄滓も数点出土している。

不明土製品（図版22—11）　厚さ1.5cm前後の平面三角形の板状を呈し、一辺の中央に半円形の孔を穿ったような凹みがある。裏面には、煤状の炭化物が付着している。11Lグリッドの包含層出土である。

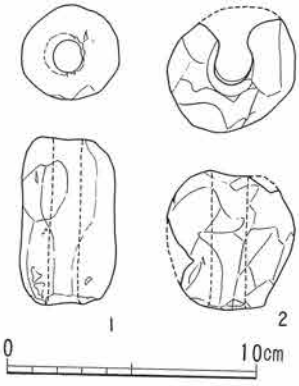
2）　鉄製品（第41図　図版22—14）

サビの涌出により、全形、用途は不明のものばかりである。2は最大径6cmの不整の円形で、主体部の厚さは5mm前後である。鉄製品としては他に釘状に細長いものや、鍋の口縁部に似たものなど9点出土している。大半は段丘の北側より出土している。

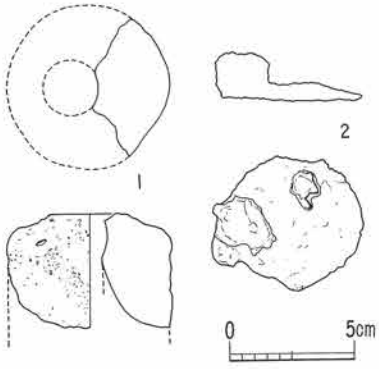
3）　銭貨（第42図　図版22—12）

寛永通宝が1枚、P27上部より出土している。風化して薄くなっている。「寶」の書体から新寛永（1668年以降）と考えられる。

第42図　寛永通宝



第40図　土錘



第41図　フイゴ羽口・鉄製品

3. 中世・近世

中・近世の遺物の多くは遺構からの出土ではなく、畑地及び水田の耕作土中からの単発的なものである。中世に属する遺物の種類、数量（破片数）は、瀬戸系陶器７点、珠洲系陶器30点、越前系陶器６点、舶載の染付１点、青磁３点である。近世では唐津焼32点、京焼風１点、越中瀬戸系９点、その他不明磁器片が多数出土した。これらの遺物に関連する遺構は検出されなかったが、戦前の耕地整理時の土の移動等で搬入したものと考えられ、調査地区周辺に中・近世の遺跡が存在するものと思われる。以下、遺物を種類別に記述する。

1） 中世陶磁器

瀬戸系陶器（第43図１・２　図版23―１・２）　１は灰釉椀の底部片である。釉は淡緑色を呈し、高台内及び腰部は露胎である。胎土はやや粗く灰白色である。高台内のヘラグリは平担で、高台のつくりは台形を呈する。２は口縁部から胴部にかけて残存する香炉片と推定される。外面と内面頸部には淡緑色の灰釉が施釉され、内面胴部は露胎となっている。胴部から口縁部にかけて垂直に立ち上がるが若干外反気味となる。13Hグリッド出土。この他に図示しなかったが、瓶の胴部と推定されるものが３点出土している。いずれも15世紀後半から16世紀に比定（楢崎　1977）される。

珠洲系陶器（第43図３～11・16　図版23―３～16）　３～８は擂鉢、９・10・16は甕の胴部及び底部片である。３は口縁部にくびれをもつもので肥厚し、器形は直線的に立ち上がる。器壁は薄手であるがシャープなつくりである。胎土はやや粗く、色調は灰色を呈する。内面には１単位８本の太い櫛目が引かれている。４はやや内彎気味に口縁部に至るもので、口唇部の平担面は外側に位置している。色調は灰白色で胎土は砂質土を多く含み、焼成良好であるが幾分軟質な感じを受ける。櫛目は細く上から下へ施されている。14Eグリッド出土。５～８は底部からゆるやかに内彎し、口縁部でくびれ外反する器形をとる。口縁部は内傾し、横位の櫛目波状文が施されている。５・６・８は胎土、焼成とも良好で珠洲焼と思われる。９・10は色調が淡灰色で、胎土・焼成とも良好である。12は底径推定７cmを測り、静止糸切り痕を有する紐轆轤成形の壺と思われる。珠洲焼編年（吉岡　1981）に対比すれば、３・４がIII～IV期（13世紀後半～14世紀）で、５～８はVI期（15世紀後半）に位置づけできよう。その他９・10・16はIV～VI期の範疇内でおさまるものと考えられる。

越前系陶器（第43図12・13　図版23―17・19）　12は口頸部から胴部付近の甕の破片である。外面は濃赤茶褐色、内面は淡茶褐色を呈し、胎土は灰色で良好、堅緻である。外面にはやや右下りの条線状の叩き痕を有し、瓷器系陶器には特異なものである。13は甕底部で、底径推定18.2cmを測る。色調は淡茶褐色を基調とし、焼成良好、堅緻である。底部面は雑であるがヘラによるナデ調整が行われている。時期は詳細不明である。

青磁（図版23—20～22）　いずれもヘラ先による蓮弁文が施される椀であるが、細片のため図示しなかった。旧流路覆土上層より出土した。3点とも15世紀後半から16世紀（上田　1982）に位置付けられる。

白磁（第43図14　図版23—23・24）　14（23）は体部上位で内彎する皿で、釉は内面全面と外面腰部まで施釉されているが、腰部から底部にかけては露胎である。磁胎は黄白色で、釉は黄色がかった白色を呈し、細かい貫入が見られる。外面の露胎部分にはヘラ状工具による加飾が施されている。口径は推定11cmを測る。(24)は無高台の皿で、釉は灰白色、磁胎は灰色をおびた白色を呈する。見込みから立ち上り部分に沈線がめぐるもので、10Ｊグリッド耕作土中より出土する。これらの白磁の時期は詳細に知り得ないが、14（23）はおおよそではあるが13世紀（森田　1982）に位置付けできよう。

染付け（第43図15　図版23—25）　見込みには一重の界線内に「福」の字が描かれている椀である。高台内も施釉されているが、畳付から高台内底部にかけては露胎である。底径5.3cm、高台高1.6cmを測り、胎土はやや赤味をおびた灰白色で緻密である。おそらく外面に唐草文が描かれるものと思われる。類似するものに山梨県新巻本村出土の染付（小野　1981）がある。16世紀の明産と思われる。

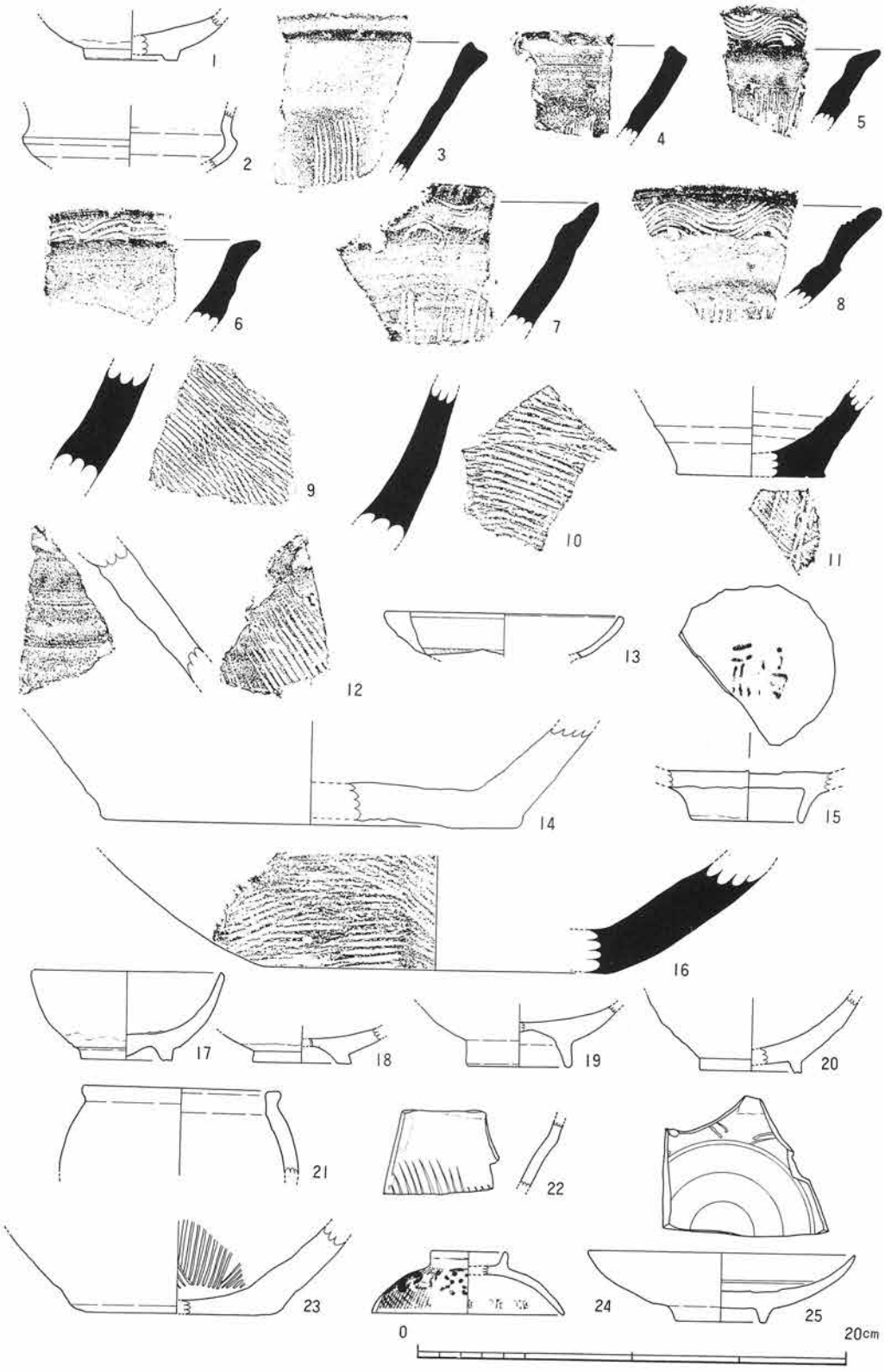
2）近世陶磁器

唐津（第43図17・18・22　図版23—26～29）　17は口縁部で内彎し、見込みに胎土目痕を有する椀で、口径8.8cm、底径4.2cm、器高4.1cmを測る。釉は緑茶色、胎土は赤茶褐色を呈し、ケズリ高台である。段丘の耕作土より出土している。18は見込みに砂目痕を有し、底径は推定4.3cmを測る。22は擂鉢片で、成形・焼成とも良好で、胎土は茶褐色を呈する。(27)は刷毛目椀で、11Ｌグリッドより出土する。(29)は天目と思われる椀で、内面には黒茶色の釉が施されている。胎土は赤茶褐色を呈し、底径は推定4.6cmを測る。胎土及び成形等から唐津焼とした。唐津焼の編年（大橋　1984）から16世紀後半から17世紀の所産であろう。

京焼（第43図19　図版23—30）　器全面に釉が施されているが、畳付部分だけが拭き取られ露胎となっている。外面は一見化粧掛けのような感じを受け、釉がよく溶けていない。高台は若干「ハ」字状にひらき、底径は推定4.8cmを測る。胎土はやや赤味をおびた黄白色である。

越中瀬戸（第43図21・23　図版23—32・33）　21は広口壺で鉄釉が施されているが、釉が良好に施釉されておらず雑な感じを受ける。口径は推定9.1cmを測る。23は淡い黄橙色の胎土の擂鉢で、内面は全面に卸し目が施されている。21は18世紀に属するものと思われる。

不明陶磁器（第43図20・24・25　図版23—31・34・35）　20は非常に入念なつくりの椀で、釉は淡い灰緑色で高台内は露胎である。肥前系と思われる。24は染付の蓋で、25は見込みに蛇の目釉ハギが施されている皿である。



第43図　中近世陶磁器（瀬戸．珠洲系．越前系．白磁．染付．唐津．越中瀬戸．京焼）

第V章　ま　と　め

1.　掘立柱建物について

調査区の段丘6,400㎡から検出された遺構は、竪穴住居１基・掘立柱建物７棟・土坑23基・溝３本・ピット409基である。このうちピット409基については、９Ｇグリッドより一部掘形のしっかりとしたものが数基検出されており、さらに数棟の建物が存在した可能性がある。

掘立柱建物は、建物相互の切り合い関係もなく、建物に伴う遺物も少ないため遺構相互の詳細な関係は不明であるが、主軸方位や柱掘形、平面積などから大別すればＡ・Ｂの二群に区別することができる。Ａ群は方位が北50°～60°西偏で、建物の平面積は40㎡以上を測り、柱掘形は一辺60～120㎝で方形を呈するものが多く、ＳＢ１・３・６が所属する。一方、Ｂ群は方位が北20°～30°西偏で、建物の平面積が40㎡以下となり、柱掘形は径30～80㎝の円形に近い形を呈するものが多く、ＳＢ２・４・５・７が所属する。このなかで特に注目されることは、ＳＢ３の規模の大きさである。ＳＢ３は第３表のごとく他の建物に比べ卓越した建物で、廂を含めた平面積は96.4㎡を測る大形建物である。この大形建物の類例は、北陸地方では石川県法仏遺跡・安原工業団地遺跡・横江庄遺跡（湯尻　1983)、富山県じょうべのま遺跡・高瀬遺跡（富山県教育委員会　1974）などが挙げられるが事例は多くはない。建物群の時期については、建物に明確に伴う遺物が少なく、時期は不明である。あえて形態などから推定するならば、ＳＢ３を代表とする建物Ａ群は奈良時代に位置付けられよう。また、遺跡の東側に位置する旧流路からは８世紀前葉の土器（遺物ａ群）が多量に出土しており、地形等から他の遺跡からの流入ということは考えられず、遺物ａ群と建物Ａ群は対応する可能性が強い。従って建物Ａ群の年代は８世紀前半とも想定できる。建物Ｂ群については、短絡的に遺物ｂ群に対応することはできないが、建物Ａ群より時期的に降るものとして考えておきたい。

第44図は県内の主な古代掘立柱建物の主軸方位と平面積を組み合せ図化したものである 。いず

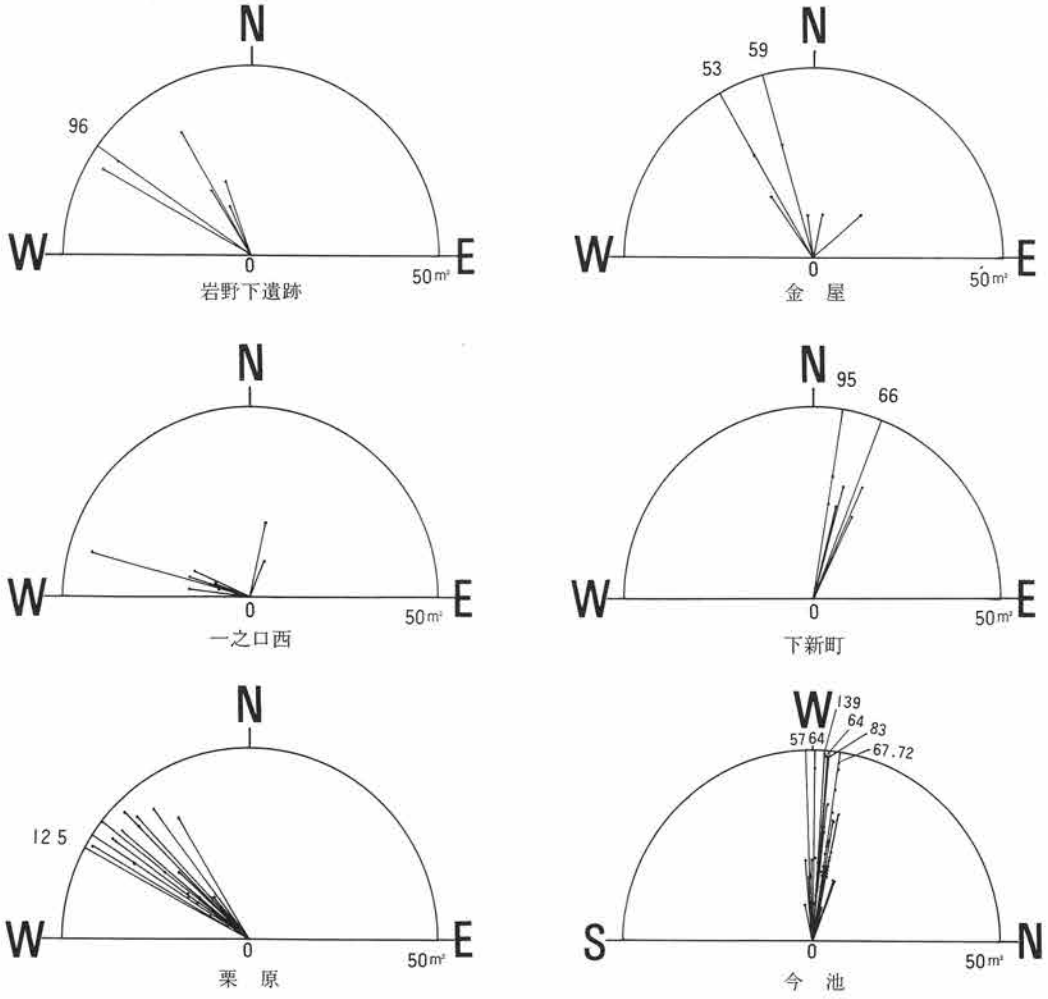
番号	位置	規模（間）	主軸	桁行（m）	梁間（m）	柱掘形（㎝）	平面積（㎡）	タイプ	備考
ＳＢ１	7･8F	４×２	N－60°－W	8.60	5.25	45～80	45.15	A	
ＳＢ２	7.8G	４×N３ S２	N－30°－W	7.15	5.20	56～95	37.18	B	
ＳＢ３	11・12H	４×３	N－55°－W	8.35	9.15	80～110	96.40	A	廂付
ＳＢ４	12G	２×１	N－23°－W	西3.8 東3.4	南3.83 北4.25	30前後	14.5	A	
ＳＢ５	７Ｋ	３×２	N－31°－W	5.35	3.80	50～70	20.33	B	
ＳＢ６	11H	４×３	N－55°－W	8.30	5.30	60～95	43.7	A	
ＳＢ７	10G	３×１	N－19.5°－W	5.70	3.70	32～53	21.09	B	

第３表　掘立柱建物計測一覧

れも限られた範囲でしか調査されておらず、遺跡の全容を把握しているものではない。資料的に制約はあるが、各遺跡の概略を記し比較・分析することにより本建物群の性格を検討してみる。

金屋遺跡　南魚沼郡六日町大字余川に所在し、魚沼丘陵の東側の扇状地の扇央に立地する平安時代の遺跡である。6棟の掘立柱建物と10基の竪穴住居が検出された。掘立柱建物の規模は一定せず、配置に規則性をもたない性格不明の遺跡と報告されている（新潟県教育委員会 1985）。

一之口遺跡西地区　上越市大字中屋敷・寺分に所在し、関川の氾濫原より一段高い丘陵面に立地する9世紀後半から10世紀前半の遺跡である。微高地上に大規模な建物が存在し、それに近接して多くの居住建物が散在している（新潟県教育委員会　1986a）。なお、建物群のなかには総柱建物で平面積が60m²以上のものがあるが、一部未調査のため図示しなかった。



第4表　県内の古代掘立柱建物の主軸方位と平面積

栗原遺跡　新井市大字栗原に所在し、頸城平野の南側の段丘上、標高約30mに立地する８世紀初頭に成立する遺跡である。「郡」の墨書土器が出土しており、頸城の郡衙などの官衙関連遺跡と想定されている（新潟県教育委員会　1982・1983）。

今池遺跡　上越市大字今池に所在し、頸城平野西側のほぼ中央、関川右岸の標高約16mの段丘上に立地する８世紀前半から９世紀前半を中心とする遺跡である。墨書土器・円面硯・瓦塔・畿内地方からの搬入土器などが出土し、国府あるいは官人の居宅を含む地方官衙関連遺跡と位置付けられている（新潟県教育委員会　1984）。

下新町遺跡　上越市大字下新町に所在し、関川の支流である櫛池川の右岸、標高約15mの段丘上に立地する８世紀中頃に成立する遺跡である。今池遺跡に隣接し密接に関連する遺跡である（新潟県教育委員会　1984）。

第44図から看取できることは、第一に栗原遺跡・今池遺跡で示す方位形態である。栗原遺跡では北30°～60°西、今池遺跡では真西を中心に30°の範囲で全建物が配置している。第二に平面積による建物群のグルーピングである。今池遺跡では20m²・30m²・40m²前後の平面積をもつ建物群、金屋遺跡では10m²～20m²、一之口遺跡西地区では10m²前後、栗原遺跡では15m²・40m²前後、下新町遺跡では25m²前後、岩野下遺跡では20m²・40m²前後の建物群に区別できる。６遺跡のなかでも今池・栗原両遺跡は、国府あるいは地方官衙関連遺跡として想定されていることは、規則正しい数値を示す図からも窺える。岩野下遺跡は今池遺跡・栗原遺跡で示す形態とは異なり、どちらかといえば金屋遺跡・一之口遺跡西地区と類似する。

一方、北陸地方の古代掘立柱建物について湯尻修平は、建物群の類型化を試み、性格付けをしている（湯尻　1983）。この類型によれば、本遺跡のＳＢ３を含む建物Ａ群は、「平面積が100m²前後の建物を主屋とする」第Ⅱ類に類似している。また、岸本雅敏は富山県内の掘立柱建物の規模や平面積から、「平面積が50m²を上まわれるものは庄家跡などの中心的建物である」と指摘している（岸本　1986）。この湯尻・岸本両氏の論考は、平面積を中心に述べられており、岩野下遺跡のＳＢ３を含む建物Ａ群も平面積からすれば、今池・栗原遺跡と類似するところがある。しかし、検出棟数が少ないため性格を早急に導き出すことは出来ないものと考えられる。ただ、現段階でいえることは、ＳＢ３は規模や形態から他の建物とは異なる様相を示していることである。それが遺跡内の建物群での優位性なのか、遺跡そのものが持っている優位性なのかは不明である。今後、西頸城地方を含む北陸地方の資料の集積を待って再度検討したい。

2.　奈良・平安時代の出土遺物について

本遺跡の出土土器の主体をなすのは、ａ群―奈良時代前期（８世紀前葉）とｂ群―平安時代中期（９世紀後葉～10世紀中葉）の土器である。

遺構出土の土器のうちＳＫ１出土の土師器の杯は遺存度良好で、形態や法量の類似したものばかりである。これらはすべて杯Ⅱで、径高指数は31～36と身は深目である。体部下半が丸味

を帯びながら立ち上がるタイプで、一之口遺跡西地区（新潟県教育委員会　1986）のＳＥ183出土の一括土器（９世紀末葉～10世紀中葉）にその類例をみることができる。ＳＫ15やＰ240、竪穴住居出土の土師器の杯もほぼ同様のｂ群と考えられる。

遺構外では旧流路より遺存度の良い須恵器が多く出土し、中でも供膳形態の蓋・有台杯・無台杯が資料豊富である。他に灰釉陶器などが出土している。

須恵器の蓋は蓋IIIのうち天井の低いもの（第32図66～68）が古く位置づけられ、今池遺跡編年のＩ期や栗原遺跡のＳＤ25出土土器（ａ群）に併行するものと推察される。蓋IIで天井が低いもの（61～65）も製作技法や形態等が類似しており、ほぼ同時期頃と考えられる。有台杯には蓋IIIと対応する有台杯IIIがあり、口縁部が小さく外反するもの（96～99）が時期的に古く位置づけられよう。有台杯Ｉや有台杯IIで口縁部が外反し、体部下位に丸味をつけて腰が張るタイプ（84～89）もほぼ同時期頃と推定される。本遺跡では身の深い有台杯は出土していないが、糸切りの有台杯（104･105）や無台杯（第33図120）も若干含まれ、中でも有台杯は底部中央だけ糸切り痕を残し、他はロクロ撫でによって消去する手法は、今熊窯産の土器（今池遺跡編年のＶ期の９世紀前葉～中葉に対応する）に類似している。無台杯は口径に比べて底径がやや大きく腰の張る無台杯が主体であるが、口径に比べて底径が小さく器厚の薄い無台杯（117･118）も出土している。前者のうち無台杯Ｉの107～109の底部や体部下位の形態、胎土、色調などからａ群に伴うものと考えられる。また後者は今池遺跡編年のVI期（９世紀後半）頃まで降るものと思われる。

稜椀は今池遺跡編年のＩ期（ａ群）に相当する稜椀と形態や法量、胎土や色調など類似する点が多い。鉄鉢型土器は県内では出土例が少なく、わずかに栗原遺跡（新潟県教育委員会　1982）があり、県外では小杉流団のNo.16遺跡第２号窯（富山県教育委員会　1980）、平城京II期のＳＤ485（奈良国立文化財研究所　1974）などと同じ頃（ａ群）に位置づけられよう。小形の短頸壺も小杉流団No.16遺跡の第２号窯出土土器に酷似している。小形の長頸壺は今池遺跡のＳＤ３III層やＢ地区南部包含層や金屋遺跡（新潟県教育委員会　1985）、曽根遺跡（豊浦町教育委員会　1981）など出土例は多い。いずれもｂ群に比定されている。

灰釉陶器はすべて東濃産と考えられる。椀２（第39図）の刷毛塗りを除き、他は漬け掛けによるものと推察されるが、細片のため明確ではない。２は光ケ丘１号窯（９世紀後半）、ＳＫ13出土の３は虎溪山１号窯（10世紀中葉）の所産と考えられ、他の灰釉陶器もｂ群[註]と推定される。

（註）　灰釉陶器については前川要氏の御教示を得た。

引用・参考文献

糸魚川市役所　1976　『糸魚川市史１』

糸魚川市役所　1986　『糸魚川市史　資料集１—考古編』

糸魚川市教育委員会　1981　『糸魚川市の文化財（その４）』埋蔵文化財編

糸魚川市教育委員会　1984　『糸魚川市遺跡詳細分布調査報告書』

上田秀夫　1982　「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会

青海町教育委員会　1979　「西角地窯跡」『大角地遺跡』

大石直正　1970　「平安時代の郡・郷の収納所検田所について」『日本古代・中世史の地方的展開』　吉川弘文館

大橋康二　1984　「肥前陶磁の変遷と出土の分布」『国内出土の肥前陶器』　佐賀県立九州陶磁文化館

小野正敏　1981　「山梨県東八代郡一宮町新巻本村出土の陶磁器」『貿易陶磁研究』No.1　日本貿易陶磁研究会

柿崎町教育委員会　1960　『鍋屋町遺跡』

金子拓男　1967　「新潟県柏崎市剣野Ｅ地点遺跡出土遺物について」『信濃』第19巻第２号　信濃史学会

岸本雅敏　1986　「新町II遺跡の古代掘立柱建物群の性格」『新町II遺跡の調査』　婦中町教育委員会

越坂一也　1983　「北陸における縄文時代前期中・後葉土器の編年について」『石川考古学研究会々誌』第26号

小島俊彰　1974　「北陸の縄文時代中期の編年」『大境』第５号　富山考古学会

斉藤孝正　1981　「尾北窯における灰釉陶器の変遷」『桃花台ニュータウン遺跡調査報告III』　小牧市篠岡古窯址群

斉藤孝正　1982　「猿投窯における灰釉陶器の展開」『考古学ジャーナル』211　ニューサイエンス社

坂井秀弥　1984　「今池遺跡群における奈良・平安時代の土器について」『上新バイパス関係遺跡発掘調査報告Ｉ』　新潟県埋蔵文化財調査報告書35集

坂井秀弥　1986　「平安時代の中期の土器」『上越市春日・木田地区発掘調査報告書II　一之口遺跡西地区』　新潟県埋蔵文化財調査報告書40集

坂本賞三　1985　『荘園制成立と王朝国家』　塙書房

佐原　真　1977　「石斧論—横斧から縦斧へ」『考古学論叢—慶祝松崎寿和先生六十三歳記念論文集』広島大学文学部考古学研究室松崎寿和先生退官記念事業会

上越市立総合博物館　1983　『掘り起こされた古代のくびき』　上越市立総合博物館考古特別展示図録

鈴木道之助　1981　『図録石器の基礎知識III』　柏書房

高堀勝喜　1965　「縄文文化の発展と地域性—北陸」『日本の考古学』　河出書房

田口昭二　1983　『美濃焼』　考古学ライブラリー17　ニューサイエンス社

田島明人　1983　「奈良・平安時代の建物グループと集落遺跡」『北陸の考古学』　石川考古学研究会々誌第26号

富山県　1972　『富山県史』　考古編

富山県教育委員会　1974　『入善町じょうべのま遺跡・高瀬遺跡』　富山県埋蔵文化財調査報告III

富山県教育委員会　1980　『小杉流通業務団地内遺跡群　第２次緊急発掘調査概要』

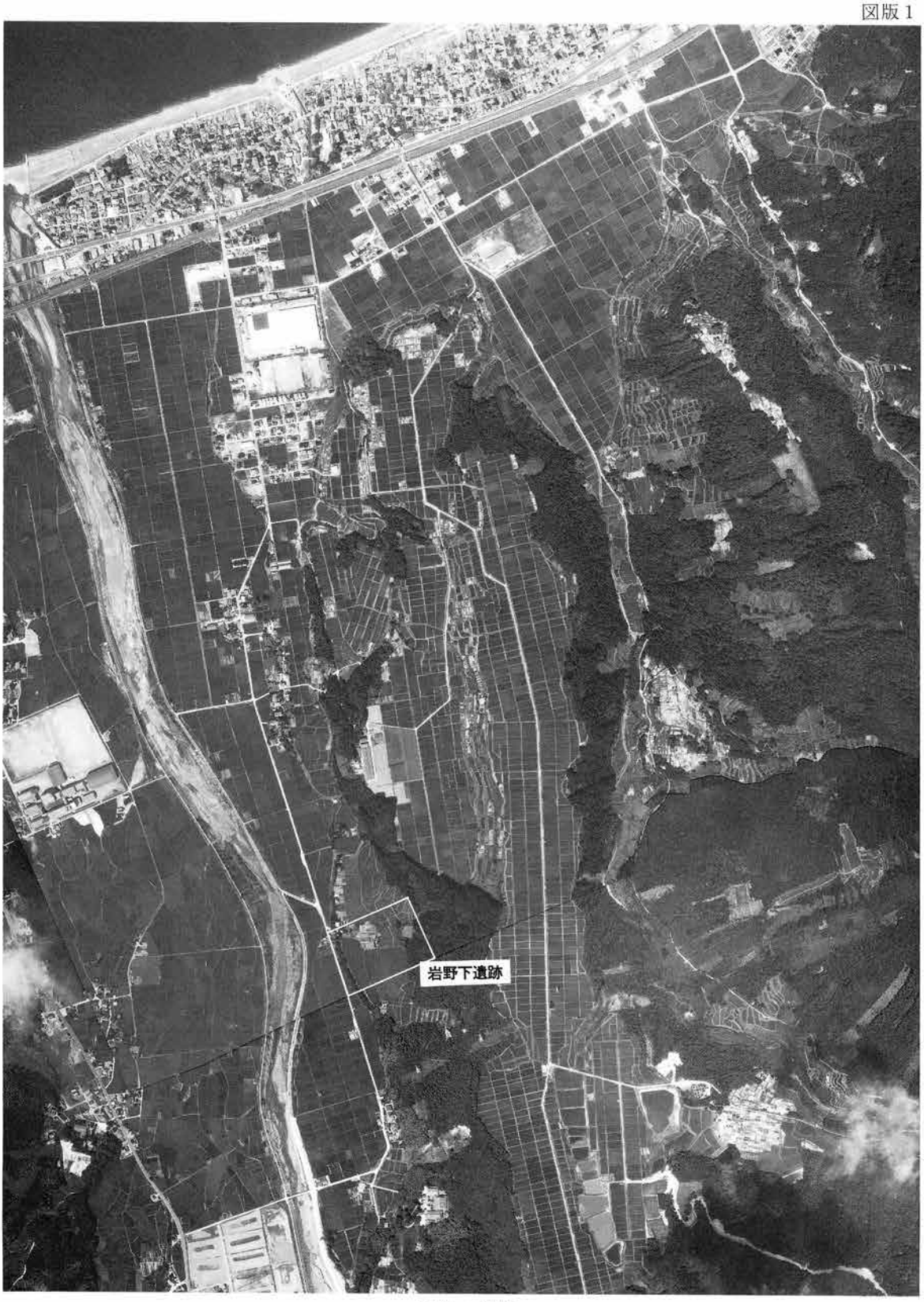
富山県教育委員会　1984　『小杉流通業務団地内遺跡群　第６次緊急発掘調査概要』

豊浦町教育委員会　1981、1982　『曽根遺跡』Ｉ・II

中田興吉　1986　「郷里制の施行と村落」『歴史学研究』550号　歴史学研究会

中野栄夫　1982　『中世荘園史研究の歩み』　新人物往来社
奈良国立文化財研究所　1974　『平城宮発掘調査報告VI』
奈良国立文化財研究所　1976　『平城宮発掘調査報告VII』
奈良国立文化財研究所　1978　『平城宮発掘調査報告IX』
楢崎彰一　1977　「中世の社会と陶器生産」『世界陶磁全集３』　日本中世　小学館
新潟県　1986　『新潟県史』　通史編１　原始・古代
新潟県教育委員会　1982　『栗原遺跡４次・５次発掘調査概報』
新潟県教育委員会　1983　『栗原遺跡６次発掘調査概報』
新潟県教育委員会　1985　『金屋遺跡』　新潟県埋蔵文化財調査報告書37集
新潟県教育委員会　1986ａ　『上越市春日・木田地区発掘調査報告書II　一之口遺跡西地区』新潟県埋蔵文化財調査報告書40集
新潟県教育委員会　1986ｂ　『北陸自動車道　糸魚川地区発掘調査報告書Ｉ』新潟県埋蔵文化財調査報告書45集
藤井一二　1986　『初期荘園史の研究』　第３編２章　塙書房
藤田富士夫　1983　「玦状耳飾の編年に関する一試論」『石川考古学研究会々誌』第26号
保立道久　1984　「中世民衆経済の展開」『講座日本歴史』第３巻　東京大学出版会
前川　要　1984　「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要III』瀬戸市歴史民俗資料館
松任市教育委員会・石川考古学研究会　1983　『東大寺領横江庄遺跡』
森田　勉　1982　「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会
山本武夫　1976　『気候の語る日本の歴史』　そしえて
湯尻修平　1983　「加賀、能登における掘立柱建物の類型と性格」『東大寺領横江庄遺跡』　松任市教育委員会・石川考古学研究会
吉岡康暢　1979　「北陸の須恵器」『世界陶磁全集２』日本古代　小学館
吉岡康暢　1981　「中世陶器の生産と流通(1)―北東日本海域の珠洲系陶器を中心に―」『考古学研究』第108号　考古学研究会

図　　版



周辺の地形

図版 2

1.遺跡遠景（東から）

2.遺跡遠景（西から）・上は岩野E遺跡・下は岩野下遺跡

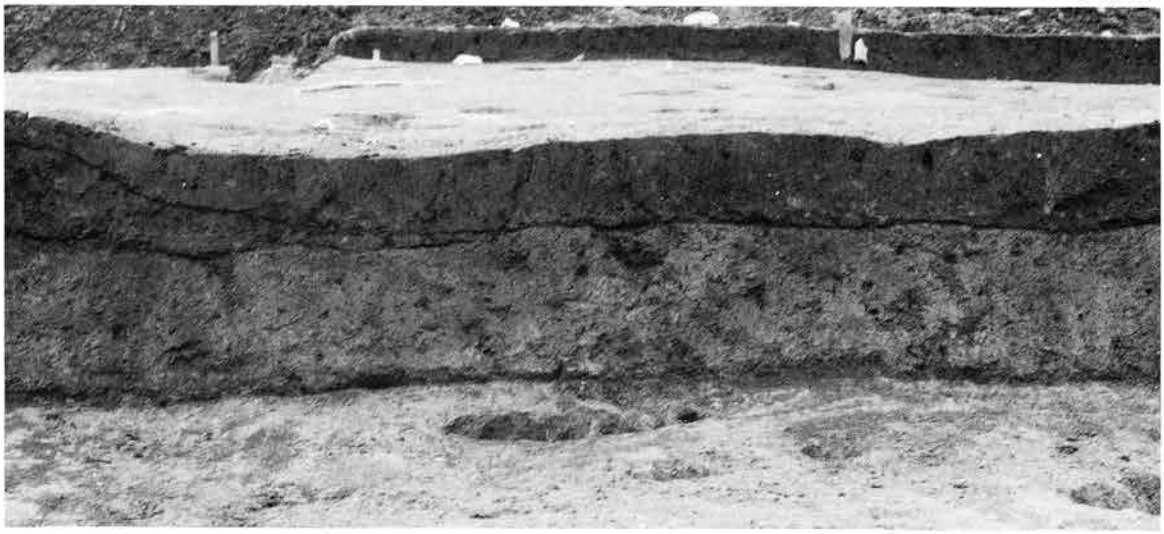
1.遺構全景（東から）

2.遺構全景（北西から）

図版 4

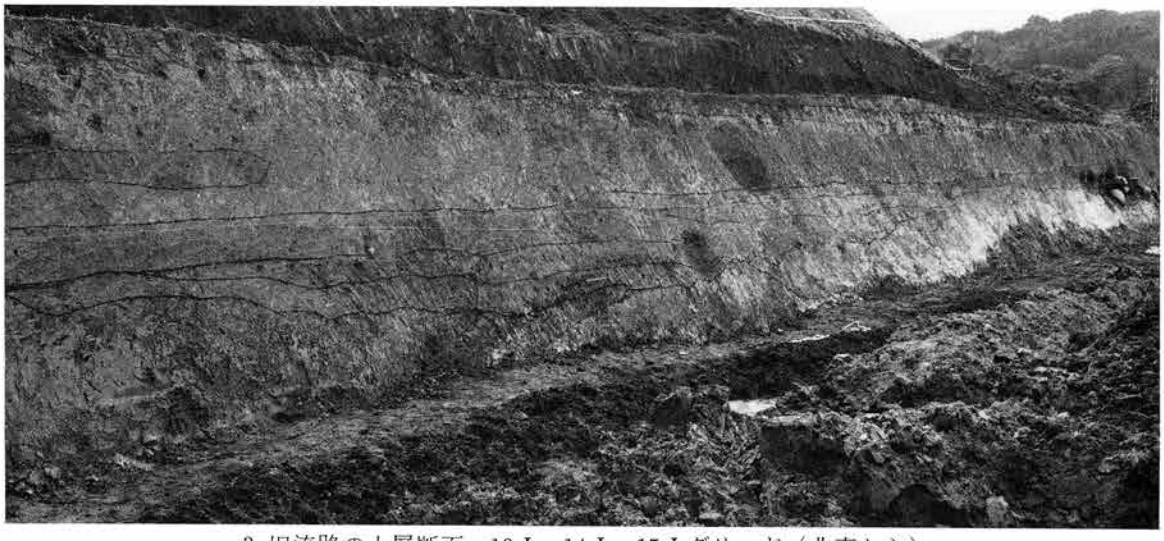
1.発掘風景（南東から）

2.発掘風景（北東から）



1.遺跡中央部の土層断面・10Ｉグリッド東側（西から）

2.遺跡縁辺部の土層断面・６Ｉグリッド北側（南から）

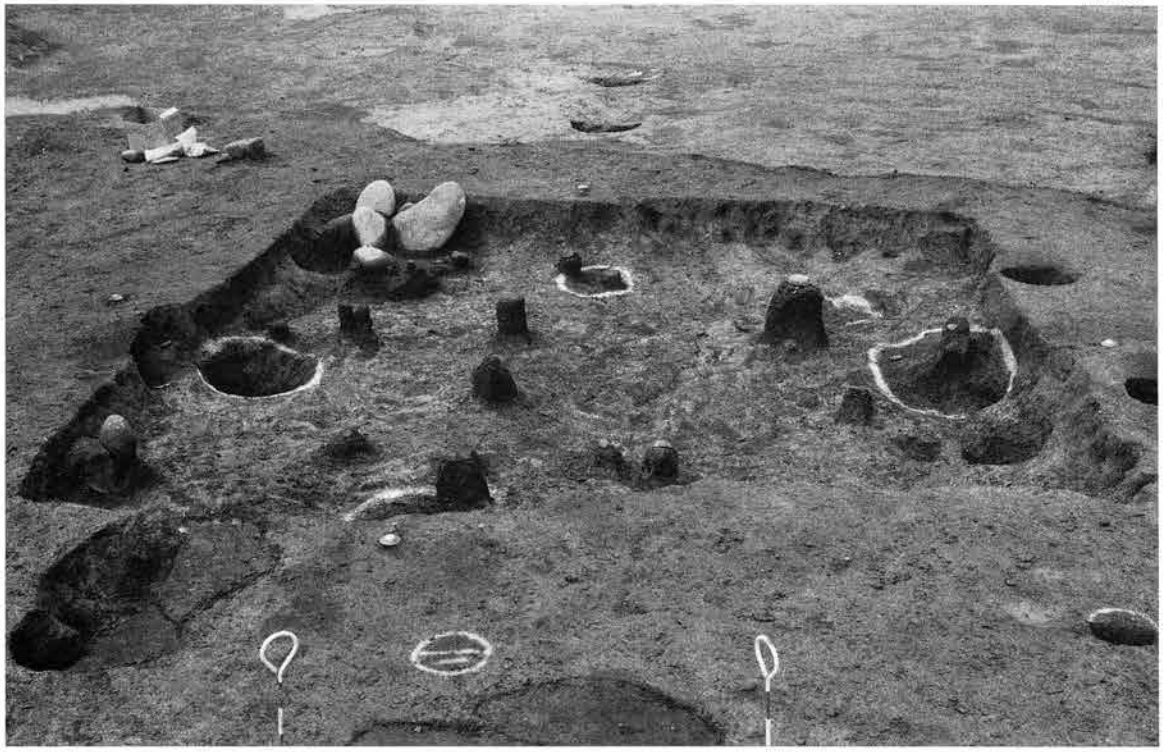


3.旧流路の土層断面・13Ｊ・14Ｊ・15Ｊグリッド（北東から）

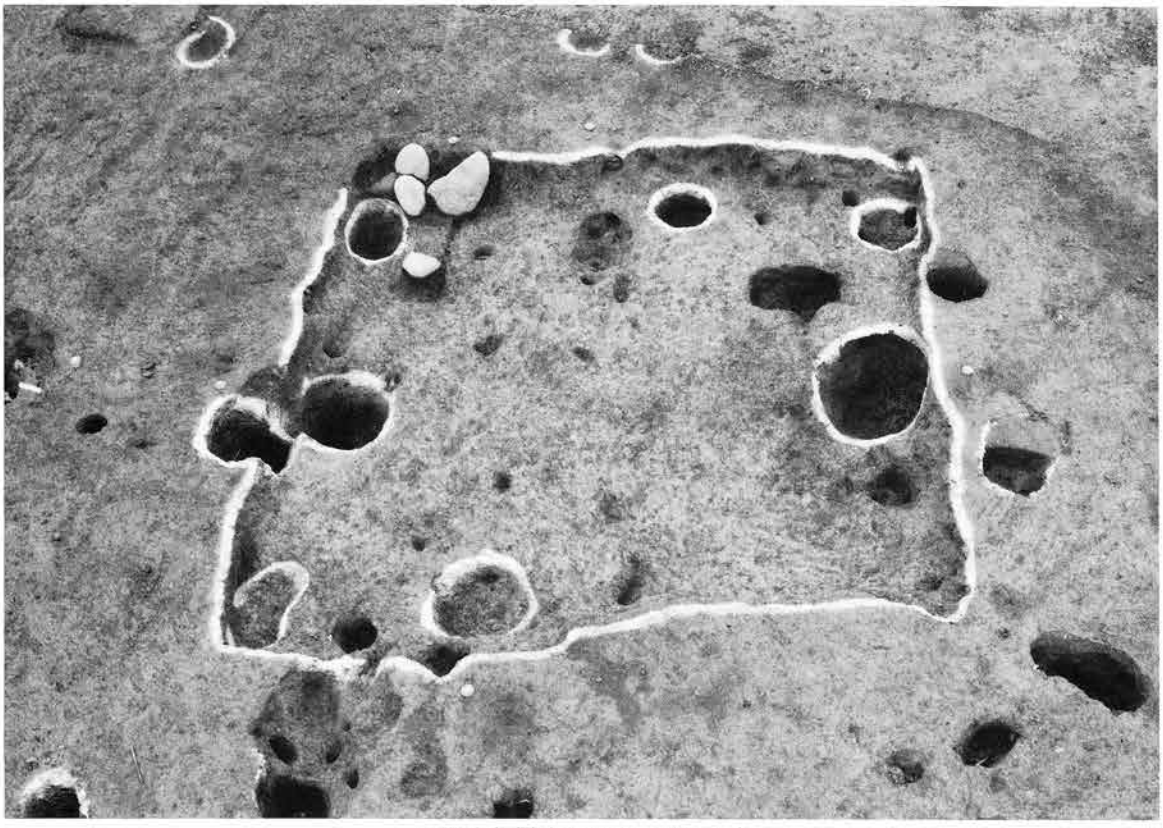
図版 6

1.旧流路完掘状況（北から）

2.旧流路遺物出土状況（東から）



1.竪穴住居遺物出土状況（東から）



2.竪穴住居完掘状況（東から）

図版８

1. ＳＢ１完掘状況（南から）

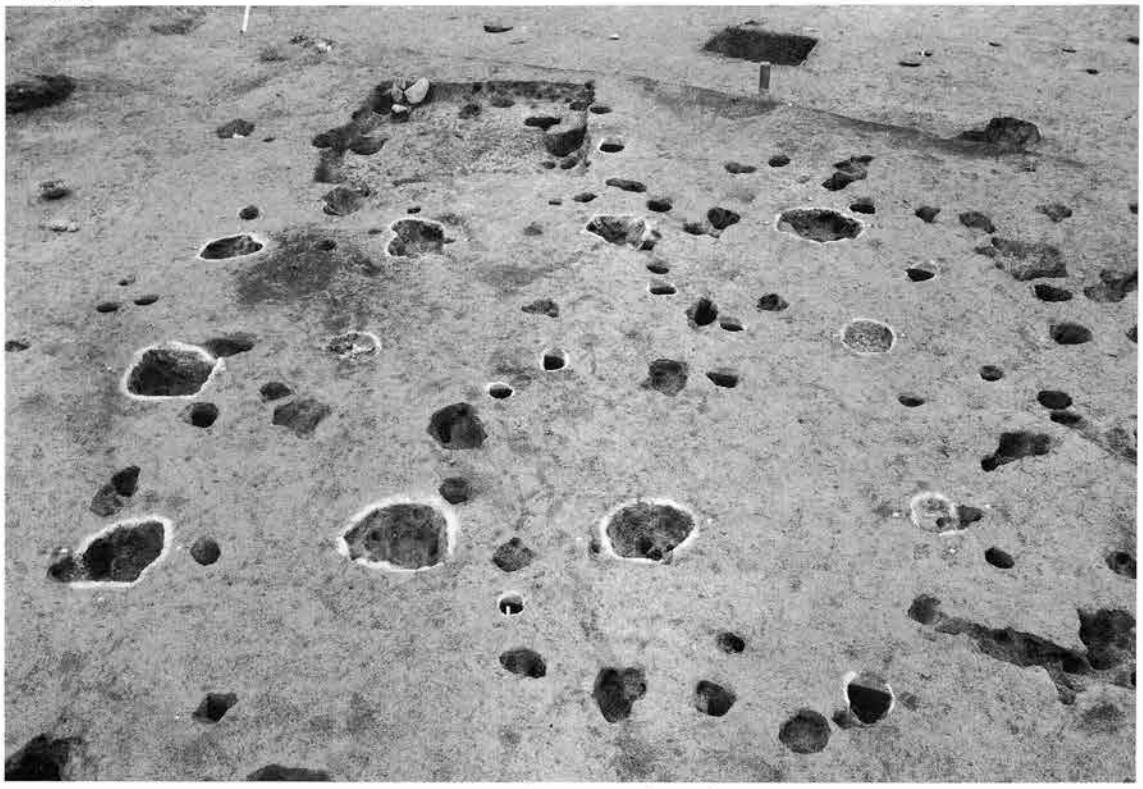
2. ＳＢ２完掘状況（南西から）

1. ＳＢ３完掘状況（南西から）

2. ＳＢ３柱穴５土層断面（南から）

3. ＳＢ３柱穴８土層断面（南西から）

図版10



1. ＳＢ５完掘状況（東から）

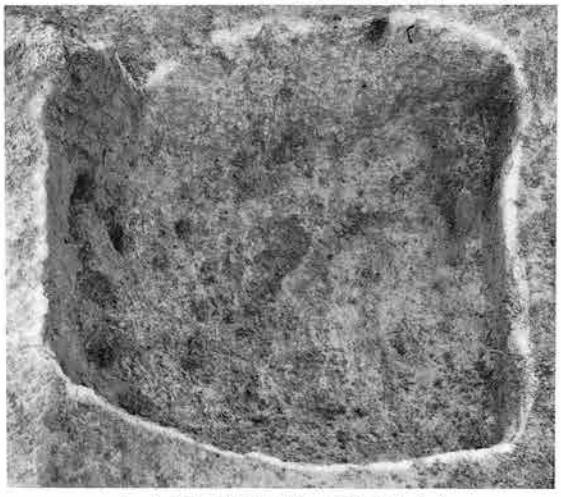
2. ＳＢ６完掘状況（南東から）

1. ＳＫ１土層断面（南から）

2. ＳＫ１遺物出土状況（東から）

3. ＳＫ２(左)・ＳＫ１(右)完掘状況(南西から)

4. ＳＫ３完掘状況（北から）

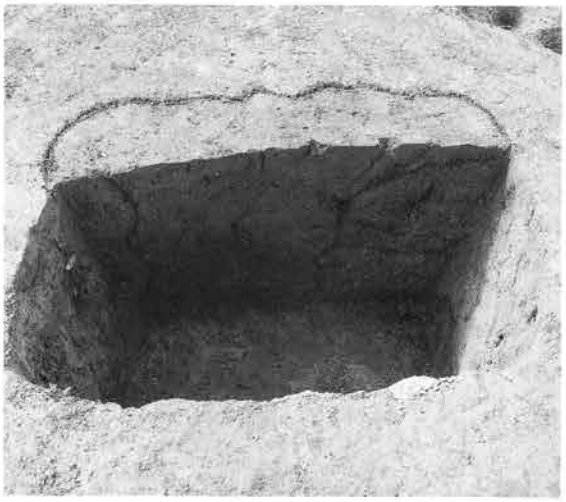


5. ＳＫ12完掘状況（南東から）

6. ＳＫ23完掘状況（南から）

図版12

1. ＳＫ７土層断面（西から）

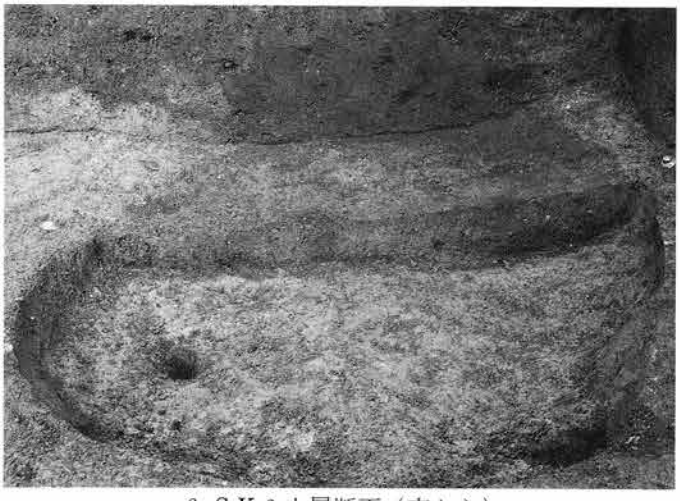


3. ＳＫ４土層断面（南東から）

2. ＳＫ７礫出土状況（南西から）

4. ＳＫ14土層断面（南から）

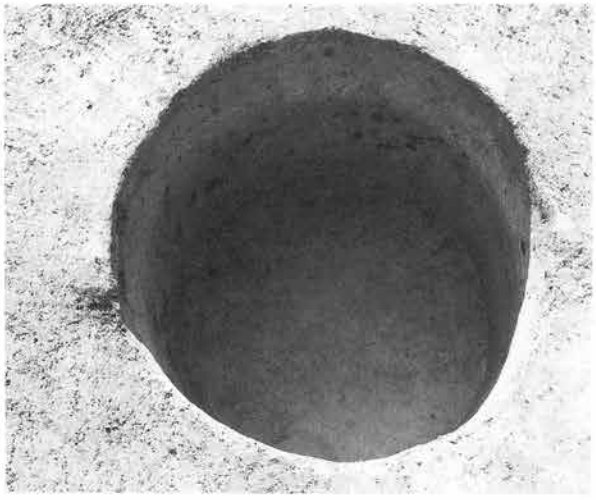
5. ＳＫ８土層断面（南から）



6. ＳＫ９土層断面（南から）

1. ＳＫ13土層断面（南から）

3. ＳＫ15遺物出土状況（南西から）



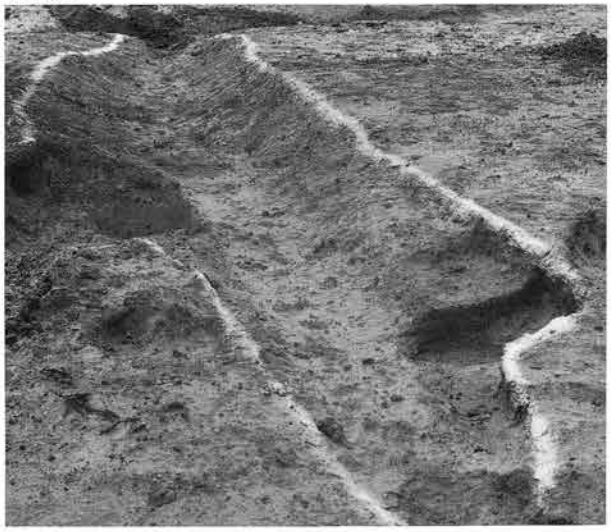
2. ＳＫ13完掘状況（北から）

4. ＳＫ15完掘状況（北西から）

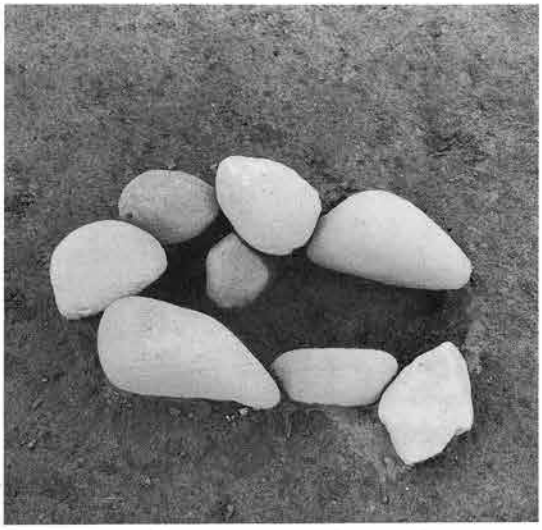
5. ＳＫ20完掘状況（南から）

6. ＳＫ22完堀状況（南から）

図版14



1.ＳＤ１完掘状況（西から）



3.集石出土状況（南東から）

2.ＳＤ１土層断面（西から）

4.焼土３土層断面（東から）

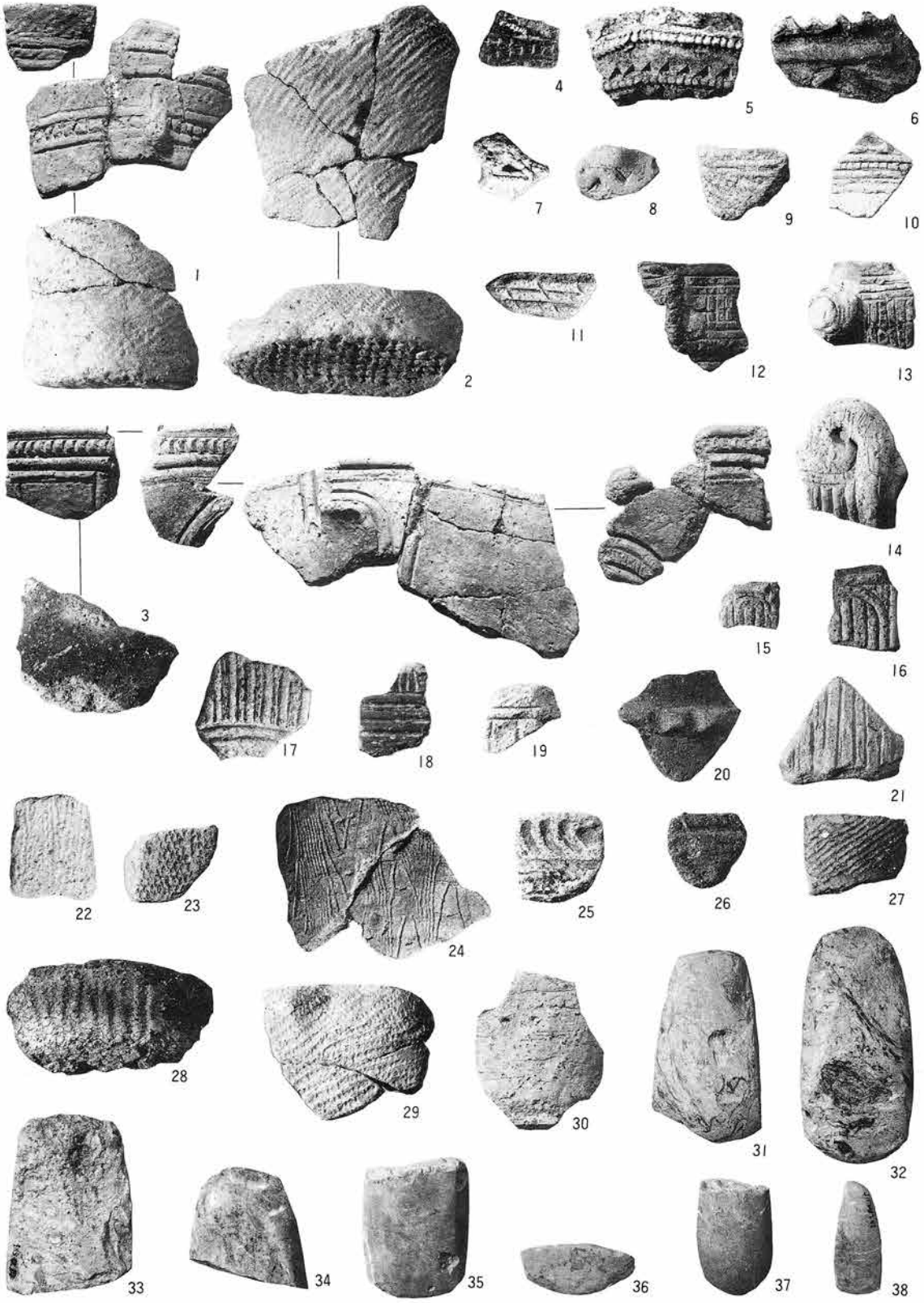
5.ＳＤ３及び周辺の全景（北東から）

1.ため池状遺構完掘状況（東から）

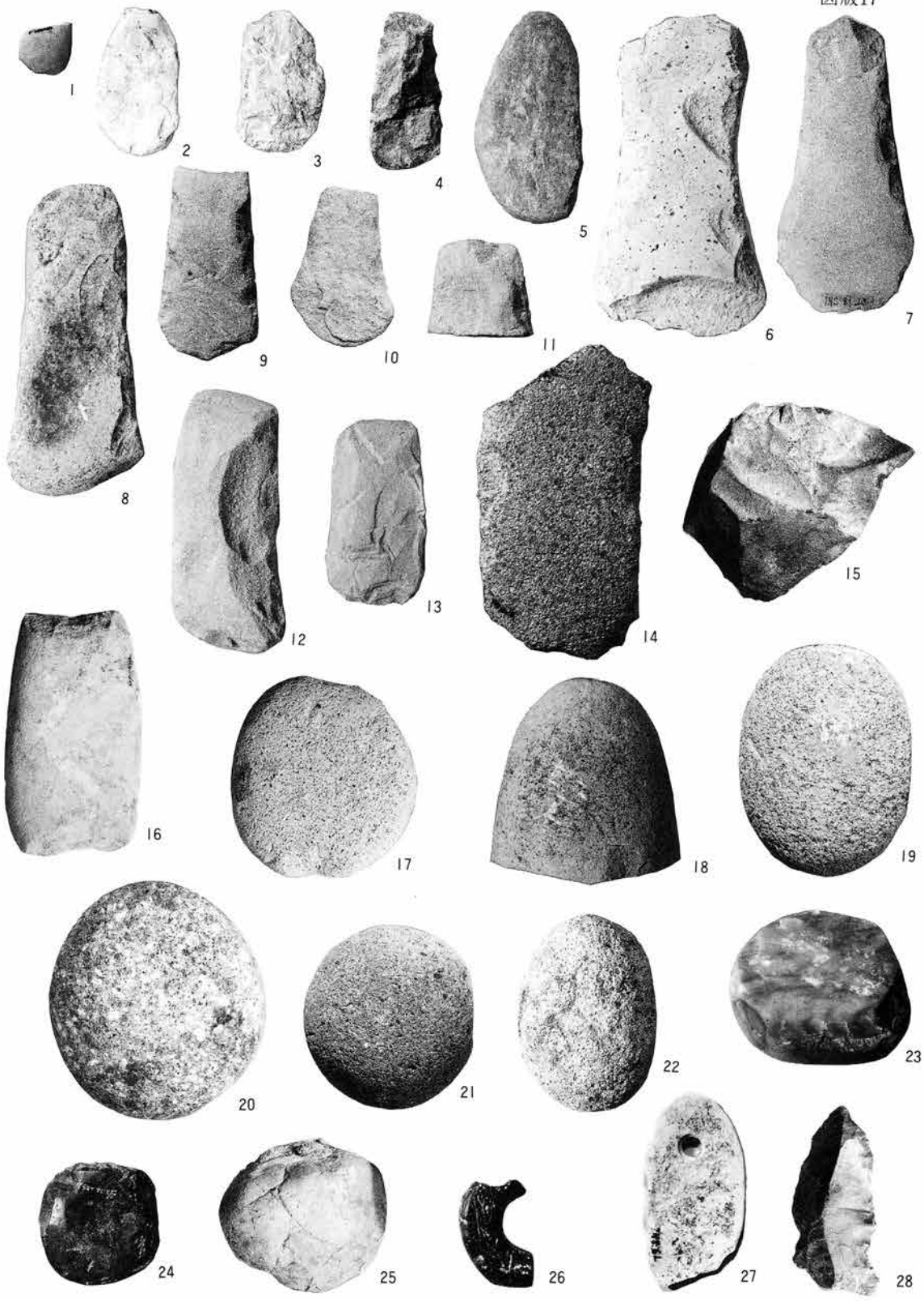
2.P240 土層断面（東から）

3.P240 遺物出土状況（西から）

図版16

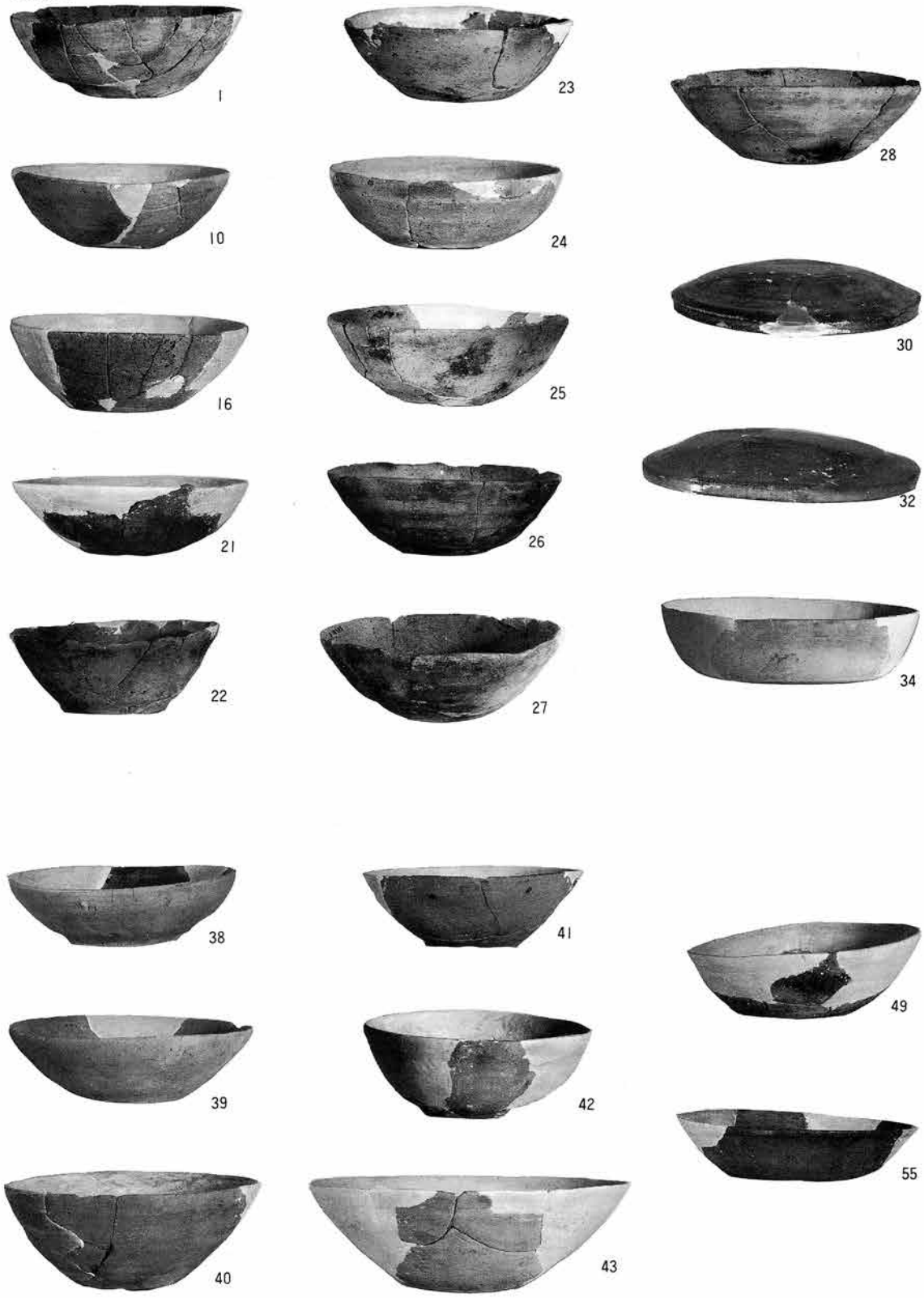


縄文土器1～30・石器31～38（1/3）

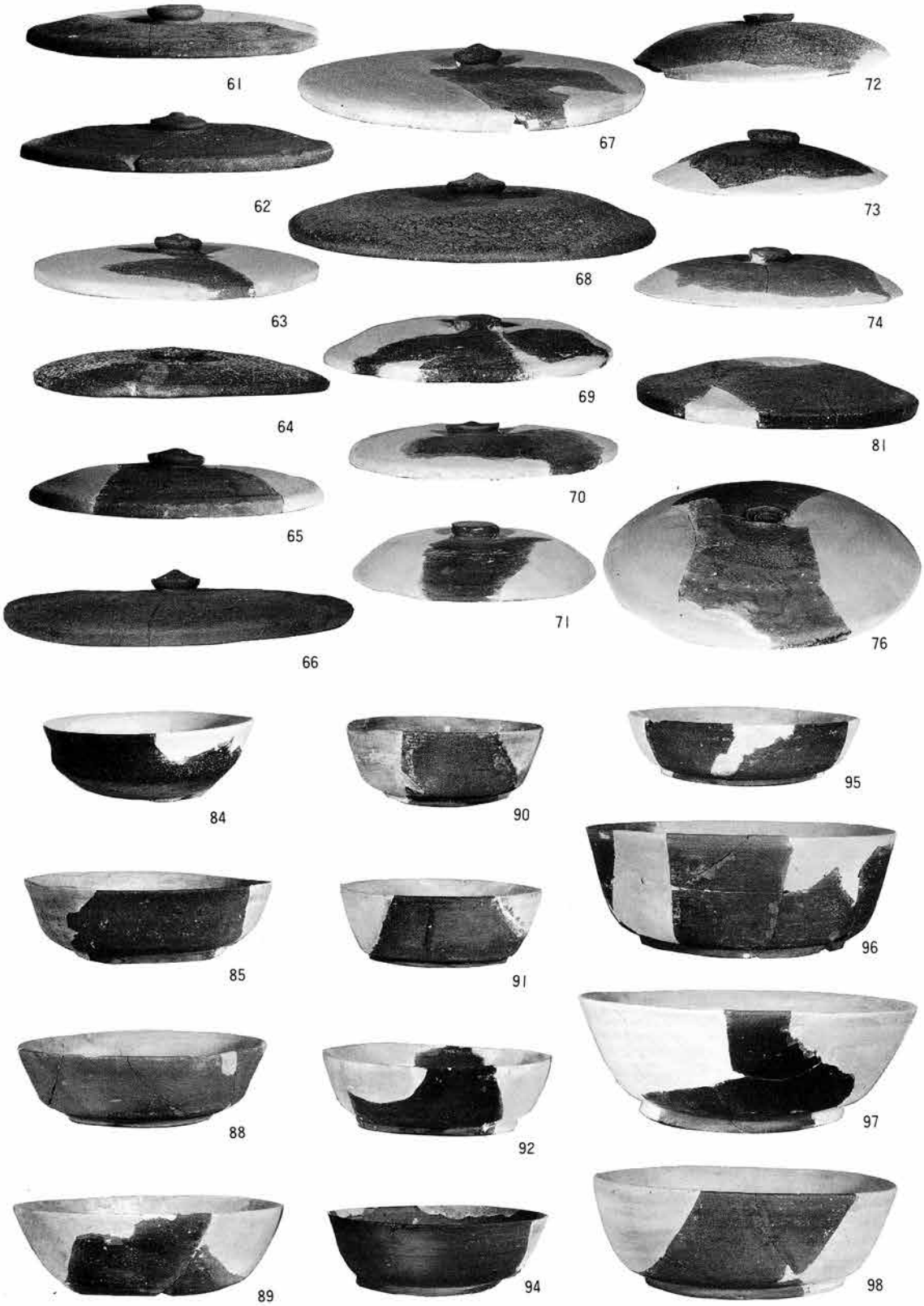


石器・石器類等1～25(1/3)・26・28(1/1)・27(2/3)

図版18

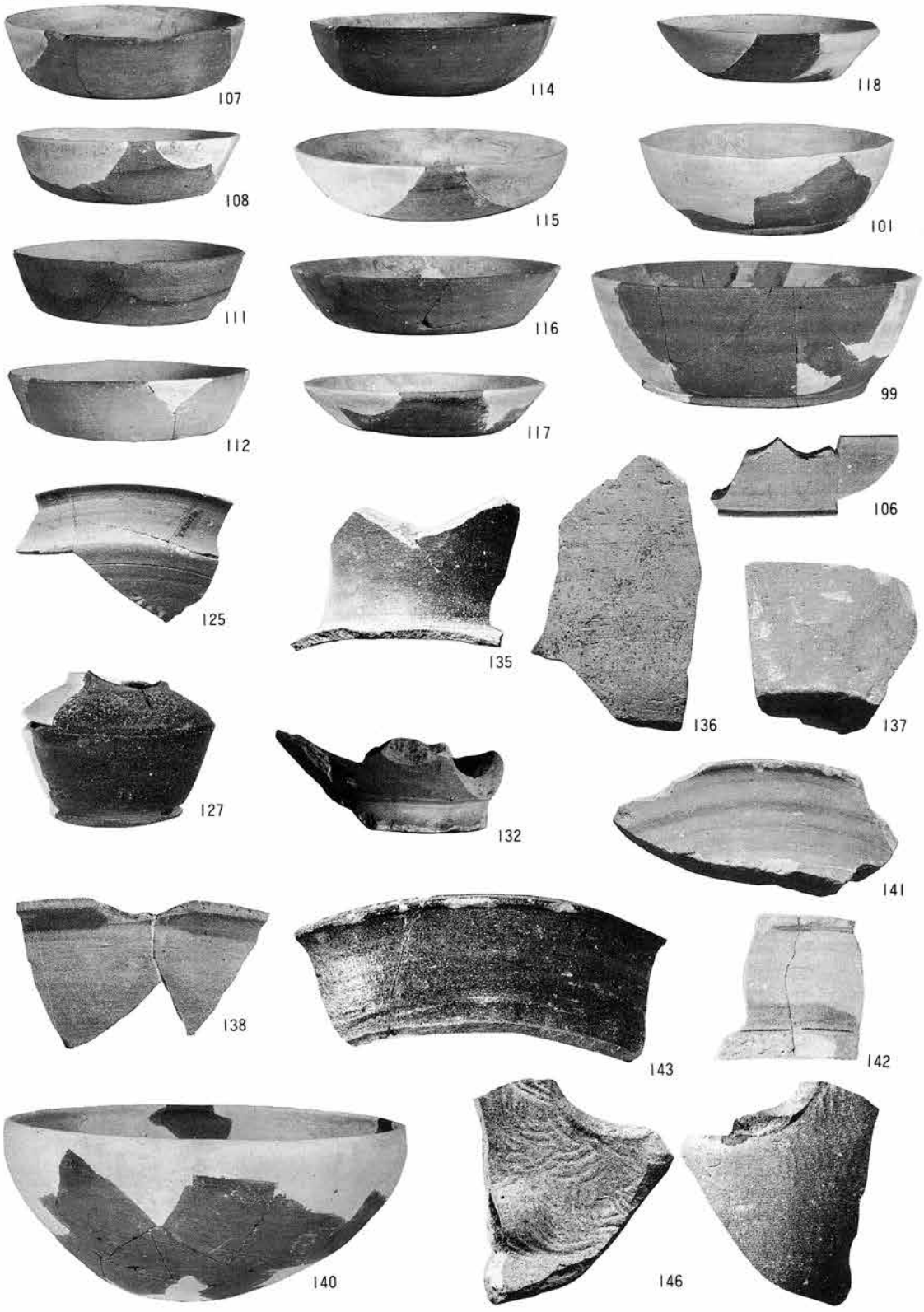


遺構出土土器・須恵器・土師器（1/3）

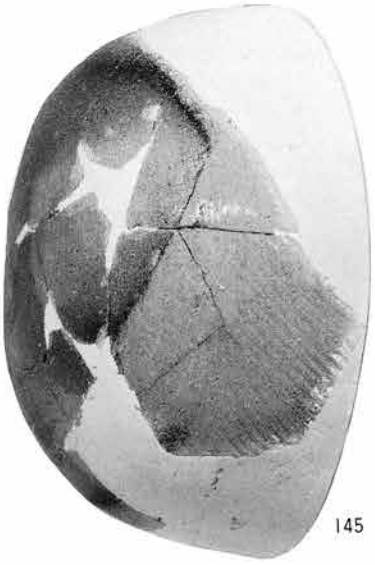


遺構外出土土器(1)・須恵器（⅓）

図版20



遺構外出土土器(2)・須恵器（1/3）


145

156

160

157

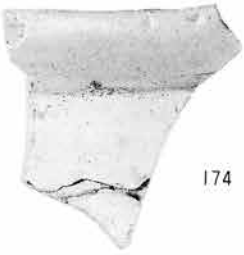
163

159

171

178

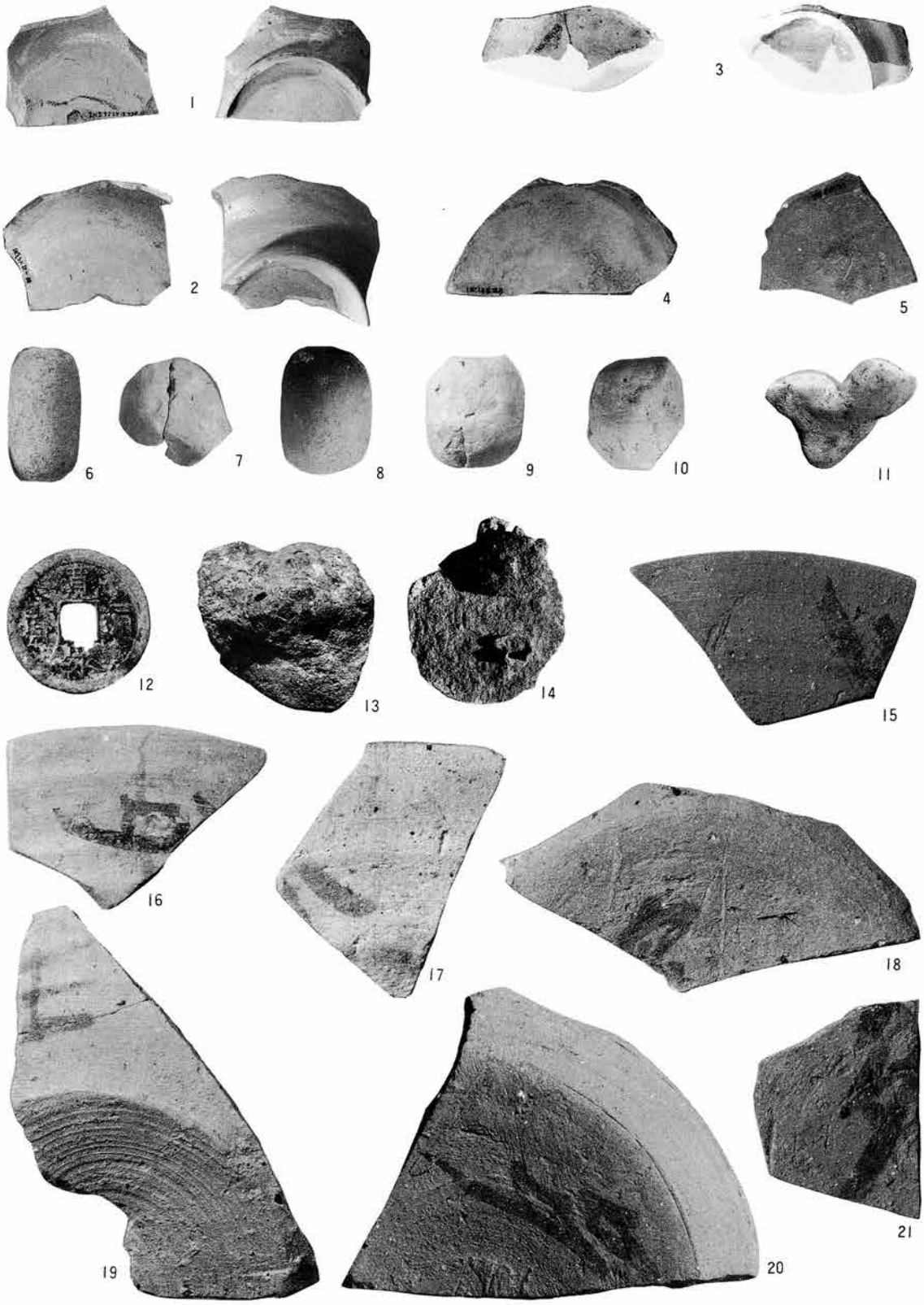
179


174

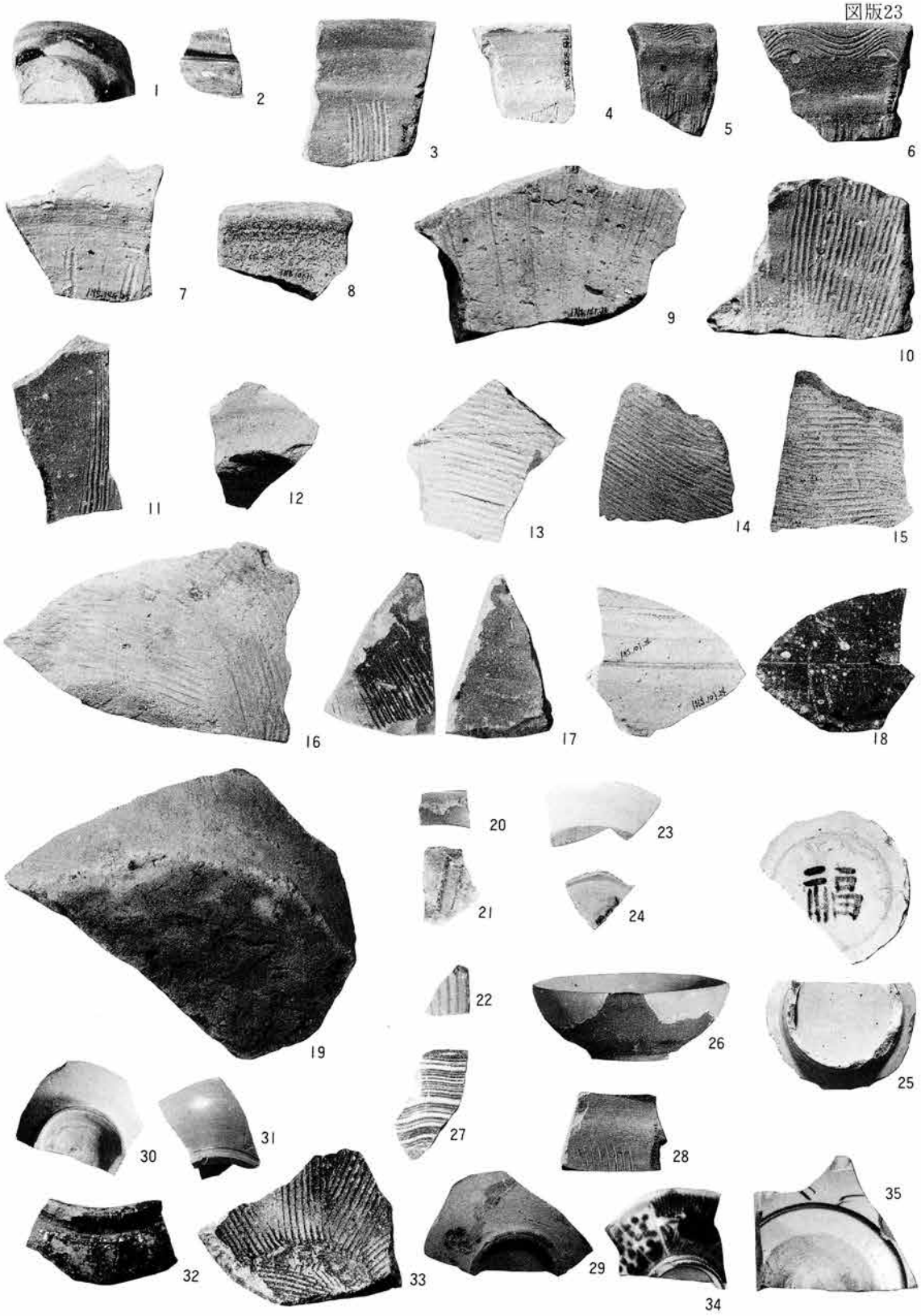
174

遺構外出土土器 (3)・須恵器(1/3)・土師器(1/3)・墨書土器(1/1)

図版22



出土遺物1～11(⅓) 13・14(½) 12・15～21(1/1)
灰釉陶器(1～3) 転用硯(4・5) 土錘(6～10) 土製品(11)
寛永通宝(12) 羽口(13) 鉄製品(14) 墨書土器(15～21)


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
福

中・近世陶磁器（1/3）

新潟県埋蔵文化財調査報告第46

北 陸 自 動 車 道

糸魚川地区発掘調査報告書II

岩 野 下 遺 跡

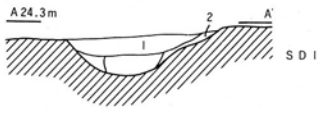
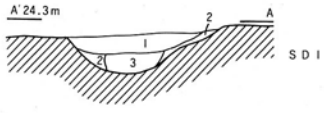
昭和62年 3 月25日　印刷

昭和62年 3 月30日　発行

発行　新潟県教育委員会

印刷　㈱ 第 一 印 刷 所

正　　誤　　表

頁	行	誤	正
21	第21図		
32	20	図版16－16～38	図版16－31～38
38	32	刷毛（棒状工具）	刷毛（板状工具）
39	21	黒色処理され磨かれている。	黒色処理されている。
47	5	篦切り未調整	篦切り無調整
49	16	**鉄鉢型土器**	**鉄鉢形土器**
53	12	棒状工具によるカキ目	板状工具による刷毛目
56	19	１）土製品（第41・42図	１）土製品（第40・41図
58	24	12は底径推定	(12) は底径推定
61	22	第44図は県内の	第４表は県内の
63	11	第44図から看取	第４表から看取
64	20	鉄鉢型土器	鉄鉢形土器
64	23	出土土器に酷似	出土土器に類似